特三捜救

タカセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特三捜救

【Ｎコード】
Ｎ２５３２Ｒ

【作者名】
タカセ

【あらすじ】
目の前で父が炎に包まれ一瞬で消え失せた。
誰に話しても信じてもらえない事態に遭遇し、父を失った女子高生筑紫優菜。
幼い妹を抱えてこれから先に不安を覚えていた優菜はある日一人の男と出会う。
黒いビジネススーツに身を包み、肩に人形のように小さな巫女姿の少女を乗せた怪しげな巨漢が告げる。
「あんた達の親父さんは生きている。でも帰れない場所にいる。

だが俺は……俺達は親父さんを助けることが出来る」

今から開幕する舞台は異界へと召喚されし勇者、聖女達の物語ではない。

当たり前であった日常から大切な者達を異界へと連れ去られた者達の物語。

彼等の気持ちを受け取り奪われた者達を奪還するために、数多くの異世界を駆け回る公務員達の話。

すべての世界へと繋がる道の始まりの場所。日本国異界特別管理区第三交差外路が所属組織『特殊失踪者捜索救助室』

通称『特三捜救』の物語である。

Ａｒｃａｄｉａ様に投稿している同作品の加筆修正及び若干の設定変更をおこなっております。

ありふれた日常の終わり

夕日が差す板張りの道場は静寂に包まれ対峙する二人の剣士の影が長く伸びる。
一人は大柄な剣士。大垂れには楠木と姓が刻み込まれている。
構えは正眼。
相手を真正面に見据えながらその一挙手一投足に対して僅かに竹刀の先を動かし牽制する。
対するは小柄な剣士。大垂れには結城の姓。
構えは同じく正眼。
小刻みに竹刀を揺らしながら欺瞞した攻め気で相手に警戒を促す。

両者の体格や動きはまったく異なっていながら、基礎たる部分は何処か似ている。
僅かなりとも剣の修練を積んだ者ならば、この二人が同じ師より教示を受けていると気づくだろう。
互いに攻め手にかけるのか、それとも先手を取った方が不利になると判っているのか、どちらも己から仕掛けようとはしない。
これが公式な大会であれば攻め気がないと両者とも指導の一つもらう所だが、今はそのような無粋な第三者は存在せず、ただ互いに全霊を傾け合うだけだ。

「せぇぇぇぇっっ！」

気勢を上げた小柄な剣士結城がすり足で前に出ながら、大柄な剣

士楠木が前に出していた右小手に目がけて竹刀をくり出す。
しかし結城の攻撃のタイミングは楠木に完全に読み切られていた。
無造作に一歩踏み出し結城との間を詰めた楠木が、前進の勢いを持って結城の竹刀へと己の竹刀を打ち合わせかちあげた。
甲高い音と共に竹刀を簡単に弾き飛ばされ、結城自身も棒立ちとなってしまう。
楠木は竹刀をかちあげた状態から無防備になっていた結城の面へと容赦なく面を打ち込む。
胸がすく快音を道場に響き渡らせながら二人の影が交差した。

「……」

余韻が消え去って静けさを取り戻した道場には床に弾き飛ばされた結城の竹刀が転がる小さな音だけが響く。
竹刀が転がる音にようやく自分が負けた事に気づき力尽きた結城は、言葉もなくその場に崩れ落ちてペタンと座り込んでしまう。
勝者である楠木も体力的にも精神的にも消耗していたのだろうか、大きく深呼吸して息を整えてから結城の側に寄ってくる。

「俺の読み勝ちだな」

最後の一本は上辺だけ見れば楠木の完勝だが、あと僅かでも早く結城の小手が入っていたのならば、結城がもっとも得意とする小手から面への繋ぎ技の流れが出来ていた。
楠木の声が嬉しそうに弾んでいるのは簡単に勝者は入れ替わっていたと判っているからだろう。

「で、ユーキこれで満足か？　１０本勝負プラス泣きの５回。これ以上はいくらお前の頼みでも勝負しないぞ。部の追い出し会に遅れちまうからな」

面を外した楠木は頭を保護していた手ぬぐいを使って汗まみれの顔を乱暴に拭く。

今日中学校を卒業した楠木は体格だけならば大人にもひけはとらないが、その顔にはどこか悪ガキじみた幼さが残っていた。

「ったく。卒業式終わりに呼び出したかと思えば、最後の勝負ってお前もほんと剣道バカだよな。しかも昔懐かしい約束まで持ち出しやがって。こっちの都合も考えろっての」

結城の頼みに嫌々付き合ったかのようにも聞こえる物言いに反して、楠木は実に楽しげに笑っている。

しかし下を向いている結城は楠木の笑みに気づかない。

ただ楠木の言葉を額面通りに受け止め悔しげに拳を握りしめる。

楠木と結城は一つ違いの幼なじみだ。二人は近所の剣道場に同時期に入門した間柄。

しかも偶然にも母親同士が同様に剣道をやっていた上に高校時代のライバルであった。

入門当初は二人は背丈もさほど変わらず、剣道を始めたばかりの初心者同士であった事もあり稽古の際に組んでいたせいかすぐに仲良くなり、親友であり良い意味でライバルといった間柄となった。

道場だけでは飽きたらず時間があれば二人で打ち稽古をし、切磋

琢磨を繰り返し互いを磨き続けてきた。
やがて強豪剣道部がある私立中学に入った楠木を追っかけるように結城も同中学に入学。
一年も経つと開英中に楠木、結城ありといわれるほどに成長し、県内では負け無し全国大会でも上位常連となるほどまでに精進していた。
しかし二人で行う勝負の戦績には、いつしか大きな隔たりが生まれていた。
楠木の背丈が伸びると共に結城が徐々に負け越し始め、ここ最近では大人並みの体格を誇る楠木に、同年代から見ても小柄な結城ではほとんど勝てる事ができなくなっていた。
極めつけは最後の稽古と称し挑んだ今日の試合だろう。
最初に取り決めた１０本勝負ではことごとく結城の打ち負け。楠木に頼み込んで何とか引き出した５本勝負でも結城は全敗を記してしまった。

「つーかよ。お前が幹事だろ。次期部長。とっとと着替えて先代部長を快く送りだせ。こちとら春からは上京して地獄の毎日なんだからよ」

座り込んだ結城の面をうりうりと揺すりながら楠木はカラカラと笑う。
楠木の態度と言葉に結城はさらに強く拳を握りしめる。
自他共に認める剣道バカである楠木は、東京の剣道強豪校のスカウトの言葉に感銘を受けていた。
それは九州でおこなわれる三大大会の一つ玉竜旗全国高等学校剣道大会が優勝旗。
『玉竜旗を東京に』

未だ成し遂げられていない目標に楠木は燃えたのか、幼なじみである結城になんの相談もせずに男子校であるその高校への進学を決めてしまっていた。

「最後くらい楽しませろっての。それに15回分の命令権だからな。なにやらせるかな。久しぶりに楽しめそうだぜ」

最後。
楠木の言葉に結城の肩がびくっと震える。
最後。そうこれは最後の機会だったのだ。
もし……もしも勝ったのなら。
東京へいくのは止めて欲しい。
東京にいくのだとしても男子校では無く共学にして欲しい
一年留年して同じ高校に通って欲しい。
一緒に剣道を続けて欲しい。
結城自身も無理難題だと判っている願いが幾つもあった。
そんな事出来るはずがないと思いながらも、だがどうしても押さえきれない思いが、結城を最後の賭へと走らせていた。
それは幼いに時に交わしたたわいもない約束。

勝負稽古で勝った方の命令に敗者は何でも従う。

楠木は負けた事自体には悔しそうな顔を浮かべるが、結城の命令にはいつでも二つ返事で楽しそうに引き受けてくれた。
勝っても負けても楽しむ事ができるこの幼なじみなら、自分の胸の中にある切なる願いを叶えてくれるかも知れない。

そんなすがるような希望を結城は抱いていた。
しかし負けてしまった。
完膚無きまでに負ければすっぱりと諦められる。
心のどこかでそんな思いがあったのかもしれない。
しかしそれも無理だった。
ただ無念で、悔しくて、どうしようもない気持ちが結城の中で渦巻き、ついには外へとあふれ出す。

「ユーキちょっとまて！？　お前泣いてんのか！？」

肩を振るわせた結城が押し殺した泣き声を漏らし始めたところで、楠木はようやくいつもと様子が違う事に気づいたのか慌てた声をあげる。

「まてまてこら！　俺は男で一つ年上！　んでお前の方はいっこ下で女だろ！　負けてもしょうがねぇんだから泣き止めって！　しかも俺の場合お前の癖が判ってるんだからある意味勝って当然だっての！」

「うっさい！　あたしの事なんにも分かんない癖に！　ユウ君のバカ！」

自分は勝った負けた等で泣いているのではない。
もっと大事な事。
間近に迫っている別れが嫌で泣いているのに、なんでこの男は気

づかないんだ。
心の底からわき上がる怒りを怒声と共に吐き出し、身につけていた小手を楠木の顔面にむかって投げつけ結城由喜は憤然と立ち上がる。
すんでの所で小手を受け止めた楠木だが、体勢を崩して尻餅をついてしまう。

「おわっ！　あぶねぇなユーキ！　防具は大事にしろよ！」

打った尻が痛むのか擦りながら楠木が立ち上がって文句を言ってくるが、こんな時でも剣道の事がまず口に出て来ることに由喜の苛立ちはさらに募る。

「判ってる！　あーもう！　東京でもどこでも好きにいけ！　この剣道バカ！」

倒れている楠木の手から、自分の小手を引ったくると由喜は道場の出口へと向かう。
判ってない。なんにも判ってない。こんなにずっと一緒にいたのに。
楠木に向かって叩きつけたい言葉が由喜の中に渦巻く。
だが今更そんな未練がましい惨めな真似はしたくない。
楠木は由喜の太刀筋や足運びの癖。確かに剣道に関しては全て判っているだろう。
だが結城由喜が楠木勇也にむける感情に対しては全く気づいてはいない。

そうでもなければずっと一緒だった自分をここまで蔑ろにするわけがないと由喜は怒りを覚える。
なんの相談もなく勝手に東京行きを決めて強豪高だから強い連中と稽古がやれるとずっと楽しそうに話していた楠木をみてどれだけが自分が落ち込んでいたと思っているんだと。

「ちょっと待てって！　負けたからって怒るな。手を抜いたらお前が怒るだろうが！」

「着替えてくんの！　ついてくんな！　これ以上近寄ったら襲われたって悲鳴あげる！」

引き留めようと肩に伸ばされた楠木の手を由喜は邪険に振り払う。

「い！？　襲われたってお前！？　……悪い」

一瞬驚きの顔を浮かべた楠木だが、面の下に隠れた由喜の顔が悲痛で歪んでいたのに気づいたのか払われた手を下ろして小さく頭を下げた。
理由は分からずとも、自分が由喜を怒らせたのだと考えたようだ。

「……」

由喜は何も言わず……言えずきびすを返した。
誰が悪いのかと言えば自分が悪いのだという事は由喜も判っていた。
もっと早くに自分の気持ちを……ずっと一緒にいて欲しいと伝えていれば、楠木が東京へと行く事はなかったかも知れない。
だがそれを伝えるには二人の距離はあまりに近すぎた。
もし万が一にも拒絶されたらと由喜は恐れ伝える事ができなかった。
最後の最後。この土壇場になっても出来ず、ただ叫き当たることしか出来ない自分の不甲斐なさが余計に情けなくなる。

「ったくしょうがねぇな。待ってるから着替えたら声かけろよ……こっちだってあんまりいい気分じゃねぇんだぞ。自分の彼女を滅多打ちにすんのは」

（何がいい気分がしないだ！　あたしとやるときだけやたらと嬉しそうに全力で打ってくる癖に！　自分の女って何様だっ……）

苛立ちを覚えていた由喜が、楠木の言葉の意味に気づくには数秒を要した。
硬直し歩みを止めた由喜は驚愕の声をあげながら振りかえる。

「……はぁぁっ！？　ち、ちょっとそれって！？　な……」

何言ってんの！？

言葉の意味を聞き返そうと由喜が振り返った瞬間、視界がまばゆい光に包まれる。

（剣に生きる勇者よ。我が願い。我が祈りによりこの地に現れたまえ）

急速に薄れゆく意識の中で由喜の脳裏には同じ年頃の少女の声が響き渡っていた。

「っ！？　車のライトか？……あれユーキのやつどこいった？　怒って先に行きやがったか」

目がくらむほどの強い光源に目をふさいでいたのは数秒ほどだろうか。

武道場のすぐ横は学校の敷地外で細いが裏道として車の通りが盛んな道路がある。

この道を通過する車のライトが飛び込んで来て、稽古中に邪魔さ

れたのは二度や三度じゃない。
それに目が眩んだ僅かな時間に先ほどまでいた小柄な少女の姿が消え失せていた事も、楠木はさほど不思議にも思わなかった。
結城由喜という少女はとにもかくにもすばしっこい。
ずっとその姿を見て練習をしてきたから対応が出来るが、初見でやり合ったら負けているだろうなと呑気に考えてから、理由は分からないが怒らせたなとばつが悪そうに頭を掻く。

「そこらの陸上部より早いってのがあいつの武器なんだけど、こういう時は参るよな」

楠木としても一年間とはいえ一人地元に残していく年下の恋人と喧嘩別れというのは避けたい。どうやって機嫌をとるかと頭を悩ませるところであった。

楠木勇也と結城由喜の間には大いなる認識の違いが存在した。
いつも一緒に朝早く登校し学校で朝稽古。
昼食を道場で一緒にとった後は昼稽古。
放課後も最終下校時間まで夜稽古し一緒に帰る。
休日ともなれば昼は部活。夜は昔なじみの道場で稽古。
由喜の誕生日やクリスマスには新しい竹刀やら昔の剣術書を買い求めプレゼントする。
大晦日には二年参りした後に道場の大人に混じって初稽古に一緒に参加。
夏休みや冬休みの長期休暇ともなれば、毎日稽古の日々だ。
四六時中一緒にいるのだから結城由喜が自分の恋人であると楠木勇也は認識していた。

何より由喜が好意を寄せてくれている事も昔から楠木には判っていた。
楠木にとって今更俺たち付き合っているよなと確認するほどの事でもなく、横にいて当たり前の存在だと思っていた。
高校進学にしても、東京に出れば強豪と出稽古がしやすくなる最高の環境というのが強いが、由喜の腕ならば同じように東京の高校からスカウトが来るだろうと確信している。
一緒に廻ってみるのが今から楽しみだと気軽に考えていた。
つまりの所、楠木勇也の中にはとことんまでに剣道のことしか頭になく、結城由喜も同種だと思っていた。

「とりあえずとっとと着替えて自転車置き場で待ってるか」

いつでも由喜に会うことができる。
自分の認識が非常に甘い物であったことを楠木が痛感するのはこのすぐ後の事だった。

今から開幕する舞台は異界へと召喚されし勇者、聖女達の物語ではない。
当たり前であった日常から大切な者達を異界へと連れ去られた者達の物語。
彼等の気持ちを受け取り奪われた者達を奪還するために、数多くの異世界を駆け回る公務員達の話。

すべての世界へと繋がる道の始まりの場所。
日本国異界特別管理区第三交差外路が所属組織『特殊失踪者捜索救助室』
通称『特三捜救』の物語である。

依頼篇　山奥の名医？

本日３月１８日早朝。広陵市笹谷において、医師筑紫亮介さん（４５）の住居兼診療所を焼く火事が発生しました。

この火事によって筑紫さんの住居兼診療所が全焼。

筑紫さんの長女優菜さん（１７）と次女優陽ちゃん（５）は自力で避難し無事でしたが筑紫さんは逃げ遅れたと見られ、現在捜索が続けられております。

筑紫さんは若い頃からＮＰＯ法人国境なき医師団へと参加し、帰国後は無医村へと志願赴任していた事から『山奥の名医』の愛称で親しまれていました。

筑紫さん宅の焼け跡からは筑紫さんの遺体は発見されず、所在は未だ不明なままです。

筑紫さんには多額の借金があった事が判明しており、警察では筑紫さんが何らかの事件に巻き込まれた可能性もあるとみて捜査を開始したとのことです。

『山奥の名医』の黒い疑惑。

筑紫亮介医師が理事の一人として以前に名を連ねていて破綻した『限界集落医療振興財団』には詐欺、出資法違反容疑で捜査が今も続けられており、捜査関係者の一部からは自宅に多額の火災保険が

掛けられていたことから、保険金目的の自作自演ではないかと……
……

「筑紫どうしても無理か？　最後の玉竜旗をお前も楽しみにしていただろ……それに生活面は援助してもらえるなら、引退する夏までは部活を続けても良いんじゃないか」

「すみません。小学校に入学したばかりの妹の面倒を見る時間と少しでも学費の足しにするためにアルバイトの時間が必要なんです。とても剣道を続けられる状態じゃなくて。先生に大将に選んでいただいた玉竜旗を諦めるのは……みんなに迷惑を掛けないためにも退部させてください」

生徒指導室の椅子に腰掛けて対面する困り顔の部活顧問に対して、

筑紫優菜は申し訳ない気持ちで長いポーニーテールが机につくほどに深々と頭を下げる。

『玉竜旗を広陵に』

毎年7月下旬に福岡でおこなわれる高校剣道三大大会の一つ玉竜旗全国高等学校剣道大会。

常に目標は高く優勝を目指せ。

元は東京の強豪校にいたという顧問の口癖となっている言葉だった。

優菜も感銘を受け鍛練を重ねてきたが、今の状況では剣道はこれ以上続けていけそうになかった。

信頼していた人に騙され医療財団詐欺の主犯とされかかった父は、みずから借金を被ってまで被害者の方々に弁済をしていたぐらいのお人好しだ。

金銭感覚に乏しい父に代わり優菜が辛うじて廻していた家計は借金だけでも大変だったのに、今回の火事と父の失踪で完全にパンクしてしまった。

だが不幸中の幸いと言うべきか、人望だけはあった父のおかげで、親類や近所の患者さん。それに以前父が赴任していた村の方達からのカンパで高校卒業までの生活を援助してもらえる事にはなっている。

今借りているアパートの大家のおばあさんも父の患者の一人で、部屋を格安で貸してくれた上に優菜達の保護者にまでなってくれた。

おかげで姉妹揃って施設に入る事もなく、慣れ親しんだ街から引っ越しをせずに済んだ。

周囲の人に恵まれていることに優菜は深く感謝すると同時に、ここまで援助をもらいながら今まで通りの高校生活を過ごすのは申し訳ないと思ってしまう生真面目さがあった。

学生の本分として学業に励むのは当然のこととしても、それ以外の空き時間は、たった一人の家族となってしまった妹の為と、少しでも生活費兼学費を稼ぐための時間に当てると心に決めていた。

とても今までのように部活動に割いている時間はとれそうもない。

「まぁ待て。ほら親父さんがひょっこり戻ってくるかもしれんだろ。そうなればいくらかは好転するだろ。決めるには早くないか？」

面倒見のいい顧問の言葉は、優菜を気遣っての物だろう。

だが顧問の慰めが優菜には痛かった。

父は行方不明なのではない。この世にもういないのだと優菜は漠然と感じている。

あの日。火事があった朝。優菜たちの目の前で父は燃えさかる炎に包まれて忽然と消え去った。

父を一瞬で消し去った火は瞬く間に周囲に燃え移り、優菜は妹である優陽を連れて逃げるだけで精一杯だった。

一瞬で炎に包まれ父が消えたという優菜の証言を警察も消防も保険会社も親類も信じてはくれなかった。

可哀想に火事で恐慌状態に陥り幻覚を見たのだと、口をそろえて慰めて来るだけだった。

しかし優菜はあの光景が幻覚だったと思う事などできない。出来るはずもない。父が消え去ったのを確かにこの目で見たのだから。

しかし声高に主張する度に哀れみの目をむけられた。誰にも信じてもらえないとこの二ヶ月で優菜は学んでいた。

だから信頼する顧問に対しても真実を告げず優菜は頭を下げるだけに留める。

「いえ……もう決めましたから。本当に申し訳ありません。妹を迎えにいく時間なのでこれで失礼します」

優菜は立ち上がると横に置いてあった長年愛用していた竹刀と防具一式を担ぐ。
愛用の道具達は部室に置いてあったために難を逃れたが、これを身につけるだけの余裕が再び訪れるのはいつになるのか……そんな日がまた来るのかすら今の優菜には判らない。

「筑紫。籍はそのままにしておく。いつでも戻れるからな」

扉へと手をかけた優菜の背に顧問が呼びかけた。
振り返った優菜は何も答えず、ただ深々と一礼をしてから生徒指導室を後にした。

筑紫優陽は困っていた。
高い高い木の天辺の枝に引っかかっている自分の帽子を見上げて、どうしていいのかわからず半べそをかいていた。
帽子は風に飛ばされたのでも、優陽自身が引っかけたのでもない。

同じ小学校に通う男の子達に小学校近くの公園まで無理矢理に連れ出され、被っていた通学帽子を木登りの得意な男の子によって天辺に引っかけられてしまったのだ。
優陽は虐められていた。
その原因は至極単純だ。
憶測と悪意に満ちた週刊誌の記事。
噂話で話す父母達。聞く子供達。
保険金詐欺疑惑のレッテルを貼られた父。
父＝悪者。そしてその父の娘である優陽も悪者。
子供達の単純で拙い判断力が、優陽を悪者だから成敗するという正義という名の虐めにあわせていた。
小学校の先生達に泣きつけば少しは収まるだろう。だがそれは出来ないと優陽は子供心に思っていた。

（お姉ちゃん……泣いちゃう……そんなのいや）

姉には知られたくない。知って欲しくない。
優陽達の目の前で父が消え去った日から、姉が何度も泣きそうになるのを堪えて頑張っている姿を見ていた。
大好きな姉をこれ以上悲しい目に遭わせたくない。
それにあの帽子は優陽にとって大切な宝物だ。無くすわけにはいかない。
優陽はごしごしと目をこすって涙を拭うと、何とか自分で木に登って帽子を取ろうと決意する。
早く取って学校に戻らないと姉が迎えに来てしまう。
地面に座り込んで靴と靴下を脱ごうとしたとき、優陽の目の前が暗くなった。

「こらこら。そこの泣いてるちび……まさかと思うが横の木に登ろうとかしてないだろうな？　危ないから止めとけ」

いつの間にやら優陽の横に見上げるほどの大男が立っていた。
短く刈った髪。春用の薄手のコート。その下には少し窮屈そうにスーツを着込んでいる。
背中には姉の持つ竹刀袋によく似た長細い袋を担いでいた。
大男はどこか意地悪な目で優陽と横の木を何度も見比べてから、にやりと笑う。
これは無理だろうとでも言いたげだ。

「……おじさん誰？」

優陽の率直な物言いに大男の顔が引きつった。
どうやらおじさんと呼ばれたことがかなりショックのようだ。

「お、おじ……25ってもうあれなのか……通りすがりの正義の味方のお兄さんだ。前半は忘れてもいいからお兄さんの部分は覚えとけ。ちびっ子」

だがすぐににやっと笑うと、泣いている優陽を慰めるように乱暴に頭をなでつける。
優陽の数倍は身体は大きくて口調も乱暴。人見知りな所がある優陽は見ず知らずの大人を普段なら怖く感じるが、この大男は不思議

とあまり怖いとは思えなかった。

「……帽子。取らないとダメなの……宝物」

だからだろうか？
優陽は帽子が取れなくて困っていることを大男に伝えてみた。
大男の目線が帽子を優陽の指指す先を辿り木の天辺へと向く。
弱い風でフラフラと帽子が揺れる。ただ引っかけてあるだけのようだが、自然と落ちてくるのは期待できそうもない。

「ん。あれか。お前が自分でやったのか？」

優陽は無言で首を横に振る。
その目にじんわりと涙が浮かび、優陽がめそめそと泣き始めると慌てた大男はしゃがみ込んで頭をさらになでつけた。

「泣くな泣くな。なんか俺が泣かせてるみたいだろうが……ったく。しょうがねぇな。どうせ悪ガキ共だろ。まかせろ取ってやるよ。その代わり『お兄さんお願い取って』って頼んでみろ」

優陽の目を真正面から見据えた大男は、意地悪な笑みを浮かべてみせる。
優陽におじさんと言われたことが気になっているようだ。
姉の優菜よりも年上の大人はずなのに、その顔はどこか子供っぽ

い。

「お兄ちゃん……お願い優陽の帽子を取って」

「よし任せとけちび。じゃねぇな。ユウヒ？ってのが名前でいいのか」

「うん」

「判った。お兄ちゃんに任せとけ。ユウヒ」

優陽の頼みを大男は快諾してから横の木を再度見上げた。
どうやって取ろうかと思案しているのか腕を組み、木をつぶさに観察しはじめる。

「途中の枝が細いな。俺が登ると折れるな……姫さん……は無理か。力を使わせるのは論外。かといって登ってもらって着物が破れたりした日にゃ何を請求されるか。縁様は……雑用をさせるなって怒るわなぁ。あの刀神様はほんとに日常でつかえねぇな」

大男はぶつぶつ言い、たまに人の悪い笑顔を浮かべる。
なにやらとても楽しそうだだが優陽の帽子を取ってやろうという気持ちが子供の優陽にも伝わってくるくらいにその目は真剣だ。

真面目に楽しんでいるとでも言えばいいのだろうか。

「そうなると……怒鳴られるの覚悟でいくか。慣れ親しんでるのが一番ってな」

考えが纏まったのか大男は頭を掻いてからにやりと笑う。
片膝を突いて背中の長細い袋を降ろすと幾重に巻きつけていた紐をほどいていく。
大男が袋から取り出した物を見て優陽は不思議に思い首をかしげる。

「それって竹刀？」

胴がほっそりとした手元から剣先まで真っ直ぐ伸びる竹刀。しかも真っ黒だ。艶々と光沢が輝く墨で染め上げたような漆黒の竹が使われている。
姉の持っている物とは形も色が違うが、その形はどう見ても竹刀だった。

「お。ユウヒよく知ってるな偉いぞ。ちょいと特殊な竹刀だけどな。縁って銘のな」

「えにし？」

「おう。関係とか繋がりとかを現すって言葉だな。まぁ。ここでユウヒにあったのも何かの縁ってな」

大男はカラカラと楽しげに笑うとすっと立ち上がって竹刀を右腕に持って一振りしてから帽子へと目をむける。
姉は竹刀も刀だと言っていた。まさか竹刀で木を切るつもりなんだろうか。
優陽が見上げていると大男は全くの予想外の行動に出た。

「おりゃっ！」

大男は右腕を大きく振りかぶったかと思うと、いきなり竹刀を空中に向けて投げつけた。
黒い竹刀はくるくると回りながら宙を飛び瞬く間に木の天辺まで到達する。
上手に投げられた竹刀が切っ先で優陽の帽子を弾き飛ばした。
弾き飛ばされた帽子と勢いを無くした黒い竹刀が全く別の方向へと落ち始めると、大男は自分の竹刀には目もくれず、風に流される優陽の帽子を追いかけはじめた。
巨体のわりに動作は機敏だ。
大きなスライドであっという間に帽子の真下に着くと、コートの裾を軽く翻してジャンプして地面に落ちる遙か前に優陽の帽子を空中で軽々とキャッチする。

「お兄ちゃん凄い！」

優陽の歓声に大男は帽子を高々と掲げて答えた。
無事に取れたことが我が事のように嬉しいのだろうか、晴れ晴れした笑顔を浮かべている。

「破けてないよな……っと優に陽で優陽ね……ん？」

帽子が無事なのか確かめ始めた大男は内側に書かれた優陽の名前を見て呟き、何か気になったのか目をつぶって軽く考えてからポンと手を打った。

「おぉ……こりゃほんとに縁ってやつだな。やる気が出るわ」

小さく感嘆の声をあげた大男が優陽を見て興味深げに一つ頷いた。
優陽を見る瞳は怖いほど真剣な色を浮かべていたが、優陽が気づく前にすぐに楽しげな色に戻っていた。

「ほれ優陽。取ってやったぞ」

「うん！」

大男がこっちに来て取りに来いと手招く。

笑顔を浮かべた優陽が大男の横に走り寄ろうとした時、鋭い声が公園に響く。

「優陽！」

それは姉。優菜の声だった。

小学校の図書室で待っているはずの妹がいつの間にやら姿を消していたと聞いた時、優菜の顔面は蒼白に染まった。

父が消えてから下世話なマスコミや怪しげな者達から話しかけられたは一度や二度ではない。

そんな輩は優菜は相手にせず追い払ってきたが、ひょっとしたら黙りの優菜に業を煮やし優陽の方に接触してきたのかもしれない。

小さい優陽には父が消えた朝の記憶は辛すぎる。今でも夢でうなされているくらいだ。

それに父が訳も分からずいなくなってしまったのだ。もしかしたら優陽まで……

想像したくもない最悪の予想に、優菜は気がついたら小学校を飛

び出していた。
当てもなく飛び出した優菜だったが、なぜか優陽の声が聞こえたような気がしその方向へとひた走っていた。
微かに響きなんと言っているのかも判らない声。だが絶対に妹の物だと判る。理由は分からない。でも確信していた。
声が聞こえる方向へとひた走った優菜は公園へと辿り着き、そしてこの世で最後の家族になってしまった妹を見つけを大声で呼んでいた。
次いで妹が大事にしている帽子を持つ巨漢の姿を目にすることになり、優菜の心に怒りの火がつく。

「あんた！　あたしの妹を勝手に連れ出してなにしてんの！！！！」

優陽は良い子だ。待ち合わせをしているのに勝手に抜け出したりしない。状況から考えればこの巨漢が優陽を連れ出したに決まっている。
一瞬で結論づけた優菜は背中に手を伸ばすと大切にしていた防具を投げ捨てる。
次いで竹刀袋を引きちぎるように無理矢理外して中から愛用の竹刀を引き抜き、そのまま一気に距離を詰めて右上段からの袈裟切りを打ち下ろした。
しかし優菜の渾身の一撃は、見た目とは裏腹に機敏な動きを見せる巨漢に簡単に躱さえた。
それどころか切り上げから突き。さらに右袈裟で再度打ち下ろしと優菜が打ち込む追撃もひょいひょいとかわしていく。

「いやいや。っと。ちょっと待て。なんか誤解があるぞ」

何を言い訳がましい。
巨漢が何かを言いつのろうとするのを無視して優菜がさらに追撃しようとし、

「楠木ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！！！！！！！」

優菜よりも遙かに強く鋭く怒気を秘めた声が周囲に響きわたる。
あまりの怒りの強さに優菜の動きも思わず止まった。
怒声に反応した巨漢がなぜか空を見上げ、顔を青ざめさせる。

「げ！　縁様。ちょい待て！　訳ありのうえ今取り込みちゅ！　っが！！」

巨漢は何かを言いかけていたが、次の瞬間矢のような勢いで天から降ってきた何かが喉元に食い込み、苦痛の声をあげて弾き飛ばされていた。
地面に倒れ込んだ大男の首筋から離れると”それ”は音もなく空中へと浮かび上がる。

「貴様！　妾の神聖なる宿りを投げつけ、あまつさえ小娘の帽子を優先するとは何事じゃ！　我が神官としての心構えを骨の髄まで叩きこんでくれる！」

「え……？」

優菜は呆然とし驚きの声をあげる。

古めかしい巫女装束を身につけ世にも恐ろしい形相で巨漢を睨みつける掌大の年若い少女が空中に浮いていた。

あまりに現実味のない少女の姿に、自分は白昼夢でも見ているのかと疑ってしまう。

「……お人形さん？」

いつの間にやら近付いていた優陽にも同じ物が見えているようだ。首をかしげている。

人にしてはあまりにも小さすぎる。

人形にしてはその肌の色艶や血色の良い唇が生々しすぎる。

みた事のない生物。たとえるなら羽のない妖精とでもいえばいいのだろうか。

姉妹の様子に怒り心頭といった表情で怒鳴っていた少女が反応した。

「ん？　なんじゃお主ら妾が見えておるのか……待てこの気配は……木偶の坊！　接触は後日という話では無かったのか？　とっとと立て説明せよ」

優菜達の顔をまじまじと見た少女は眉根を顰めると、空中を歩く

ように移動し未だ倒れて咳き込んでいる巨漢の頭へと近づき蹴りつける。

「ごっ！……ほっ！……無茶しないで貰えると大変ありがたいんですけどねぇ。偶然ですよ偶然。たぶん例の姉妹だと思いますけど、ちょっと写真と違うから……ちょい待っててください。確認しますんで」

最初に蹴りつけられた喉をさすり巨漢は立ち上がると　地面について汚れたコートを軽く手で払いながら言うと、宙に浮かぶ小さな少女が鷹揚に頷く。

スーツの襟元をただした巨漢は優菜へと目をむけるそして深々と一礼する。

「お二人は筑紫亮介さんのご息女。筑紫優菜さん。それに妹の優陽さんですね？　私は日本国外務省特殊事案担当局に務めています楠木勇也と申します。どうぞこちらをご確認ください」

巨漢……楠木と名乗った男は名刺と顔写真が載った身分証明署を提示し、優菜へと差し出す。

手帳サイズの身分証には男が言った所属名や名前が記され、いくつかの印章が押されていた。

「お兄ちゃん……なんか違う人みたい」

急に改まった口調となった巨漢を見て、優陽が目を丸くする。
先ほどまでの乱暴で気安い口調から、使い慣れていないと優菜にもすぐに判る下手な敬語。
さらに不信感を強めた優菜は一歩前に出て優陽を背中に隠し、手に持っている竹刀を再度突きつける。

「……嘘っぽい。何が目的？　この小さな子って何者？」

こんな身分証を見せられても、本物かどうかなんてただの女子高生である優菜には判断のつけようがない。
空中に浮かぶ人間ではない少女を連れた正体不明の人物の言う事など、信じられるはずもなかった。
それに不可思議なことは……炎に消えた父親の事を嫌でも連想させて、余計に苛立つ。

「ふん。ガラでもない格好つけしおって、全く無意味ではないか。時間の無駄じゃ」

少女が小さく鼻を鳴らし無駄なことをしていないで話を進めろと巨漢を剣呑な瞳で睨みつける。

「そうは言いますがどうみても怪しいでしょうが俺。つーか縁様が主に。だから態度を真面目にしてみたんだけど……今更あんま意味ねぇわな」

がしがしと頭をかいた楠木は元の口調に戻すと、受け取っても貰えない名刺をくしゃっと握りつぶして身分証を無造作にポケットにしまってから優菜へと再度目をむけた。

「外務省職員ってのは嘘だが一応日本の公務員で仕事は警察関係みたいなもんだと思って欲しいんだが……無理っぽいよな。悪い。ちょっと待っててくれ」

睨みつけてくる優菜に対して苦笑を浮かべた楠木はコートのポケットから携帯電話を取り出すと飾り気のない携帯を太い指で器用に次々にボタンを押していく。

どうやらメールを作っているようだ。

「とりあえず本物の警察を呼んで俺の身元保証してもらうから。お嬢さんも知っている人にするからよ。やれやれ先に所轄署に挨拶回りしておいて正解だったな……目立たない方が良いか。サイレンは単なるパトロール中って事にしてもらってと……」

ぶつぶつと呟きながら楠木がメールを手早く製作し送信する。

それから10分も経たずに黒と白のツートンカラーのパトカーが公園へと姿を現した。

依頼篇　山奥の名医？

「俺が見かけよりは怪しくないこと判って貰えた……ってはいかないみたいだな」

優菜が浮かべる険しい視線にはまだ不信感が溢れ出ているのを感じ取ったのか楠木はポリポリと頭を掻く。

確かに楠木がメールをしてからすぐに警察は現れた。

しかも優菜も知っている人物を呼ぶという楠木の言葉も間違いはなく、訪れたのは火事の時に何かと親切にしてくれた年配の警察官だった。

老警官も詳しくは知らないようだが、楠木と名乗るこの男がある種の国家公務員である事は間違いないと保証はしてくれた。

しかしそれでこの巨漢の胡散臭さが減るわけではない。

警官が来るまでに優陽に聞いた話では風に飛ばされた帽子が公園の木に引っかかってしまった所を取ってくれたとの事だがその話も怪しい。

なんで小学校で待ち合わせしていた優陽の帽子が、小学校の近くとはいえそれなりに離れたこの公園まで飛ばされるとはどうにも信じがたい。

ひょっとしたら楠木が縁様と呼んでいる少女が優陽の帽子を持ち去って、ここまで妹を連れ出したのではないかとまで疑ってしまう。

その縁は不機嫌そうな表情を浮かべながら楠木の右肩に腰掛けている。

「優陽はしんじるよ。助けてくれたもん。お姉ちゃん。このお兄ちゃんいい人だよ」

しかし無邪気な優菜はこの怪しげな人物をすっかり信じ切っているようだ。
右袖を引いて信じてあげてと目で訴えてくる。

「おう。ありがとうよ。信じてもらえ……」

優陽の言葉に嬉しそうに笑った楠木が優陽の頭へ手を伸ばしてきたので優菜は竹刀を突きつけ威嚇する。
大切な妹の頼みでもこんな怪しげな男を易々と信じるわけにはいかない。
もし妹にまで何かあったら……最後の家族まで失う事への恐怖心が優菜の心を意固地にさせていた。

「判った判った。離れるから竹刀を突きつけるなって。しょうがねぇな。順序立てて説明するつもりだったんだが結論から言う」

降参だとばかりに両手を挙げた楠木が、口元に張り付いていた笑みを消す。笑みが消えただけだというのに雰囲気が一変する。
先ほどまでの軽薄な胡散臭さが形を潜め、真摯で誠実な大人の顔がそこにはあった。

「あんた達の親父さんは生きている。でも帰れない場所にいる。だが俺は……俺達は親父さんを助けることが出来る」

「……っ！？」

予想外の言葉に優菜は息をのみ硬直した。
楠木が何をいっているのか理解できない。
父が生きている？
そんなわけがあるはずはない。父は炎に包まれて跡形も無く消え去った。
この世にはもう父はいない。どんなに望んでも帰ってこないと優菜の本能は理解していた。
横の優陽も驚きと悲哀の混じった表情を浮かべて優菜の顔を見上げながら手をぎゅっと握ってくる。楠木の言葉に父が消えた日の朝を思いだしたのだろう。

「驚くのは無理ないと思う。だけど本当の事だ……話だけでも聞いてもらえないか」

優菜に向かってかなり年上のはずの楠木が恥も外聞も無く背が見えるほどに深々と頭を下げる。
なんとしても聞いてもらいたい。
無言で頭を下げ続ける楠木の姿は言葉は無くとも雄弁に語っている。

「……判った。頭上げて。話聞くから」

優菜は小さく頷き答える。
楠木に対する大きな不信感が消えたわけではない。
だがあまりにも必死にも見える楠木の姿に優菜はそう答えるしかなかった。

「助かるよ……少し内密な話になるから場所を変えさせてほしい。っと、その前に優陽を小学校に一度戻してからの方が良いか？　あんたの様子だといなくなった事になってるんだろ。いろいろ悪評はあるが俺もさすがにロリコン誘拐犯はごめんなんでな」

安堵の息を一つ吐いた楠木がまた口元に笑みを浮かべ、先ほどまでの真摯な表情は演技だったのではないかと思ってしまうほど軽薄な軽口を一つはき出した。

姉を待つ間に近くの公園でかくれんぼをしていて途中で眠ってしまった。
多少苦しい言い訳で先生に頭を下げて謝ってから小学校を後にし

て、少し離れたところで待っていた楠木の案内で優菜たちは駅の方にある商店街へと向かうことになった。
楠木曰く、密談にはもってこいの秘密の隠れ家的な店があり、しかもそこに行けば優菜達も楠木の言葉を信じたくなるはずだと。

「いや縁様が出てきたときはどうなるかと思ったが、なんとかなって上出来上出来と」

「何が上出来だ阿呆」

優菜達の前をゆったりと歩く楠木の右肩には縁が腰掛けている。
商店街に入ってからすれ違う人が増えてきたが、しかし誰も縁には気づかない。
どうやらこの少女が自分そして妹。楠木の3人にしか見えていないようだと優菜は気づく。
結局この少女が何者なのかも、後でまとめて説明するとまだ教えてもらっていない。
ここまでの会話を聞く限り、楠木が自分よりも遙かに小さな縁を常に敬っている事が窺い知れる。
しかしその割には楠木の口調はたまに気安くなり、縁の方も気にしている様子はない。二人の関係性はいまいち不明だ。

「楠木。そういえば玖木の娘は放っていて良いのか？　周辺調査をさせたままだぞ」

「……やべぇ」

縁の言葉に楠木が立ち止まり呻き声を上げた。
どうやら近くに他にも仲間がいるようだが、その人物のことを完全に失念していたようだ。

「姫さんの事すっかり忘れてた……っていうか縁様。あんたが一緒だったんじゃないのかよ」

「貴様がしでかした狼藉を忘れたわけでは無かろうな。すっ飛んできたから玖木の娘がどうしたかなど知らん」

「仕方ねぇな。電話してみる……一通り使い方は説明したから携帯の使い方は判るよな？　掛かってきた電話ぐらい出ると思うんだが、あの姫さんだからなぁ。判らなくて出ないか、遊びで出ないか微妙なんだよな」

「まったく……貴様は世話を焼きすぎる。放っておけ。あやつなら根の国からすらも平然と帰ってきおるわ」

「そう言うわけにもいかないでしょうが。これは全面的に俺が悪いんだし。第一後が怖い。二人とも悪い。ちょっと電話するけどそのまま付いてきてくれ」

うかない表情を浮かべて振り返った楠木は軽く頭を下げて優菜達に断ると携帯を取り出し、歩いたまま何処かへと電話をかけ始める。

「……あー俺だ。楠木だ。良かったよ出てくれて……姫さん今どこだ？……悪い迎えに行けねぇ……いろいろあって被害者の姉妹と接触した……今から説明……姫さんのこと？……忘れてない。忘れてない……すみません。忘れてました……後で謝るから勘弁してくれ……ともかくマヨイガの出現位置をメールで送るからＧＰＳで位置確……いやそれじゃなくて……だからその左にあんだろ……左……そうそれ……それは切断だ。つーかそのボタンは右じゃねぇか……遊んでんだろ。姫さん……場所がわかったら来てくれ。判らないなら駅で合流だ」

電話を切った楠木が大きく溜息を吐く。

僅かに二、三分の電話だというのにまるで生気を吸われたかのようにげっそりとしている。

よほど苦手な相手なのだろうか？

「楠木……あやつがはぐらかした意味は分かっておるな？　甘い顔をみせるでないぞ。調子づく」

「つべこべ言わずに迎えに来いって意味だろ。全く仕事中くらいは勘弁してくれ」

苦笑混じりの顔で楠木は携帯を弄る。先ほど電話で言っていた店の位置をメールで送っているのだろう。
だがマヨイガという風変わりな店名は、この商店街によく買い物に来ている優菜には聞き覚えがない。
一体自分達はどこへ連れて行かれるのだろうと不安が過ぎる。

「仕事中以外でもじゃ。全く貴様はあやつに甘すぎるのだ……止まれ楠木。ついたぞ。あそこじゃ」

優陽はアパートに連れ帰って大家さんに預けて来ればよかったかと思っていると、縁が楠木の耳を軽く引っ張って立ち止まらせた。
優菜も目で追ってみると、縁は横道の薄暗い路地を指さしていた。
そこにはこぢんまりとした店が建ち並ぶ。しかしなぜか路地はぼんやりと揺らいでいて存在感が希薄にみえた。
有るはずなのに無いように見える。無いはずなのに有るようにも見える。
どちらにもとれそうな印象はまるで蜃気楼のようだ。
こんな所に路地などあったか？
希薄な気配を優陽も感じ取って不安を覚えたのか、ぎゅっと優菜の手を握ってくる。
だが路地に向かうのを躊躇する優菜達を他所に楠木は平然と足を踏み入れて、一番手前の店の扉に手をかけた。

「安心しなって。ちょっと外れたってだけで害はねぇから」

優菜の不安を見透かしたかのように、楠木はにやっと人の悪い笑みを浮かべて手招きした。

「なにこれ……」

意を決して扉を潜った優菜は予想外の光景に唖然とする。
古びた木の扉をくぐった先は何処かのショッピングモールのエントランスホールのようになっていた。
吹き抜けとなったホールからは上に連なっているフロアが見えるが少なくとも４０階以上はあるようだ。
看板が連なり無数の店が並ぶ通路も果てが見えず、この建物の中は一体どれくらいのお店が入っているのか検討もつかない。
建物の外観と中の容量が釣り合っていないにもほどがある。
しかも不気味なことにこれだけの広さがあっても人っ子一人の姿もなく、静まりかえっていてあまりにも静かすぎて耳が痛くなってくる。

「マスター。ちょっと席を貸してもらいたいんで出てきてもらえますか」

優菜と優陽が呆然としていると楠木が誰もいないホールに向かって話しかける。
声を張り上げたわけでもないのにすぐに一番手前の店の扉がチリンチリンと小さく鳴るベルの音と共に開き、中からウェイターの格好をし顎髭を生やした中年男が出てきた。

「やぁ楠木君じゃないか。久しぶりだな。それに縁様も」

「どうもご無沙汰してます。マスター」

「なんじゃその言い方は。まるで妾がこの木偶の坊の付属品のようじゃな。妾がこの木偶の坊に貴様を紹介した事を忘れたわけではあるまい」

出迎えに現れたウェイターに楠木が神妙に頭を下げ、その肩に座る縁が憮然とした顔を浮かべた。

「おっと。これは失礼。ようこそ縁様。『マヨイガ』は古来よりの顧客であるあなた様の来訪を心より歓迎いたします」

顎髭を一撫でしてからウェイターは頭を下げて改めて出迎えの言葉を述べるが、縁は白々しいと言わんばかりに鼻を鳴らす。

「さてこちらは新しいお客様ですね。ようこそマヨイガへお嬢様方」

肩を竦めたウェイターはついで優菜達へと目をむけてにこりと笑って会釈してきた。

優菜が小さく会釈を返すと、横の優陽も姉を真似て小さく頭を下げた。

「こちらのお二人はご姉妹かな。楠木君が連れてきたということは」

「……まぁね」

目で問いかけるウェイターに楠木が小さく頷いて答えた。

短い今のやり取りで楠木が何を伝えたのか優菜には判らない。しかし一瞬だけ先ほど公園で見せた雰囲気を楠木が漂わせたのを優菜は感じる。

だがそれは本当に一瞬だけ。次の瞬間にはまたも軽薄な笑みを浮かべている。

「お、そうだ。優陽。何食いたい？　何でも良いから口に出さないで思い浮かべてみな。マスターが予想しておいしい店を紹介してくれるから。俺が奢ってやるよ」

不安そうな顔を浮かべていた優陽に対して楠木はニカッと笑って見せた。

優菜たちが顎髭のウェイターに連れられて入ったのは入り口から少し奥に進んだ甘味所だ。
店内には客の姿どころか店員の一人も見あたらず、顎髭のウェイターが優菜たちをそのまま奥のテーブル席まで案内すると、3人分のメニューとお冷や、そして縁用の小さなカップとメニュー表を持ってきた。

「おい楠木。阿密哩多が入っているぞ。妾は所望する。良いな」

優菜の小指の爪ほどの大きさのメニューを見ていた縁が顔を上げると楠木に告げる。
その口調は頼んでも良いかと尋ねているのではない。もう決定したということだろう。

「さすがは縁様。お目が高い……楠木君これくらいだけど大丈夫かい？」

顎髭を生やしたウェイターは縁に世辞を言いながら掌に何か書き込み、その手を楠木に見せる。

「また高いもんを……一杯だけですよ」

縁の頼んだ物は相当高額らしく楠木は頬を引きつらせるも、しょうがないと苦笑を浮かべてオーダーを通す。

「お兄ちゃん。優陽クリームあんみつ」

優菜の横に座る優陽がニコニコしながらアイスの乗ったあんみつを指さす。

「おう。頼め頼め……んでお姉さんの方はどうするよ？　ここまで来といて断らんよな」

どうにもいけ好かないまるで人を試すかのような、にやにやした笑みを楠木が浮かべる。

あまりに胡散臭く怪しい男と怪しげな店。

どう考えても普通ではない。

しかし父親のことを知っているという男。助けられると断言する男。

「……妹と同じ物で」

毒を食らわば皿まで。

あの怪しげな扉を潜ったときから……いや父親がいなくなったあの日から、自分が摩訶不思議な非日常世界に放り込まれたのだと優菜は認めはじめていた。

頼んだ料理が運ばれてきたところで、楠木がネクタイを弛めスーツの下のワイシャツの一番上のボタンを外す。

どうやら窮屈な正装があまり好きでないのか落ち着いたと言わんばかりに息を吐く。

アイスが溶けると心配しているのか、食べたくてうずうずしている優陽を見て楠木はにやっと笑う。

「食って良いぞ。優陽には難しいから判るところだけ聞いてればいい……ちゃんといただきますしてからだけどな」

「うん……お兄ちゃん。ありがとうございます。ご馳走になります。」

楠木の薦めに優陽が手を合わせて楠木にお礼を言ってからスプー

ンを手に取った。

「礼儀正しいお嬢ちゃんだ事で……さて。んじゃあまずは俺の本当の役職から説明する。これが俺の仕事だ」

懐から銀色のカードを取り出しテーブルに置いた楠木は指で小さくカードを叩く。

するとカードが淡い光を放ち、ついで優菜の脳裏に直接映像が浮かび上がってくる。

『日本国異界特別管理区第三交差外路　特殊失踪者捜索救助室　専任救助官　楠木勇也』

優菜の脳裏に浮かぶのは楠木の役職といくつもの記号や印章が浮かんでくる。

その中にはパスポートなどにも使われる菊花紋章の姿もあった。

隣に座る優陽にも見えているのか、アイスの乗ったスプーンを口に加えたまま目を丸くしている。

「便利だろ。俺らの相手は文化や種族が違うとか目や耳が無いどころか、気体生命体やら精神生命体やらがいてな。視覚情報も聴覚情報もあまり役にたたねぇんだ。これが。だから相手の存在その物に語りかけるこのカードが重宝する」

カードを手にとって胸にしまった楠木がにんまりと笑う。
それはいたずらに成功した子供が浮かべるようなやんちゃな笑みだった。

「要するにだ……世界の外には異なる世界がいくつも、それこそ無量大数に連なり繋がっている。異世界ってやつだな。異世界間移動及び関連事項対応に特化した組織が日本では異界特別管理区交差外路って呼ばれている。俺は日本が所持する交差外路の三つめ。通称特三に所属している。んでこっちのちっこい御方は」

我は関せずと極上の笑みを浮かべて杯をちびちびと舐めている縁を楠木が指さす。

「ちっこいとは無礼な奴め。妾はこの木偶の坊の守護刀にして、万物を司る八百万の御霊が一柱『縁』じゃ。苦しゅうない。縁様と崇めるがよい」

杯から顔を上げた縁が胸を張る。
一見傲慢な態度と言葉だが傲り高ぶっているとは優菜は感じない。
そういう存在だと本能が感じ取っているのだろうか。

「簡素に言えば神様って御方だ。ちなみにさっきのマスターも。この空間自体がマスターって事らしい。遠野物語には妖怪で紹介されてるけどな。厳密には超高密度世界干渉力存在って俺も良くしらねぇ世界の理の一つ」

楠木は理解しようとしても無理だと言わんばかりに、そういう風なもんだと思っとけと言いたげだ。

「異世界……神様……」

なんだその御伽噺は。

鼻で笑って否定してしまいそうな与太話……とはいえない。

人外の縁という少女とこの有り得ない空間を実際に目にした後では。

「ここらは信じても信じなくても本人の自由だ。でもここから先は信じてくれ……本題になる。あんた達の親父さんは今は異世界にいる。召喚っての知ってるか？　良く小説やゲームとかにある所謂魔法だ」

「優陽知ってる。妖精さんの国のお花を呼び出す魔法でしょ。図書室の本で読んだよ」

優菜が迎えに来るまで小学校の図書館で時間を潰している優陽が手を挙げて答えた。

「平和でいいなそりゃ……まぁそんなもんだ。他の世界の存在を呼

び寄せる魔法って奴だ。優陽よく知ってるな偉いぞ」

楠木は皮肉気な笑みを浮かべたかと思うと、手を伸ばして優陽の頭を押し下げるように撫でた。

「ちょっと！……」

楠木の乱暴な扱いに怒鳴ろうとした優菜は思わず言葉を失う。笑みを浮かべてる楠木の目には寒気を覚えるほどの悲しみと怒りが浮かんでいたからだ。

「親父さんはそいつでどこかの異世界に召喚……要は誘拐されたんだよ」

優陽には見せないようにしている固い瞳と優菜にだけ囁く冷えた声。

父親は異世界に攫われた。これが真実だと告げてくる。

「おい。木偶の坊。小娘の背が縮むぞ。そろそろ離してやれ」

急に空中に飛び上がった縁はそう言ってから、楠木の右肩に止まって耳に顔を近づた。

「……そりゃそうだ。縁様のサイズまで落ちたら可哀想だな」

楠木が一瞬目を閉じてから息を吐いて口元に、にやりと笑みを浮かべて優陽から手を離す。その顔からは先ほどまで見せていた暗い感情は消え失せている。

縁が何を言ったのか判らないが、その言葉が楠木を落ち着かせたようだ。

「ふん。妾のどこが可哀想だ。この木偶の坊が」

悪態を吐きながら縁はテーブルには戻らず、そのまま楠木の肩に腰掛ける。

「まぁ、召喚つっても悪いことばかりじゃねぇんだがな。一般には伏せられてるけど異世界との交流ってのは結構昔から盛んなんだよ。それにもいろいろ理由はあるんだが。ここ最近の主流は召喚主と召喚者の間で条件と折り合いをつけて、ちょいと変わった能力を持つ人間を異世界に紹介する異世界派遣業ってのだな。日帰りの異世界アルバイターって奴もいるみたいだわ」

明るく話す楠木は裏の世界って面白いだろと笑顔を浮かべて饒舌に喋りはじめる。

一気にまくし立てる様は、まるでいつもの自分を必死に取り戻そうとあがいているようだ。

「交流が盛んになるにつれて数多くの異世界と条約も取り交わされてる。安心安全な異世界旅行ってな。そのルールの中で断りのない無断召喚ってのも禁じられてんだよ。ただ、たまに起きちまうんだ。無断召喚ってのが……ルール外の遠い異世界ってこともあるし、条約内異世界での犯罪や事故とかって場合もある。運悪くそいつに親父さんは巻き込まれたんだよ」

楠木はそこで言葉を切ると、一気に喋って喉が渇いたのかコップを取り水を飲み干した。

そしてにかっと笑う。

「でも安心しな。異世界に攫われた国民様を救い出すために、あっちの世界こっちの世界乗り込んで力ずくでも助け出す正義の味方。それが俺達『特三捜救』だからよ」

楠木は詠うように高々と宣言すると快活にカラカラと笑いはじめた。

「じゃあお父さんが帰ってくるの?!」

「おう。任せろ」

楠木の言葉をよく判っていないのだろうが優陽が嬉しそうな歓声を上げ、アニメのヒーローを見るかのようなキラキラした目で見る。
だが先ほどの目を見てしまった優菜からは、どうしても楠木のそれは無理矢理な笑い顔に思えてならなかった。
この男は何かを隠している。
それが何かは分からないが、重たく暗い物を感じさせる。

「……楠木」

証拠と言うべきなのだろうか。
楠木の右肩に乗る縁が楠木の名を小さく呟き首を優しく撫でていた。まるで幼子をあやすかのような優しく、そして悲しげな顔だ。

「あの……」

楠木が隠している物を尋ねようと優菜が口を開こうとした時、店の入り口の扉が開く音が響いた。
この怪しげな空間に一体誰が？
思わず入り口の方を向いた優菜は言葉を失う。
舞い散る桜を柄に施した純白の着物。
しっとりと濡れるように輝く黒髪。
薄桜色の唇は色気を醸し出す。
ほっそりとしながらも女性らしさを主張する小柄な身体。
強い存在感を放つ二十才ほどの和装美女がそこに立っていた。

依頼篇　山奥の名医？

強い存在感を放つ女性を、不躾と想いながらもつい注視していた優菜と女性の目が合う。
優菜の視線に不快感を感じている様子は見せず女性はにっこりと微笑んで会釈した。
女性が浮かべるのは汚れを知らない清楚な笑み。
しかし仕草の一つ一つに艶やかな色気がにじみ出る。
聖女と妖婦。相反する印象を優菜は抱く。
呆然としていた優菜は慌てて頭を下げ、隣で呆気にとられていた優陽も釣られて軽く頭を下げていた。

「あら……」

ついで和服美人は黒瑪瑙の瞳を驚きで見開き声をあげる。
楠木がいることに今気づいたと言わんばかりの態度だが、ラッシュ時の駅でも目立つであろう巨漢の楠木を見落とすはずがない。
女性はあまりにも白々過ぎる驚き顔のまま、

「楠木様でしたか。どこの怪異が下劣な嘲笑をあげているのかと急ぎ来てみれば。野蛮で粗野な声で気づくべきでした。申し訳ありません。下僕である私を忘れた上に見捨てる最低で低脳な独活の大木といえど主。判らなかったとはお恥ずかしい限りです。また仕置きでしょうか？　楠木様からの罰であればどのような恥辱でも受け入れますのでお見捨てないでくださいませ」

辛辣なことを宣い、悲しげに顔を俯けつつも小さく舌を出し、最後には目元へと袖を当てて泣き真似をしながらクスクスと鈴の音のような忍び笑いを漏す。
先ほどまでの神秘的な雰囲気からがらりと変わり楠木を心底楽しそうに罵倒し始めた。

「あー姫さん忘れていたことは謝る。好きな物頼んでいいから俺の悪評をねつ造する遊びは勘弁してくれ。あと主と下僕じゃなくて上司と部下な」

「貴様はこやつに甘すぎるのだ。少しは怒れ」

笑顔で辛辣な言葉を投げかけられた楠木は怒るどころか苦笑混じりに椅子から立ち上がって済まなかったと頭を下げている。
むしろ縁の方が苛立った様で、先ほどまでの優しげな表情から一変してしっかりしろと怒り楠木の耳を引っ張っている。

「今回は俺が悪いって。玖木姫桜（くきおう）。今回からチームを組むことになった俺の部下だ。でだ姫さん。此方が筑紫さんの娘さん達だ。説明の途中だからとりあえず座ってくれ」

今だ呆然としていた優菜達に向かって端折った説明をしてから、楠木は隣の椅子を引いて手招くと、姫桜がこくんと頷く。

「店主様。私は京都山織の栗蒸し羊羹。それと狭山の手もみ茶をお願いいたします」

店の奥に向かって注文をしてから姫桜が裾を乱さず静々と歩む。絵に描いた様な令嬢然とした立ち居振る舞いや歩き方が姫桜の育ちの良さを感じさせる。

姫桜がゆっくりと腰を下ろすのにあわせて楠木が椅子をそっと前に押す。上司と部下といったが、まるで姫桜の方が主で楠木の方が従者のようだ。

王と雑兵。

二人の姿を見た優菜はそんな言葉を思い浮かべていた。

「さて楠木様。それでご説明はどこまで進んでいるのでしょうか？いつもお仕事優先の楠木様のことですから、ほとんど終わってま

すよね」

ネズミをいたぶる猫のような微笑みをうかべながら姫桜がたずねる。

しかも姫桜はなぜか蒸し羊羹に添えられていた楊枝を楠木にむけて差しだしていた。

「とりあえず異世界と召喚あたりまで……姫さん勘弁してくれ。真面目にいきたいから」

ばつが悪そうな顔を浮かべた楠木が爪楊枝から目を逸らすと、姫桜がまたも目元を隠して下手な泣き真似をはじめた。

「初めての街で右も左も判らず心細くか弱い私を見捨てるほどの時間と引き替えなのですから、当然全ての説明を終わっているのかと思えばまだそれだけとは……楠木様。大男総身に知恵は廻りかねとはどういう意味でしたかしら？」

「……1回だけな」

深い溜息をついてから苦虫をかみつぶしたような顔をした楠木は楊枝を受け取った。

肩に腰掛ける縁が甘い顔をしおってときつい目で楠木を睨みながら耳を引っ張っている。

楠木は薄切りになった羊羹をさらに半分に切り一口大にすると、姫桜の口元へ差しだし、

「あーんして」

苦悩している楠木をそれはそれは楽しそうに姫桜は見つめ右手で口元を隠しつつ羊羹を口に含む。

人に食べさせてもらうなど不作法も良いところのはずなのだが、姫桜がおこなうと愛嬌と優雅さを感じさせる。

「帰るわよ優陽」

左手で机を叩いた優菜は椅子を蹴り倒すように勢いよく立ち上がり、突然の姉の怒声に目をぱちくりとさせていた優陽の手をとる。

自分はこんな巫山戯た茶番を見させられるために付いてきたわけではない。

父のことを心配している自分達を馬鹿にしているのかと、楠木をキッと優菜は睨みつけてささっとここを立ち去ろうとテーブルの上の伝票を引っ掴む。

「待て待て。ここから先が重要なんだよ。姫さんもあとでちゃんと謝るから勘弁してくれ」

優菜の右腕を掴んで慌てて止めた楠木は、ついで姫桜に懇願する

ように頭を下げる。

「仕方ありませんね」

僅かに舌を出した姫桜が童女のような笑みを浮かべて楠木の手から楊枝を取り上げすっと目を閉じた。

店内の空気が変わる。

悪寒と恐怖が優菜の背中を駆け上がり優菜の全身に鳥肌が立つ。

優陽も怖がっているのか小さく震えながら優菜の手をぎゅっと握ってきた。

「大変失礼いたしました。改めましてご挨拶させていただきます。玖木家現当主玖木姫桜と申します。非礼はお詫びいたします。どうか席についてくださりますか？」

目を見開いた姫桜が巫山戯ていた先ほどまでとまったく違う凛とした声と鋭い眼光を発する。

「っ……判っ……りました」

震える声で答え優菜は席に戻る。

逆らうことの出来ない存在。逆らえば殺されると身体が自然と理解する。

「だから遊ぶなって……姫さんしかも趣味が悪い。優陽が怖がってるじゃねぇか」

だと言うのに楠木は全く気にもせず冷徹で恐怖感を醸し出す姫桜に手を伸ばすと頬をつねりあげた。

「子供にだけはいつもお優しいことで。そのお優しさを私にもう少し向けていただければより尽くしますのに」

楠木への文句を楽しそうに漏らしながら姫桜が目をつぶると場を支配していた恐怖が霧散する。

どうにも疲れた顔を浮かべ楠木は優菜へと目をむける。

「悪い。俺の凡ミスで姫さんを放置してたお詫びだったんで勘弁してくれ……これこの通り」

「判ったから……続き。きかせて」

テーブルに手を着き頭を下げる楠木を見ながら、優菜は中断していた話の続きを促す。

胡散臭く元々無かった信頼も限りなく零に近づいているが、父の行方を知るためだと優菜は我慢する。

「悪いな話の腰折れまくって……俺たちは親父さんが召喚された世界までは掴んでる。専門的な話になるんで省略するが、痕跡が通常より遙かに多く残ってたからすぐに判ったんだ。いなくなって二ヶ月で居場所を発見するなんて滅多にない。少なくとも一年はかかる。十年、二十年経ってもどこの世界に召喚されたか判らないってのもざらでな。だから……不幸中の幸いってやつだ」

楠木は深く息を吸う。何か強い感情を飲み込んでいるようだ。
居場所がすぐに分かった事が幸いなど楠木は微塵も思っていないのだろう。

「だからあとは乗り込んで、召喚先世界での居場所を探り助け出すだけだ。ただ厄介な事が一つ。親父さんが親父さんの姿でいる可能性が極めて低い。本来の状態。この世界での姿形のままだと異物として世界に弾かれる。召喚世界に合わせた姿形や存在に召喚主に変えられてる事が多い。あんまりその状態が続くと馴染んで元に戻すのが難しくなったりするが……俺が絶対に何とかするから安心しろ」

「安心しろって。そんな話を聞かされて……安心なんて出来るわけないでしょ」

優菜は呆然と呟くしかなかった。
父が全く別の存在になっているかもしれない。
この話のどこに安心しろと言うのだ。

「まぁ、そうだわな。どういや信じて……」

「具体例をお見せしましょう。あの子も楠木様にお会いしたがっておりますし」

楠木が頭をがじがじと掻いていると、横の姫桜がクスクスと笑い出しぽんぽんと軽く手を叩きだした。

「げっ！　姫さんちょっとまって！　今はあいつは喚ぶな。空気を読まないんだから」

楠木の制止を無視して姫桜が楽しげに詠声をあげる。

「鬼さん此方。手の鳴る方へ」

姫桜が詠い上げた直後、テーブルの上の姫桜の影がざわめいた。影はまるで空気を入れた風船のようにふくれあがっていき瞬く間にサッカーボールほどの大きさになると影が弾けた。

弾けた影の中には縁と同じ位の体長で和式の鎧を身につけた若武者が立っていた。

若武者の額には白く尖る角が生えている。小さいが鬼と呼ぶべき物なのだろうか。

影が弾けて鬼が登場するいきなりの超常現象に優菜と優陽が呆気

にとられていると、鬼が目を見開き姫桜に対して膝を着いた。

『姉上お呼びですか。桜真（おうま）。姉上のお呼びとあらば、いついかなる場所においても駆けつける所存』

やけに時代がかった口調でそう言った桜真と名乗った鬼が一礼する。

喚びやがったと額を押さえる楠木や、楠木に諦めろと言わんばかりに肩を叩いていた縁の姿に桜真が気づく。

『これは縁様。それに楠木殿もお久しぶりにございます』

「相変わらず暑苦しい奴じゃな。鬼となりてもかわらんのお主は」

『しかり。例え姿形は変わろうともこの桜真。己が心を貫きます故に』

縁の嫌みに対して鬼は全く気にした様子がない。と言うよりも嫌みとも思っていないのだろう。

鬼は優陽と優菜の方を向いて一礼する。

『初めてお会いする方々もいらっしゃるようで。拙者玖木桜真にございます。以後お見知りおきを』

「え……えと……優陽です」

優菜は呆然と桜真と名乗る鬼をみていたが、優陽は少し躊躇してから自己紹介を返した。

『優陽殿とおっしゃるか。ふむ良き名にございますな』

「……久しぶりだな桜真。随分そっちに馴染んだみたいだな。楽しそうじゃねぇか」

妙にテンションの高い暑苦しい桜真を楠木がジト目で見る。
桜真の挨拶が終わるまで話しかけるのを待っていたのか、それともあまり話したくなかったのだろうか。

『なに。多少狭いですが住めば極楽という物でしょう』

破顔一笑した桜真はカラカラと笑う。

「此方は私の正真正銘の弟。桜真です。いろいろありまして異界の存在である鬼になってしまったのですが、楠木様と縁様のお力でほぼ元に戻りました。今は完治するまで別世界におります」

『ふむ。これも全ては玖木総崩れの危機よりお救いいただいた楠木殿と縁様。そして仮初めの異界を用意してくださった特三の八菜様のおかげ。我ら玖木一党。特三の方々の為とあらば命も掛ける所存ですぞ。楠木殿も己の武の無さを恥じることなく、我らをいつでもお遣いくださいませ。楠木殿の強さとは心にあります。剣には我らがなりましょうぞ』

「良かったのう楠木。貧弱なお主を守ってくれるそうじゃぞ。妾の神官であるお主を……なんたる屈辱」

「奪還前に弱いって事ばらすなよ。不安がるじゃねぇか……悪気がねぇのがさらに質が悪い。へいへい。俺が悪いんだよ」

縁に睨まれた楠木はもう好きにしてくれと捨て鉢の笑い声をあげる。

「……弱いって」

優菜は唖然とする。

１９０?は優に超える巨体。

首回りまで太くなりスーツ越しにも判る鍛え上げられた身体。

公園で優菜の連撃を軽々と躱した反射神経。

何よりも父を取り戻すと語った自信ありげな言動。

楠木は己の実力に自信があるのだと思っていた。

「お兄ちゃん弱いの？　だって公園で凄かったよ」

「いいか優陽。異世界にはな。素手で岩山を砕く強力や刀一本で流星を切る化け物がうようよいるんだよ。ただの人間で勝てるわけねぇっての」

優陽の率直な物言いに楠木はにやりと笑って答える。
その笑みは自分が弱い事を恥じる負け犬の笑いではない。
どうしようもない事に対しても、それがどうしたと笑ってみせる不敵な笑みだ。

「この楠木様は争い毎に関してはそれこそ足手まとい以外の何者でもなく心苦しくはありますが、おとなしく私の背中に隠れてがたがた震えていて欲しいくらいのお荷物です」

クスクスと笑いながら姫桜が鈴のような声で楽しげに楠木をこき下ろし始めた。
楽しげな幼女のような笑みが印象的だ。

「まぁ事実なんだが姫さん。もうちっと言い方ってもんを」

苦笑を浮かべる楠木をちらりと見てから、姫桜が悪戯好きな猫の様な笑みを優しげで微かな熱の籠もった微笑へと変化させた。

「ですが異界に攫われた方。異界に染まった方を奪還する事に関しては、我が主の右に出る者はいません」

「……褒めるか貶すかどっちかにしてくれ。反応に困る。あと上司と部下な」

急な姫桜の褒め言葉に楠木は大きな手で自分の口元を隠すように頬を撫でる。

手の下に秘められた感情は何か。

褒められた事に緩む唇を隠しているのか。

貶された事を耐えるための歯ぎしりを隠しているのか。

……それとも全く別の表情か。

この楠木という男はどうにも読めない。

快活に笑い、人の悪い笑みを浮かべ、苦笑で真意を誤魔化す。

この男が見せる表情は種類は違えどほとんど笑みで形成されている。

喜怒哀楽。人の感情を表す４つの中で、喜を出す割合が異常に多い。

しかし先ほど優菜たちの父親の真実を告げた時、その瞳を染めた怒と哀の色は深すぎて、強い衝撃を覚えた。

だが悲しみを隠すために無理矢理に笑っているのかというと、また違うような気がする。

確かに無理に笑っている様も見受けられるが、妹の優陽に向ける柔和でからっとした笑みは心からの物だろう。

暗く深い怨念を抱えながらも、心から笑う事も出来る。

「とにかくだ。確かに俺はこの天才怪物様共と比べるのも恐れ多いほど弱い。だが切り札を一個だけ持ち合わせてる。でもこいつを発動させるには条件がある。その為に……」

自分の事を弱いと断言しながらも楠木は強気な笑みを浮かべ、横に立てかけていた竹刀袋をちらりと見る。

おもむろに姿勢を正し表情を引き締めると強く優しげな眼光で優菜と優陽を見つめた。

「筑紫優菜さん。筑紫優陽ちゃん。あんた達の協力が必要だ。親父さん筑紫亮介さんは絶対に俺たちが奪還してみせる……だから俺を信じてもらえないか」

優菜と優陽の顔を真正面から見つめ言い切った楠木は、テーブルに額が着くほどに深々と頭を下げる

目。

顔。

声。

そして姿。

楠木の存在その物が、優菜たちの父親を助けるという言葉が嘘偽りのない物だと強く物語っていた。

依頼篇　山奥の名医？　依頼篇終了

「……判りました。信じます。あたし達は何をすればいいんですか？」

怪しい巨漢。楠木に対して優菜は気がつけば初めて敬語を使い答えていた。
楠木が怪しいことに変わりはない。
だが信じられる。
優菜自身も口で説明するのは難しいが、信じられる何かが楠木にはあった。

「優陽も信じるよ。お兄ちゃん正義の味方なんだもん。おとうさん絶対助けてくれるんだよね」

優陽もにっこりと笑顔をうかべて答える。
おそらく幼い優陽の方がより純粋に楠木という男の本質を感じ取っているのかも知れない。

「信じてくれてありがとな……おし！」

楠木が柔和な笑みを一瞬浮かべてから、気合いを入れるように自分の頬を両手で叩いた。

「なに別に一緒に異世界に来いとかそんな無茶な話じゃない。異世界内で親父さんを探すためと、親父さんを元に戻すために……親父さんとの思い出。親父さんも強く覚えていて、あんたらも大事にしている物を俺に譲って欲しいんだ」

「物……ですか？　それを何に」

「ふむ。妾からそれは説明してやろう。心して聞け娘」

楠木の頼みに優菜は意味が分からず聞き返すと、楠木の肩に止まっていた縁が音もなく宙を移動して優菜たちの前に立った。
役割を奪われた楠木は、相変わらずおいしい所もってくの好きだよな我が神様はと、呟きながら口元に小さな笑みを浮かべていた。

「物質としての物が必要なのではない。必要なのは物に宿る絆の力『縁（えにし）』じゃ。召喚という戯けの妖術は、高貴にして神聖なる心にして親なる真たる縁を無理矢理に断ち、邪なる偽りの縁を結び異界へと連れ去る邪法じゃ」

縁の説明で優菜ますます困惑してしまう。
横で聞いている優陽も言葉の半分も意味が分かっていないのか首を捻っている。
困惑している姉妹の様子に縁が楠木を指さしついで指先を優菜たちへと向けると、楠木がかみ砕いた説明を始める。

「要はいろんな繋がりだな。人と人。人と動物。人と物。この世の全てにご縁って繋がり『縁(えにし)』がある。糸みたいなもんだと思えばいいさ。よく言うだろ縁結びの赤い糸ってな。これが繋がっているから俺たちは互いの存在を認識し繋がる事ができる。召喚ってのは縁をぶった切って召喚先世界との繋がりを強めて連れて行っちまうのさ……さて縁様、続きをどうぞ」

「うむ。ご苦労木偶の坊。此奴が申す通り邪法の担い手は古来より現世から無数の者を奪い去っておったのじゃ。じゃが妾がおる限り異界の輩の好きになどさせぬ。妾の名は救心神刀『退魔捜世救心縁』。邪なる縁を斬り、親なる縁を辿り、真にして心なる縁を紡ぐ神じゃ。妾に供物を捧げよ娘。妾達がその方の願い叶えてしんぜよう」

「そういうこと。こちらの御柱である縁様はいってみれば召喚者奪還を専門とする神様ってことさ。ただそのありがたいお力を賜るには真なる縁が宿った物が必要なのさ。だから親父さんとの思いで。縁が詰まった大切な物を譲って欲しい」

楠木は一度息を切るとテーブルの上のコップに手を伸ばし軽く唇をしめらせた。

コップの水はほとんど減っていないので喉が渇いたのではなく、優菜が意味を悟るまでの時間を与えてくれたのだろう。

「……必要なことは判りました。続きお願いします」

「了解……ただし受け取った物は返してやることが出来ない。縁を捧げるってのはあらゆる繋がりを無くすって事でもある。簡単に言えばこの世界から消滅しちまう。二度と帰ってはこない……だけど大切な物と引き替えにする変わりに、絶対に俺たちが親父さんを取り戻す」

「……大切な物」

父との思い出の品と言われても……

困惑している優菜を見て楠木が頭をがじがじと掻いた。

「あーちょい性急か。もう少し詳しく説明すると」

楠木が再度説明をはじめようとする前に優菜は言葉を絞り出す。

父との思い出は心の中にはたくさんある。

だが現実には……

「あの火事で……焼けて無くなってしまって。父との思い出の品も全部」

父を飲み込んだ火は瞬く間に周囲へと燃え広がった。

優陽を連れて着の身着のままに逃げるのが精一杯で荷物を持ち出

す暇などありはしなかった。

「……そうか。何でもいい。写真の切れ端でも。服の一部でも。何とかしてみる。何か無いか？」

優菜たちを優しげな目で見ながら楠木が促す。

思い出の品……父との思い出の品。

部室に置いてあって難を逃れた剣道の防具一式？

ダメだ。忙しい父が試合を見に来たことなどほとんど無い。あまり繋がりがあるとは思えない。

今借りているアパートに置いてある生活用品はほぼすべてが貰い物。

父が触れたことのある物。父との思い出が残っている物などない。

「おにいちゃん。これ……」

何か無いかと必死に優菜が考えていると、優陽が小さく声をあげて膝の上に置いていた大切な帽子をテーブルの上に置いた。

なんの変哲もない小学校指定の真新しい通学帽。だが優陽はなぜかそれを気に入っており布団の中にまで持ち込んでいた。

そのおかげで火事の時も持ち出せた唯一といっていい物だが、まだ買ったばかりの帽子に父との思い出などあっただろうかと優菜は疑問を抱く。

「……帽子の優陽のお名前。おとうさんが漢字で書いてくれたの。優陽はこういうお名前って書くんだよって教えてくれたの。優陽も早くお名前が書ける様にっていつも見てた大切な物なの。これじゃだめ？」

大切な物を差し出す優陽は泣きそうな目を浮かべ、それでも泣かないように堪えている。
父との思い出の品よりも父本人に帰ってきてほしい。
優陽が抱く思いが優菜にも痛いほど伝わってくる。

「……縁様。いけるか？」

「ちと弱い。じゃがなんとかしてみせよう。小娘の気持ちを汲まず何を汲む」

渋面を浮かべる楠木の問いに苦しげな顔で縁が答えた。
楠木と縁にも優陽の覚悟、想いは十二分に伝わっている。
だが彼等のいう縁が足りないのだろう。しかしそれでも何とかして見せようと答えてくれた。
何か自分にはないのか。
妹が泣きたいのも堪えて大切な物を捧げようとしているのに見ているだけなど出来ない。
自分には何か父との繋がりが残っていないのか。
思い出せ思い出せ。父との会話。父との思い出。父の好きな物。
甲斐性はないしお人好しで損ばかりする娘から見ても心配になる父。

だが優しくて人のためにいつも一生懸命で自慢だった父。
そんな父を……大切な父を取り戻す事ができるかもしれないのだ。
遡る。記憶をどんどん遡る。
高校入学、中学時代、どんなことでもいい思い出せと自らに言い聞かせる。

「……っ」

母が生きていた頃まで遡ったところで優菜はようやく一つの思い出へと辿り着く。
あった……あれなら。
自分も父も絶対に覚えている思い出。
思い出が宿った”それ”は大切なとても大切な物だ。
だが父を取り戻す為ならば”それ”すらもおしくはない。
優菜はテーブルの上に目を走らせる。
何か刃物はないか。何でもいい……ある一点で優菜は目を止める。
優菜の視線の先には会話の邪魔をするべきではないと考えていたのか、テーブルの上でピンと背筋を伸ばした姿勢で正座する玖木桜真の姿があった。

「桜真さん……ですよね。先ほどは失礼いたしました。あたしは筑紫優菜です。いきなりで済みません。あなたにお願いしたいことがあるんですけど」

先ほどは呆気にとられて挨拶すらしていなかったと思いだした優菜は名を名乗ってから、自分の掌大ほどの大きさしかない桜真へと

頭を下げる。

「拙者に出来ることがあれば喜んで。何なりとお申し付けください優菜殿」

優菜のいきなりの不躾な頼みにも、桜真は嫌な顔をせず即諾する。
桜真が腰に差した小さな刀を一瞥した優菜は軽く息を吐いてから縛っていた後ろ髪を掴んで顔の前へと持ってくる。
黒く艶々とした長い髪で束ねたポニーテールは優菜の自慢だ。
子供の頃からずっと伸ばしてきた。その理由は……

「お願いします。あたしの髪を斬ってください。死んだお母さんが好きだった髪型で、お父さんがお母さんに似ているって褒めてくれた髪なんです。お父さんとの繋がりがあたしは髪に……そしてこの髪型にあると思います」

優陽を産んですぐに亡くなってしまった母。
母が亡くなってから父は信念であった満足に医療を受けられない人達のための医者になるという生き方を変えた。
無医村に単身赴任するのを止めて、優菜達が暮らしやすい様に街で診療所を構えるようになった。
そんな父はよく優菜の髪をいじりながら、母と同じ綺麗な髪だと褒めてくれた。
その時の父が浮かべていた寂しげな顔を忘れる事は一生無いだろう。
以来優菜は父の慰めになればとポニーテールを続けてきた。

父との思い出の品は無くなってしまったかも知れない。
だが父との思い出は、縁は優菜自身に宿っている。

「……女姓にとって髪は命。よろしいのですか？」

優菜の頼みに桜真が躊躇する。
長く色艶もしっかりしている髪。
優菜がどれだけ大切にしているか見抜き気遣っているのだろう。

「桜真。気持ち汲んでやれ……良い縁だと思うよ俺は。親父さんは良い娘さんがいるな」

楠木が腕組みをして桜真に促してから、優菜へと優しげな笑みを向けた。楠木の笑顔はよく決心したなと言外に褒めている。
楠木の言葉に桜真も決心がついたのか立ち上がり優菜の髪へと目をむけた。

「分かり申した。優菜殿。髪留めをはずして中程を手でお持ちになって拙者へと向けていただけますか」

優菜はいわれた通りに髪を縛っていたゴム紐を外してから、長く伸びた髪の半ばほどを軽く手で握り首を傾けてテーブルの上に立つ桜真の方へと向ける。

刀を引き抜く鞘走りの音が静寂に包まれる店内へと響く。

「しからば……御免」

桜真が合図を告げると共に刀を一気に振り抜く。
優菜の髪が一瞬にして肩口ほどに切り落とされる。
優菜にはなんの感触も痛みも無かった。それが小さいながらも鋭利な刃を持つと桜真の持つ技量の高さを指し示す
急に軽くなった頭部が優菜に消失感を感じさせる。
肩口ほどになった髪がぱらりと垂れ下がる

「……ありがとうございます」

桜真へと頭を下げてから優菜は切り落とされた髪を見た。
艶々した黒髪。手にずっしりとくる重さはずっと髪を伸ばしてきた年月その物。この長さだけ父との思い出が詰まっている。

「楠木さん。縁様……これでお願い出来ますか」

髪を優菜は差し出して楠木達へと頭を垂れる。

「優陽からも……おねがいします。おねえちゃんの髪はおねえちゃんの宝物なの」

姉の行動に目を丸くしていた優陽も優菜の様子をみて、改めて頭を下げて再度帽子を差し出す。

「うむ。いける……お主らの髪と帽子を合わせれば、父との縁を取り戻すなど造作もない。安心せい。楠木！」

差し出された髪と帽子を見つめた縁が強く頷いてから、宙へと浮かび上がりながら鋭い声で楠木の名を呼ぶ。

縁の呼びかけに楠木はスーツの内ポケットから折り畳まれた真っ白な懐紙を取り出す。

「了解しました……優菜、優陽。二人の思いは確かに受け取った。絶対に俺たちが親父さんを取り戻してくる。じゃあ俺たちは先に出るが二人はゆっくりしてくれ」

楠木は髪と帽子を受け取ると懐紙に丁寧に包み大事そうに懐にしまい強い言葉で宣言し席を立ち上がった。

背もたれに掛けていた黒いコートを羽織り、横に立てかけてあった竹刀袋を担ぎあげてから姫桜の背後へと回る。

「優菜さん。優陽さん。私たちにお任せください……桜真。見事な髪斬りでした。戻します。次は異界でよろしくお願いします」

楠木が椅子を引くのにあわせて立ち上がった姫桜はにこりと微笑み言葉を掛けてから、桜真をねぎらう。

「御意。優菜殿。優陽殿。楠木殿ならば必ずやお父上をお助けして下されます。ではお急ぎとなるようですので私はこれにて失礼つかまつる」

背筋を伸ばした桜真が別離の挨拶を述べ一礼してから姫桜が手を一つ叩いた。すると次の瞬間、煙をかき消すように桜真の姿がテーブルの上から消え失せた。

「縁様。お待たせしました肩へどうぞ……いくぞ姫さん」

「畏まりました楠木様」

楠木がコートの右肩を軽く手で払って形を整えると宙へと浮かんでいた縁がふむと頷いてから肩へと腰掛ける。
どうやら楠木の右肩は縁の指定席のようだ。
姫桜も軽く裾を整えて手早く身なりを整えていた。
二人と一柱は準備が終わると店の出口へと向かう。
挨拶もそこそこに立ち去ろうとする楠木達が一日でも、一分でも、一秒でも、一瞬でも早く異世界召喚者を取り返すために異世界へと向かおうとしているのだと判る。

「あ、あの！　楠木さん」

無駄に声をかけて楠木達の時間を浪費させない方がいいのかもしれないと思いながら、優菜は立ち上がり巨漢の背中へと声をかける。

「おう？　何か気になることがあるか？　金とかならいらないから。俺等は公僕なんで無料だ。税金泥棒って言われない様に一生懸命やらせてもらうさ」

振り返った楠木が口元をにやりとさせながらつまらない冗談を口にする。

先ほどまでの優菜であれば巫山戯た態度に苛立ちを覚えていただろうが、楠木の態度は胸の奥底を隠すための物だと優菜は気づいている。

「公園ではすみませんでした！　いきなり殴りかかってしまって」

今ここで謝らなければ機会を逃すと考えた優菜は深々と頭を下げて公園での狼藉を謝った。

優菜の謝罪に楠木は頭をポリポリと掻き困った顔を浮かべる。

謝られるとは考えてなかったのかしばし言葉に詰まっていた。

「あー……まぁしゃーねぇからいいって。客観的に見れば不審者だしな俺。ほれこんな小っこい御方を肩に乗せてるしよ」

「娘。妾が許す。次は脳天をかち割ってやれ。さすれば少しはまともになるじゃろう」

「クスクス。大丈夫ですよ優菜さん。楠木様は痛いのが大好きな御方ですから」

縁が鼻を鳴らしながら楠木の耳を引っ張り、姫桜は口元を隠して実に楽しげな笑みをこぼす。

「ひでぇなおい……だそうなんで気にすんな。俺も気にしてないからよ。っとそうだマスター。この中に美容院もあったよな。優菜の髪を整えてやってくれ。料金は俺のつけで頼む。このままじゃマスターのお仲間の座敷童だ」

最後に店の奥に声をかけた楠木はおかっぱ頭になった優菜の髪を指さしてから、人の悪い笑みを残して店を出て行った。

「さてお嬢さん。席を変えようか。どんな髪型にしたいかな。出来るだけご希望に添うよ」

楠木が店を出ると入れ替わりに顎髭のウェイターが店の奥から出てきて優菜に尋ねる。

しかし優菜は楠木達が出て行った入り口をじっと見ていた。

その目には不安げな色が浮かぶ。

「……楠木君が信用出来ないかい？」

問いかけに優菜は小さく首を横に振って無言で答える。

人をからかうような笑みを浮かべ、にやにやと笑っている軽薄そうな印象が強い。

だがたまに覗かせるその真摯な言葉は強く重い。

信頼は出来る……はずだ。

だが楠木は自分の事を弱いと云っていた。

そして姫桜も気配は恐ろしかったが外見は強そうに見えず、彼女が呼び出した桜真は人形のように小さかった。

彼等は大丈夫なのだろうか。

拭いきれない不安が優菜の心によぎっていた。

「お嬢さんの心配は判るよ。楠木君は確かに力という意味では弱いからね」

優菜は何も言っていないのにウェイターが優菜の葛藤をピタリと言い当てる。

どうして判ったのだろうと優菜が驚いているとウェイターが右手の人差し指をたてて小さく振った。

するとウェイターの左手にシルバーのトレイと湯気を立てる紅茶が入ったカップが二ついきなり出現する。

何処かに隠し持っていたとかではない。文字通り忽然と出現した。

「おじさん。マジックの人？」

「いやいや違うよ小さなお嬢さん。私は彼等ほど器用ではないから。楠木君も言っていたけど私は縁様の同種だからこの程度なら出来るのさ。と言ってもあの方には遠く及ばないけどね。それよりこれは私からのサービスだ。これを飲むくらいの短い時間。彼のことをちょっと話してあげようか？　当たり障りのない程度だけどね」

「……聞かせてもらっていいですか」

ウェイターの提案に優菜は乗る。

本人がいない所で話を聞くのはマナー違反ではあるが、優菜はどうしても気になっていた。
楠木勇也と名乗る人物のことを。

「縁様や私が君たちには見えるね？　でも本来は普通の人間には、私達の姿は見えないんだよ。元々そういう力を持っているか……異界の力。光、炎、水、雷なんかに姿を変る事が多いかな。まぁどっちにしろちがう世界の力だね。それを見てしまった者は見えるようになってしまうんだ。周波数が合うとでも思えばいいよ」

ウェイターの言葉で優菜は父を攫った炎を思い出す。
あの不可思議な炎。
あれを見たから自分達は縁を見られるようになったということのなのか。

「楠木君も元々普通の人間。でも彼は私たちが見える。見えるようになってしまった……意味は分かるだろ」

「っ！」

優菜は息をのむ。
まさか……楠木も大切な誰かを？

「そう……でも彼はさっきも言ったとおり普通の人間。比較的安全

な異界に渡るならともかく、違法召喚なんてする輩は、その世界でよほど強い権力を持っているか、強い力を有す者。危ない世界が多い。普通なら死んだと同義だと諦めて悲嘆に暮れるよ……でも彼は諦めない。出来ることをやるって、雑用から使い走り。何でもやって異世界に関わり続けてきたんだ……まぁそこから先が凄いけどね」

ウェイターは軽く笑いを浮かべる。
それはとんでもないことをしでかした子供を見るような驚きを含んだ顔だ。

「がむしゃらに前に進んでいくうちに、好かれたり、憎まれたり、一目置かれたり、軽蔑されたりと、いろんな人や存在と繋がりをもっていき、今じゃ古今無双退魔神刀『縁斬り』の史上最弱の継承者なんて裏の世界じゃちょっとした有名人にまでなってるくらいだ……もっとも私達八百万の存在にとってはもっと違う意味で有名だけどね。名も姿形も変わってしまわれたが”あの”縁様が選んだ神官だってね」

ウェイターの言う事の意味は知識を持たない優菜には半分も理解出来ない。
だがただの一般人であった楠木が大きな存在となっている事だけは判る。

「『当代鬼王』である玖木の娘さんも楠木くんは誑し込んでいるし、特三には『異界創』である金瀬八菜様の後ろ盾がある……彼なら大

丈夫だよ。絶対にお嬢さん達の家族を取り返してきてくれる。そういう男だよ」

ウェイターの言葉には言霊と呼べばいいのだろうか、優菜達を安心させる響きをもっていた。

第三交差外路

夕暮れの地方都市の駅前広場は、学校帰りの学生や家路に向かう会社員達が行き交い混み合いはじめていた。

徐々に増え始めている人混みの中で目立つ人影が二つ。

一人は窮屈そうなスーツの上に黒いコートを羽織、なぜか背中に竹刀袋を担いだ大男。

もう一人は大男のその三歩後ろでその影を踏まず静々と歩く純白の白地に舞い散る桜が描かれた艶やかな着物を身に纏う和装の美女。

周囲より頭一つ飛び抜けた巨漢に、深窓の令嬢然とした大和撫子は人通りの激しい駅までも目立つ存在だ。

名家のお嬢様と護衛とも見受けられる二人は、駅を目指して雑踏の中を進む。

巨体の放つ威圧感と和服美人のもつ圧倒的な存在感が、群衆をかき分け彼等の行く先に道が自然と開いていく。

スーツ越しでも判る鍛えられた肉体にどこかのプロ格闘家と、巨漢の顔を車内からまじまじと見るタクシー運転手。

駅前のコーヒーショップの二階席で雑談をしていた男子高校生の集団が、艶のある色気を醸し出す女性を無遠慮にも携帯で写真を撮り始める。

周囲から集まる好奇の視線。

大男が僅かな苦笑を口元に浮かべる一方で、美女は全く気にせず静かに歩んでいく

さほどの苦もなく自動改札の前に辿り着くと大男が胸の内ポケットからカードケースを取り出し、銀色に鈍く光るカードを取り出し、背後の美女へと振り向き一言、二言話しかける。

男の言葉に軽く頷いた美女は腰帯からぶら下げた巾着の口を開いて中から同じ色のカードを取り出した。

大男はそれを見てから自動改札へと向かいカードをかざし通り抜

け、次いで女性も男の後を追って改札を抜けていく。
だがこの時少し勘の効く者がいれば、違和感を覚えただろう。
改札口を抜けた途端に二人の放つ威圧感と存在感が極端に弱まっていた。
二人にあれほど好奇の視線を向けていた周囲の者達も既に興味を失い各々家路へと足を急ぎ、タクシー運転手は客はまだかとぼやき、男子高校生達は元通りの雑談を再開しはじめる。
急に気配の弱まった異質な二人。だがそれにたいして誰も違和感を覚えない。
いつもの夕暮れの駅前。ただ混み合う雑踏だけがあった。

人が行き違うのがやっとな狭い踊り場と上下に続く薄暗い階段が姫桜の前に出現していた。
両側には茶色い壁。つい先ほどまで前を歩いていた楠木やカードをかざした自動改札機の姿はない。
どうやら楠木はこの階層とは違う場所へ転送されたようだ。待っていればどうせすぐに来るだろうと姫桜は踊り場へと移動する。
薄汚れた雑居ビルの一角のような場所であっても、姫桜が立っているだけでどこか華やかに感じさせる。
玖木姫桜という女性はそれだけの存在感……空間すらも従わせる力を持っていた。

「本当に……無駄に凝っておりますね」

ここに来るのはもう四回目だが、いつも同じ感想を抱かされる。
姫桜は右手に持ったままのカードを見る。
先ほど自動改札に触れさせたカードは、ＪＲで使われているＳｕｉｃａなどの主要なＩＣカード同じ大きさ。
表面はシルバーの鏡面処理が施されており姫桜の顔を映すだけで、何も情報は記載されていない。
裏側には日本語表記とローマ字表記の姫桜の名前が刻印されているだけの飾りっ気のない物だ。
これは正式に『特三捜救』の一員となった姫桜に支給された日本国異界特別管理区第三交差外路への正規の通行証である。
第三交差外路への入り口。それはＪＲ、私鉄、主要路線、僻地を問わず全国の駅の改札口だ。
鉄道と駅というキーワードを発動条件にして発生する転移陣。
大仰すぎる仕掛けを施したのはそれを茶目っ気と宣う一人の女性。
国鉄からＪＲに変わるときのどさくさ紛れに、当時はまだ政府未公認で非合法だった第三交差外路への転送陣を各地の主要駅へと設置したのを切っ掛けに、某鉄道ゲームのノリで拡張していったそうだ。
自動改札が主となる前は特製の定期券型呪符を洒落で使っていたそうだが、年々増えていく関係者に合わせて作るのが面倒になったので、特製のＩＣカードにデータをコピーしての簡易製造という。
これは昔気質の術者達（秘術を神聖な物と位置づける者達）にとっては忌々しい事この上ない挑発といっていい。
姫桜を初めとする玖木一族が本来所属していた異能を代々受け継ぐ名門家系が統べる日本国異界特別管理区第二交差外路『特二』の

お歴々が、『特三』を毛嫌いする理由の主要因の一つだろう。
『特三』はとにもかくにも型破りな交差外路として知られている。
第三交差外路がいつ出来たのかは定かではない。ただ気づいたら存在していた。
いつの間にやら発生して徐々にはみだし者が集まり異界へと渡り、異界より来訪者が訪れ、それを危険視した『特一』『特二』の度重なる侵攻や妨害行為もはね除けて異界への道を開き続けてきた。
ついには日本公認の地位まで掴み、正式な交差外路と認められてしまった。
集まる者もまた一風変わっている。
名門家系のはぐれ者。
一代だけの超常者。
なんの力も持たないただの一般人。
国を捨てた異国の者。
ありとあらゆる人種が集まり……世界の理が違う遙かに遠い異世界の者達すらも常駐している。
現世にいくつも存在する交差外路の中でも来歴は異端中の異端。
忌み嫌う者は今でも多く、姫桜も道化共の巣窟と昔は蔑んでいた……それが今では。

「名門玖木の当主たる私も落ちるところまで落ちましたわね」

姫桜はクスクスと笑いながら心にもないことを呟く。
今が楽しくてしょうがない。
それが姫桜の正直な心情だ。
姫桜だけでない。弟や玖木に連なる者達。皆が九鬼としての軛を解き放たれ今を楽しんでいる。

そんな自由を楽しめるようにしてくれたのも……

「姫さん。ここにいたか。動かずにいてくれて助かるよ。はぐれたら困るからな」

「一本道ではぐれるか戯け。否……此奴の場合遊びでやりかねんか？　ええい！　とにかく貴様は此奴に甘すぎる！」

階下から上がってきた楠木が姫桜へと声を掛け、肩に腰掛ける縁は小言をクドクドとしながら楠木の耳を引っ張っている。

この騒がしい一人と一柱が姫桜をこの場所へと導いてくれた。

「楠木様。縁様。お待ちして降りました。私一人投げ出されてあまりの寂しさで泣きそうになりました」

口元に笑みを残しながら姫桜は下手な泣き真似をして見せると楠木がにやっと笑った。

「なら大丈夫だ。ここは面白いからな。つい最近模様替えした所だし。すぐに笑うさ……さてと行こうか」

楽しみにしてなと呟いてから楠木が階段を登りはじめ、姫桜もその後に続く。

緩やかな階段を薄暗い灯りの下に上がっていくと、不意に楠木が首だけ振り向いて姫桜に目で謝る。

「本当なら今日は再調査の後は事務所に戻って姫さんの着任挨拶と歓迎会のつもりだったんだが、悪いが予定変更だ。着いたらすぐに向かう」

「いえ。お気になさらず。判っておりましたから……楠木様は女子供にだけはお優しいですからね」

姫桜が意地の悪い声で答えて見せると、楠木が勘弁してくれと言いたげに頭をがじがじとかいた。

楠木が筑紫姉妹の願いを……悲痛で切実な祈りを受け取った以上、一刻でも早く叶えるために動くことは判りきっていた。

姫桜の目の前をふさぐ壁のような大きな背中。

この背に背負える想いはいかほどの物だろうか。

絶望、悲哀、憤怒。

親しき者を攫われた者が抱く悲痛で重い感情を楠木は依頼人から譲り受け背負い続ける。

ただの人間には過ぎたる重圧だろう

だがこの男は決して潰れない……それは姫桜もよく知っていた。

「……あらそうすると私は女としてみられておりませんのかしら？　こんなに尽くしておりますのに。今日も楠木様のご命令通り周辺を調べておりましたのに忘れ去られましたし、それともこれが巷でいう放置プレイという物でしょうか？　後で特三の皆様方に挨拶つ

いでに尋ねてみますね。それとも特二の長老方の方がいいでしょうか？」

「悪かった。戻ったら派手にやるから勘弁してくれ。特二に姫さんをそんな扱いしているなんて思われたら命が幾つあっても足らねぇっての……さてとそろそろ室長に最終連絡を入れとくか」

姫桜のクスクス笑いに楠木はばつが悪そうに頬を掻いてから、携帯を取りだしてどこかへと電話を掛け始める。

「楠木です。今戻りました……えぇ姫さんも一緒です……いえ。さっきも言ったとおり公園から直接向かいますよ……だから許可の方と向こう側に連絡を……宴席のキャンセル料？……だからまだ予約は取るなって……いやいやそこは室長の誠意って事で……はっ？！　八菜さんも来るつもりだった！？　っていうか幹事！？　……イベントも準備って……なにやってんだあの人は。そんなに暇じゃねえだろうが」

電話の向こう側からは姫桜にも聞こえるほどの大きさで女性の怒鳴り声が響いてくる。

『勝手なことするな』やら『どーすんのよ準備終わってるのに』と漏れ聞こえる声はどこか悲痛だ。

「やれやれ与太者共が。玖木の娘よ。喜べ。どうやら特三は親玉を筆頭にお主を大歓迎のようだぞ」

携帯から漏れ聞こえる怒鳴り声を煩わしく思ったのか縁が辟易とした顔を浮かべ姫桜の肩へと移ってくる。

「あら。それは嬉しいですね。何度か殺し合いになりかけた方もいらっしゃいますのに」

「ふん。奴らがそれくらいのことを気にするか。その筆頭が楠木じゃがの。全く……たった一度お主の気まぐれで命を救われたくらいで完全に気を許しおってからに。終いには引っ張り込みおって。何度お主の所為で死にかけたか。忘れておるのではなかろうな……」

縁がぐちぐちと愚痴をこぼしながら、苛立ちを現すかのように姫桜の耳を引っ張る。

「仕方ありません。楠木様の存在は邪魔だったんですもの……昔の私からすれば本当に忌々しいくらいに。幾度か陥れたのも立場の相違という物ですよ。『戒めの九鬼』としての理念に従ったまでです」

耳を引っ張る心地よい痛みに姫桜はクスクスと笑い声を漏らした。

「ちぃ……判っておるわ。お主らがお主らのやり方で現世を守ろう

としてたのは。ただしここは『特三』お主もここの一員になったのじゃ。妾達のやり方に従ってもらうぞ」

「それはもちろん。今の私は身も心も楠木様の下僕ですので……あら。縁様に私は嫌われていると思いましたのに、お仲間と思っていただけていたとは。玖木姫桜光栄の至りです」

「白々しい……楠木と貴様の今の縁が良き物でなかったら、縁切りしてやるというのに」

縁は膝を組みあごに手を当てて不満げな顔でぶつくさと文句を言う。

どうやら姫桜の答えが手応えがなさ過ぎてつまらないようだ。

「背後の一柱と一人。これから実戦だってのに揉めてるな。縁様もいい年なんだから新人虐めしないように。あと姫さん。上司と部下な」

いつの間にやら電話を終わらせていた楠木が振り返って苦笑を浮かべている。

どうやら電話をしながらも姫桜達の会話には耳を傾けていたらしい。

姫桜の肩から飛び立った縁は楠木の後頭部を一発蹴りつけてから、その肩へとまた戻った。

「ふん。貴様が此奴を躾けぬから妾が苦言を呈したまでよ」

「これから姫さんには俺を守ってもらうんだ。なるべくご機嫌伺いしとかねと命に関わるからな」

「えぇ……おまかせください。私が楠木様をお守りいたしますので」

「楠木！　情けないことを申すな！　玖木の娘も嬉しそうな顔を浮かべるでないわ！」

縁の怒声に肩をすくめていた楠木が不意に足を止める。
薄暗い階段の登り切ったに明るい光が差し込む入り口が見えていた。
会話に夢中になっているうちに、いつの間にやら階段の一番上まで上がっていたようだ。
彼等と交わす会話が楽しく、姫桜はもう少し階段が続けばいいのにと心の隅で思っていた。

「っと、着いたな。さすがの姫さんもこれはちょいと驚くぜ」

楠木が秘密基地を自慢する子供の楽しげな笑みを浮かべていた。

「……」

階段から外へと出た姫桜は眩しさに顔の前に手をかざして光を押さえると、間武tらを細めてしばし光に目を慣らす。
水気を含んだ冷たい風が頬を撫で、僅かな草花の香りが鼻孔をくすぐる。
２０秒ほど経ってから姫桜がゆっくりと目を見開き周囲を見渡す。
どうやらここはすり鉢状になった公園の底に作られた東屋のようだ。
よく手入れのされた花壇には色とりどりの花が咲き乱れて、周囲には幾つもの樹木が植えられている。
しかしその季節感はバラバラだ。
春の菜の花が黄色を染めて咲いていたかと思えば、その横では夏の薄紫色の朝顔が蔓を伸ばし、秋のキンモクセイの甘い香りが漂い、冬の梅が枝一杯に白い花を咲かせている。
ふと姫桜が背後を振り返ってみると先ほど上がってきたばかりの階段は消え失せていた。

「あら……普通ですね。以前お邪魔させていただいた時は確かバベルでしたでしょうか？　砂漠の中に天に届くような塔がそびえ立っている様に驚きました」

東屋の外でにんまりとした笑みを浮かべている楠木に、姫桜は些か拍子抜けした感想を伝える。
季節を無視した艶やかな草木の共演は確かに見事な物だが姫桜がそれほど驚愕を覚えるほどの物ではない。
楠木がこの程度のことを自慢するだろうかと姫桜は小首をかしげる。

「そりゃあたぶんドルアーガ。バベルは元ネタの神話の方だな。ありゃあ八菜さんが懐ゲーに嵌ってててた時の構造なんだが、内部にエレベーターつけねぇし、謎解きが多すぎるわで身内には大不評だったな……ほれ姫さんこっちだ。視線は地面に向けてくれ」

うんざりした顔の口元に笑みを浮かべた楠木が手招きをして姫桜を呼び寄せる。
楽しげな楠木の顔を見るにどうやら本命はまだまだのようだ。
姫桜はクスクスと笑いながら一体どのような物を見せてくれるのだろうと楽しみに思いながら足元を見ながら楠木へと近付く。

「さて姫さん……ご覧あれ」

「……」

弾んだ声で楠木が空を指さす。指につられて空を見上げた姫桜は

しばし言葉を失う。
空が丸かった。
丸い空には張り付く大地があった。
逆さまの大地には木が生い茂る森が点在し、森からは巨大な水路が延びている。
水路はいくつにか枝分かれして森の外に広がる農地へと水を運んでいる。
農地の傍らには牧草地まであるのだろうか。ごま粒のような点で動く家畜の群れまで見えた。
農地を両断するように石畳が敷かれ、石畳の道は農地を頂点とし曲線を描きながら左右に伸びていく。
道の先には背の低いビル群で形成された商業街や繁華街が姿を現す。
球状になった世界の内側に存在する世界。

「……相変わらず恐ろしいまでの事を平然とやってのけるみたいですね。特三の管理人である金瀬八菜様は」

自分が立っている場所の正体にようやく気づき理解した姫桜は、思わず止まっていた息を吐きだす。
凄いがあまりにも馬鹿馬鹿しい光景に呆れるやら感心したりといった所だ。

「まぁな。いつも通りっていえばいつも通りだがよ。戻ったら挨拶にいくか」

珍しく素の驚きの顔をさらしていた姫桜の様子に楠木は破顔する。肝の据わっている姫桜を驚かせるのは並大抵の事では難しいのをよく知っているからだ。

自分の思い描いた世界を自由自在に……しかもたった一人で作り出し、維持管理すらも平然とこなす人に似た何か。

正体不明の女性であり、希代の遊び人。そして異世界への誘い人。日本国異界特別管理区第三交差外路管理人であり『異界創』と呼ばれる金瀬八菜。

この世界は一人の女性が、世界の半歩外に作り出したまるでおもちゃ箱のような箱庭世界である。

「元ネタは地球内部空洞説ってやつだな。本当は深夜アニメのロボット物に嵌って宇宙コロニーを作りたかったみたいなんだけど、次期世界構想選挙の投票で負けてな。こっちになった。八菜さんは相当残念がってたけどな」

八菜が自由自在に作れる世界といっても、そこは利用する側の意見もある。

どうせやるなら面白くしようという発案で不規則に開かれる世界構想選挙は特三の名物企画の一つとなっている。

あるときは蒸気の煙漂うスチームパンクな機械都市。

またあるときは呼吸できる水で満たされた海底都市。

はたまたあるときは足元を溶岩の川が流れる火山都市。

その時折に脈絡なく姿形を変える特三は、とらえどころのない管

理人である女性と何処かだぶる。

「ふん。あの戯け異神め。最終的には『ころにー落とし攻防戦』とやらのイベントも画策しておったようじゃ。負けて当然じゃ。そんな物に付き合わされる妾の身になれ……この間など、どこぞの小娘を引き込んで伝説の勇者ごっごとやらをやりおって。お供の妖精役なぞやらされたのじゃぞ。この妾が」

つい先日も八菜の悪ふざけに付き合わされた縁が忌々しげに呟く。普段の巫女服ではなく水着のような薄手の服を着せられた上に背中に羽の飾り物をつけられたのだが、それがよほど嫌だったらしい。

「あの格好は縁様に似合ってたけどな……まぁそれはともかくだ。姫さん改めて歓迎するぜ。特三にようこそな」

楠木はにやっとした笑みを浮かべ姫桜に笑いかけ……そして表情を改める。

ここは既に異世界への道の始点であるからだ。

異世界へと移動する力さえあれば今すぐにでも跳ぶことができる。

この道の先に助けるべき人。連れ帰るべき人達がいる。

奪還者である楠木勇也が生きる今がある。

「こちらこそ改めてよろしくお願いいたします。楠木様。縁様。玖木姫桜の力。ご存分にお遣いください」

楠木の雰囲気が変わった事を察した姫桜も薄い笑みを浮かべつつも背筋を伸ばして小さな会釈で返す。

「ふん……歓迎してやる。じゃから気合いを入れて励め。玖木の娘」

勝ち気な笑みを浮かべた縁が姫桜に答えてから、楠木の肩を軽く蹴って身体から離れた。

そのまま音もなく空中を移動した縁は楠木の前でピタと止まると、真正面から楠木の目を見つめる。

「楠木。控えよ」

楠木に命じた縁が普段は押さえている絶大な神格を開放していく。

ピシリピシリと音を立てて大気が震える。

噴水の水が波を立ててざわめく。

神気をはらんだ縁の声が周囲の空間を清めて瞬く間に清廉な空間へと浄化していく。

黒瞳が徐々に神の力を含む銀色に染まっていく。

その目は深い。

楠木を見つめる小さな瞳は楠木の全てを飲み込んでも決して埋まることのない虚無の深さだ。

この深さが縁の持つ底知れぬ器を示す。

これから始まるのは儀式。

崇め奉る神である縁の慈悲を奪還者として、そして神官として請う神聖なる儀式

縁の命に従い楠木は片膝を着くと深々と頭を垂れる。

「妾が選びし神官楠木よ。妾の目的をつげよ」

荘厳たる声が楠木の全身を揺さぶる。

嘘偽りは許さぬと楠木の魂までも縛り付ける。

だが縁に欺く虚偽などない。

縁の問いかけに楠木は懐へと手をいれて折り畳んでいた懐紙を取り出しゆっくりと開く。

納められているのは先ほど捧げられた優菜の髪。そして優陽の帽子だ。

二人の姉妹の思いが込められた父親との大切な縁を宿す絆その物。

「二人の娘の切なる願いを受け、偽りなる悪縁を斬り真なる縁を再度紡ぐ為。向かうは十二の聖書が森羅万象の理を統べる世界『カルネイド』　我が神。救心神刀『退魔捜世救心縁』　我にお力をお貸しください」

髪と帽子を載せた懐紙を楠木は両手で縁へとさっと差し出す。

「承知した」

縁が力強く頷き答えると共に一陣の風が吹いた。

風が懐紙の上で渦を巻いたかと思うと、乗せられていた髪と帽子

がさらさらと風化していき、風と一緒に縁の身体へと吸い込まれていく。
あっという間に懐紙の上から髪と帽子が消え失せた。
縁が軽く目を閉じる。
髪と帽子に籠められた『縁』。
そして楠木の伝えた地の真名。
二つを合わせ異界への道を開くために集中していく。

「捉えた……ふん。半人前が。口上だけは多少は様になったと褒めてやるわ。ではいくぞ」

しばらくして目を見開いた縁は口調とは裏腹に満足げな顔で一つ頷いてから楠木の肩へと飛び乗る。

「そりゃ縁様にあれだけ仕込まれりゃね……姫さん失礼」

縁の褒め言葉に楠木は嬉しげに笑みを返して立ち上がると、姫桜に一言断ってから腰に腕を這わせて抱き寄せる。
姫桜も何も言わず楠木へとぴたりと身体をつける。

「では参るぞ……真なる縁を辿り道を開く。我は八百万の御霊にして絆を司る一柱……世を断絶する壁に在りし道よ！　我らを導け！」

縁が強い言霊を込めて両手を振り下ろすと共に、二人と一柱はこ

の世界から消え去った。

奪還篇　山奥の名医？

体中の細胞が一つ一つ引きはがされ己が拡散する。
小指の爪よりもさらに身体が小さく圧縮される。
心から大切なものがこぼれ落ちていく恐怖。
心へと次々に浸食してくる異物に対する嫌悪。
視界は闇に染まり静寂が辺りを覆いつくす中で、引きちぎられ、圧縮され、引き抜かれ、詰め込まれるという相反する感覚が楠木勇也の心身を苛む。
異世界とは文字通り異なる世界。
自然法則も、原理も、在り方すらも違う。
矛盾する感覚とはそんな異界へと対する純然たる拒否反応が生み出した産物だ。
ある程度異世界へと渡り歩き経験を積めば大抵の者ならばそのうちに自然と慣れて、拒否反応を示す事もなくなるはずだが、未だに楠木は慣れることが出来ずにいた。
才能がないのか、向いていないのか、それとも単にそういう体質なのか。
考えてみた所で答えなど無い。
だからただ耐える。
この苦行が始まったのは一瞬前のような気もする。
一時間前だったかも知れない。
否それとも数日、数ヶ月、数年、それとももっともっと長い年月か。
どれもが正解で、どれもが間違っているような曖昧な時間感覚がさらに苦痛となる。
しかしそれでもただ耐える。耐えることが出来る。
別に苦痛が好きなのではない。
痛みは人並みに遠慮したい物であり、ましてや痛みを喜ぶような

特殊性癖を持っているわけでもない。
だがこの痛みだけは別物だ。
この痛みの先にこそ今の楠木の根幹を司る目的、目標が存在する。
いつまでも慣れる事ができずにいる偶然に楠木は感謝している。
この痛みこそが失った者の心。
この痛みこそが引きはがされた絆。
己の存在が壊され汚され犯される嘆き。
常に痛みを感じるからこそ、異なる世界へと攫われた者を取り戻す奪還者として歩み続けていける。

「……き。……の坊。いい加減目覚めぬか。着いたぞ」

右の耳を引っ張られる軽い痛みと聞き慣れた声が、朦朧としていた楠木の意識を覚醒させた。
頭蓋骨の裏側に鉛が張り付いているのではないかと思うほどに頭が重く、喉がひりひりと渇き胃は落ち着き無く上下する。
背中にはやけに冷たい汗がだらりと流れてシャツがべったりと張りつく。
異界渡り後の肉体、精神状態は相変わらず最悪だ。
それでも倒れないだけマシ。
二日酔いと風邪が同時にきたような悪寒を覚えながらも、楠木は

まだ良い方だと重苦しい肺に無理をして息を吸う。
吸い込む空気はひんやりと冷たく微かな湿り気を帯びており、熱を帯びていた身体には心地良い。
異世界に赴いてまず楠木がするのは深呼吸だ。
気持ちを落ち着けようとする意味もあるが、もっとも大きな理由は　所謂”異世界人”である自分が活動可能なのか確認する為だ。
異世界とは文字通り、理が異なる世界である。
現世とは大気も物質も自然法則さえ異なる世界。
そんな所へ何の準備もせずに行けば呼吸も出来ず身体を維持することも出来ない。
それどころか異物である楠木に世界が防御反応をみせれば一瞬で消滅するか、取り込まれ食われる可能性もある。
そうでなかったとしても世界の外へと弾き飛ばされ、世界と世界の狭間の空間。
世界を変える力の総称『世界改変力』で出来た海に溶け込み永遠に彷徨う羽目になるだろう。
そうならないために異世界に滞在する為に訪問者達がとる方法は、大まかに転生、憑依、結界の三つに分かれる。
転生は目的世界の生物や存在へと、自分や他者を生まれ変わらせる術法。
憑依とは肉体は元の世界に残したまま、精神体だけを目的世界に既存する生命、物質に宿らせる術法。
この二つは存在その物を変質させ世界へと適合させる方法で比較的に楽な方法であるが、自身の肉体精神を変化させることに抵抗を覚える者は多い。
その為に今現在もっともポピュラーな方法は第三の方法、結界である。
己が周囲を常に本来所属する世界の法則へと書き換えながら、同時に滞在世界に取り込まれたり排除されないように調整し続ける高等術。

一昔前はよほど高等な術者でなければ結界の担い手とはなれなかったのだが、今では神機融合技術に基づく神殿結界機と呼ばれる神の宿りし機械が出回り、それこそ異能を持たない一般人であろうが異界への旅行は可能となっている。

だが楠木の場合は違う。

楠木も携帯電話型神殿結界機を一台保有しているが、これはあくまでも非常用でしかない。

八百万の御柱の中でも旧き強き神である縁に使える神官である楠にはその庇護により、理之転（ことわりのてん）と呼ばれる最高位の結界術が常に張られている。

理之転は精神生命体しか存在できない虚無世界であろうが、超高温超高圧環境の煉獄世界であろうが、現世と同じ感覚で活動することを可能とする現世においても数人しか使い手がいない超高等結界術だ。

「……おいおい勘弁してくれ」

ゆっくりと瞼を開いた楠木は周囲の光景を確認して微かに頬を引きつらせた。

市民体育館ほどの広さと高さを持つ何処かの建物内。

天井にはまばゆい光を放つ文字が幾つも浮かんでおり、真昼のような明るさで屋内を照らし出す。

楠木達が立つ場所は水を張り巡らせた対岸までは5メートル以上はありそうな堀で囲まれて池の中に浮かぶ島のようになっている。

足元に目をむければ黒光りする硬い石の表面を、まるで電光掲示板のように無数の文字が緩やかに流れていく。

だが楠木が驚いたのは、今立っている場所や乱舞する文字ではない。

問題は対岸。
対岸で陣取る目算で５０人は軽く上回る西洋風の鎧に身を包んだ完全武装の殺気だった戦士達。
少し変わっているのは対岸にずらりと並んだ戦士達の手には剣や槍といった武器はなく、その代わりに豪華な装飾が施された大きな書物を左手に持っていることだろうか。

「……縁様。モーニングコールのおかげで心地良い目覚めです。それと理之転毎度毎度感謝です」

対岸の武装集団をとりあえずあえて無視した楠は、右肩に腰掛けている縁へと顔を向けると軽く目礼する。

「妾には些事じゃ。礼などいらんといつも言っておるだろうが。それよりもはよ横の狸娘も叩き起こさんか」

眉をしかめた縁は不機嫌そうに顎で楠木の左を指し示す。
縁の指し示した先では異界へと渡る前に抱き寄せていた姫桜が楠木にピタリと身を寄せ少女のようなあどけなさを残し眠っているかのように瞼を閉じているが、名前通りの桜色の口元からはクスクスと小さな笑みをこぼしていた。
どうやら本人も隠す気のない狸寝入りをしているようだ。

「はいよ。姫さんお目覚めを。ひょっとしたらお仕事のお時間になるかもしれないんで」

姫桜の腰から左腕を離した楠は、その華奢な肩をポンと軽く叩いて声をかける。
ちなみに姫桜も理之転を使っているが、こちらは姫桜本人が自ら張っている。

「目覚めの口づけの一つでもいただけると思いましたのに……おはようございます楠木様。ご気分はいかがですか？」

吐息をこぼしてみせた姫桜は一歩離れるとクスクスと楽しげな笑みをこぼしながら楠木の顔をのぞき込んできた。
姫桜が動いた事が原因か相手側から向けられる鋭い警戒心がより強まる。
冷徹な刃を首筋に押し当てられたような寒気に楠木の首筋を冷たい汗がゆっくりと落ちた。

「……そりゃ縁様と姫さんと美女二人に挟まれてたんだ悪い気はしないわな」

今にも襲いかかってきそうな相手を前に楠木は目を逸らさず観察しながらも、平常心を保とうといつもの軽口を叩く。

「ふん。軽口叩いている暇があったら話を進めよ。相手方は熱烈な歓迎じゃぞ」

「そのようで。あれが聖書の写本だとするとあちらの方々が魔導騎士で、ここはカルネイドで間違いないと思いますけど」

『十二聖書』
そう呼ばれる巨大な十二冊の本が世界カルネイドを形作り構成する基本要素である。
この世の全ての動物。この世の全ての植物。この世の全ての現象。
時の流れすらも記載し制御する強大にして絶対なる理を管理する書物。
そして十二聖書を司る聖人達より高位写本を与えられ超越の力を振るう者達が魔導騎士と呼ばれている。
事前情報ではカルネイドは異世界間協力条約加盟世界で、今回の奪還においても協力を得られると楠木は聞いていたのだがどうにも話が違う。
何か情報伝達に間違いでもあったのか？
現地の情勢が急変したか？
あるいは自分達の服装や姿形がこの世界では忌避されるものなのか？
敵意にも近い警戒心を向けられる理由を探ろうと楠木は視線だけを動かし、

「あー……何となく判った」

「あら私の顔に何かついてますでしょうか？」

楠木の視線を受け止めた姫桜が軽く小首をかしげる。だがクスクス笑いは健在のまま。
視線の意味を完全に見抜いた上でとぼけているのは見え見えだ。

「姫さんほどの美人を横に侍らせてりゃ羨望と嫉妬の目線を向けられるなって話さ……まぁこのままお見合いしててもしょうがないんで、とりあえずは日本人らしく名刺交換といきましょうかね」

余裕があると見るべきか、それとも心底から楽しんでいるだけのか。
姫桜の剛胆さに楠木は呆れ半分感心半分で嘆息してから、スーツの左襟に手を掛けてゆっくりと開いていく。
対岸の騎士達の一部が微かに動いたのが見えたが、楠木は気にせずゆったりとした動作で右手を内ポケットへと入れ一枚の名刺サイズのカードを取り出す。
取り出したカードはマヨイガで優菜達にみせた銀色のカードだ。
視覚情報、聴覚情報、色情報、電気情報、はたまた言霊や精神波。世界によって使われる伝達手段は千差万別。
だがこのカードは相手の存在へと直接語りかけることによって、どこの世界であろうとも身の証を証明する事が出来るので重宝していた。
カードを頭の横に掲げた楠木が軽く指を弾くと淡い光を放ちはじめ、楠木達が属する世界や組織名を騎士達へと伝えていく。
もっともカルネイドは比較的現世に近い近似世界。
理之転が有する翻訳機能によって直接会話も可能である。
それでもあえて楠木がカードを使ったのは、騎士達の注意を姫桜から自分へと向けるためだ。

騎士達の意識がこちらに移った瞬間を見計らい楠木はおもむろに話を切り出す。

「日本国異界特別管理区第三交差外路特殊失踪者捜索救助室専任救助官楠木勇也。他一柱と一名。事前にご連絡させて戴きましたが、召喚被害者の捜索救助の為に伺わさせていただきました。どなたか責任者の方にお取り次ぎをお願いいたします」

友好的だろうが敵対的だろうがまずは交渉。それが楠木の基本スタイルだ。

玖木姫桜という強力な鬼札を手に入れた今でもそれは変わらない。むしろ交渉の重要性はより増したというべきだろうか。

楠木の呼びかけに対岸の騎士達の一部が左右に分かれて道が開かれ一人の中年男性騎士が姿を現す。

中肉中背。茶色がかった髪。他の者達と同じ鎧姿だが兜を被っておらず素顔を晒していた。

これといった特徴のない西洋系と似たような顔立ちだが、現世の者とは明らかに違う点が一つあった。

男性の目は硬質な輝きを放つ宝石のような石で出来ていた。

『お待ちしておりました。クスノキユウヤ様。エニシ様、クキキオウ様。管理者である四月の聖人リドナーより貴方方の歓待役を仰せ付かった魔導騎士ファランです』

中年騎士は名を名乗ると軽く一礼する。

周囲の他の騎士達がみせるような強い警戒心は表面上はでていな

いが、姫桜を警戒しているのか名を呼んだ時に僅かに声の質が変わっていた。

『誠に申し訳ございませんが聖人リドナーはただいま別件の会議に参加しており席を外しております。食事と部屋をご用意させていただいておりますので、戻られるまでしばしお待ちいただけますでしょうか』

口調だけは丁寧だが有無を言わせぬ雰囲気がファランの言葉の端端にはあった。

「……判りました。ではお言葉に甘えて待たせていただきます」

僅かに考えてから楠木は相手の提案に乗ることにする。

楠木の回答にその肩に座る縁も、横の姫桜も口は挟まず異議も唱えない。

交渉事は楠木の役割であることもあるが、おそらく楠木と同じ判断だろう。

『ではこちらへ』

ファランが腰の本を手に取りぱらぱらと頁を捲ると夥しい文字があふれ出す。

出現した大量の文字が空中を飛び堀の上に集まると互いに結びつ

いていったかと思うと、あっという間に一本の頑丈な石橋が出来上がる。

「んじゃあ……いきますか」

武装した騎士達。
歓待という名の強制的な誘い。
何らかの事情があるのは間違いないだろうなと考えながら楠木は出来上がったばかりの石橋へと迷うことなく一歩踏み出した。

魚らしき外観で茸のような形の足の生えた生物の炭火焼きグリルを丁寧にほぐし皮と骨と身により分ける。
ねじくれた螺旋を描く中骨。
石のように硬い瞳。
弾力がありすぎるゴムのような皮。
食欲を著しく減退しそうな部分を持参した箸でより分けると、身を僅かに摘んで添えつけのソースに絡めて、口へ運びゆっくりと咀

嚼し味を確かめる。
僅かな苦みと繊維質の食感。そして春を感じさせる香り。

「……春菊のごま和えに近いな。姫さんも食べるか？」

「えぇ。いただきます。楠木様。こちらの薄紫の水飴のような食感のソースは牛肉のお味がいたしますがいかがですか？　少し食感が物足りませんが」

向かい側で別の料理を試していた姫桜はにこりと微笑むとソースの入っている器を持ち上げてみせる。

「お。じゃあさっきのゴボウみたいなのと組み合わせるか。あれ食感は分厚い肉で味はコンニャクだったからな。合いそうだ」

四人掛けのテーブルの上に収まらんばかりに料理が広がる。
皿数は多いが一皿一皿の量が少ないので、どうやら多くの味を楽しませる趣向のようだ。
ただ異界の素材を使った料理の為、見た目とは裏腹な味や食感の物ばかりだ。
そこで楠木と姫桜の二人は少しずつ吟味しながら、食べ合わせることで自分達の嗜好に合う料理へと変えていた。
いきなり食べると驚くような味もあるので、その食事はゆっくりとしたペースだ。

「全くお主らは酔狂じゃの。この状況下でわざわざ異界の料理を楽しむ事に気を取られおって……情報確認が進まぬではないか」

楽しげに料理を批評し交換し合う二人を見ながら縁はぼやく。
最初は食事をしながらこちらへ来る前に仕入れていた情報の確認をしていたはずだったが、いつの間にやら話の中心は出てきた料理へと傾倒していた。

「第一じゃ。異界におる間は飲み食いせんでも力を取り込める『理之転』を張っておるのじゃから無理して食べる必要はあるまいに」

本来は楠木達は食事を取る必要など無い。
結界『理之転』により楠木達は直接的な飲食や排泄行為などの必要もなく、周囲から力を取り入れ不要物を自然と外へと放出する事が出来、適切な睡眠さえ取っていれば十分である。
しかし『理之転』の機能の一つ、異界の物質の本質を見極め、現世の物質から似たような物を探し五感に刺激を与える力。
簡単に言えばは比較的に似た味に変換することが出来る機能を、最大限に活用して異界の食事を楽しんでいた。

「あら。この玖木姫桜。おもてなしとしてお出し頂いたお料理を残すなどの不作法は出来ませんわ」

姫桜はクスクスを笑いながら薄緑の蛍光色を放つスープをスプー

ンで掬い口に含む。
上質なごまの香りと朧豆腐のような食感が広がり、思わぬ美味に姫桜が満足な吐息を漏らす。
姫桜の仕草一つ一つには天然の色気が滲む。

「これはこれで面白いからな……縁様にはこいつはどうだ？　かりんとうの食感で大福の味がするぞ。好きだろ？　和菓子」

楠木は肉らしき料理の端に添えられたスティック野菜の味を確かめると、箸で小さく切って縁にあわせた大きさして目の前に差し出す。

「ふん……所望する」

軽く小鼻を鳴らした縁だったが、箸の先から乱暴にもぎ取った野菜を口に含んだ途端押し黙った。
どうやらこの野菜をお気に召したらしいと、楠木はにやりと笑う。
縁との付き合いも随分長い。縁に捧げる供物として料理や酒を買いそろえておくのが普段からの日課となっているので、縁の好みならほぼ判る。
どうやら今回もその判断に間違いはなかったようだ。

「一々勝ち誇った顔をしおってからに……妾に今の食物をすべて捧げよ。ありがたく受け取ってやろう」

「はいはい。身に余る光栄です」

縁の言葉を予想していた楠木は既に小皿に分けていた野菜スティックを縁の前に置くと、不機嫌そうな顔のままだが僅かに目元を弛めた縁がかぶりつきはじめる。

「さてと縁様にも怒られたんでお仕事の話と参りますか。姫さんどこまで話したっけ？」

「確か十二聖書に記載されていない薬草が見つかったという辺りだったかと」

「はいよ。んじゃ続きだ。十二聖書ってのはこの世界の全てを記載してあるはずだ。ところがだ一年ほど前に正体不明な薬草と傷薬が少量だが裏の市場に流れているのが摘発されたそうだ。異界から持ち込まれた物でなくてこの世界の物って反応付きでな。聖書に記載できるのは選ばれた十二人の聖人だけ。しかも新たな記載する際には大々的に公表されるのが慣例だが、今回見つかった薬草にはない」

姫桜へと視線を戻した楠木は説明の続きをはじめる。

カルネイド世界と現世では時間の流れは大幅に違う。

現世では一ヶ月の時間の流れが、カルネイドにおいては約一年に該当する。医師筑紫亮介が消え去った二月前はこの世界での二年前に該当する。

「問題視したこの世界の異世界機関は調査を開始。各聖書の記載を確認しようとしていたらしいだが、ところがそれからすぐに別の大事が起きて調査は中途半端になってる。それでも一応は発見された植物に該当する存在が他世界にあるかどうかを条約加盟世界に問いあわせはしていたらしい。そいつがビンゴって訳だ」

若い頃から海外の最貧国などへと赴任していた筑紫亮介は常に不足する薬や医療器具に苦労していたという。

その所為か日本に帰国後は無医村に赴任すると共に地元の老人や猟師から薬草の見分け方や栽培方法や伝来の薬の師事を受け、現代医療との融合を目指していたとの記録がある。 薬草の生育と薬の再現。一年でそこまでの準備は出来るだろうか？

期間は短すぎる気はするが、同じ異世界に薬草学を学んでいた医師がおり出所不明の現世の薬草。繋げて考えるのが自然だろう。

「ふふ……私たちの世界の植物や薬がいつの間に聖書には記載されていたんでしょうね？」

姫桜は楽しげに食事を続けながら疑問を口にする。

だがそれは楠木に対する問いかけではない。

別の者へと対するボールだ。

「さてな。そうする為には世界の理を変える事ができるほどの大物。聖人が関わっているはずだが薬の密売。しかも少量。そんなけちく

さいことするのかって問題だわな。この大規模な城塞持ちのリドナーさんって聖人と同等なんだろうから、相当強い権力を持ってるみたいだからな」

ファランの先導で部屋を出た楠木達はすぐに螺旋階段をグルグルと上に向かって登る事になった。

その時に途中にあった出窓から楠木はちらりと外をみて、ここが巨大な城塞である事を確認していた。

そして登っていたのがその中でも極めて高く大きな中央塔である事も。

位置や上がった距離から見ても最初に降り立った場所。この世界における交差外路は塔の真下である地下にあったようだ。

これだけの規模と掛かる維持費を考えれば、違う世界であろうとも城の持ち主が強い権力を有することは自ずと判る。

「それと今回の件と関連しているかは判らないが、リドナーさんとやらが出ている会議の内容だ……最近なこの世界にもいくつかある交差外路の、っとこの世界じゃポータルポイントって名前か。ほとんどのポータルポイントの力が著しく落ちているそうだ。今までなら直接渡れた世界に渡れなくなった。それどころか世界改変力の流入量までが落ち込んできたそうだ」

リドナーとすぐ面会できない理由をたずねた楠木に対してファランの返答がこれだった。

内容を聞いてみれば確かにこの理由ならそちらを優先するのもある程度なら納得は出来る。

それほどに交差外路の出力低下という問題は大きい。

「あらあら。それは大変ですね……世界の終末が近いと？」

世界を変える力『世界改変力』。これが尽きて終った世界は凍り付く。それは世界の終わり……死だ。

交差外路とは異界へ渡る道であると同時に、世界改変力が世界の外側から流れ込んでくるパワースポットでもある。

交差外路から流れ込んだ世界改変力が世界を変えていく力となり、世界は変化していく。

もし流入する量が落ちれば他世界への出入り口は狭まり道は細まり、熱を失った世界も徐々に死に近付いていく。

「所がそうでもないようだ……これから先は特三の情報だけどな。カルネイド世界全体で見た場合の総改変力は変わっていない。もっとも改変力の総量変動なんて観察を続けてないとそうそうは調べることが出来ないんだが、八菜さんが”たまたま”この世界を観測してたから判ったんだがよ……ったく。相変わらずどこまでが冗談で、どこからが本当か良くわからねぇ人だよ」

楠木は苦笑を浮かべる。

星の数ほど世界が存在する無量大数世界から、近いうちに召喚事件が起こるカルネイド”だけ”を見ていたのか？

それとも無量大数世界の”全て”を観察していたのか？

普段が普段だけに畏怖を覚えることはないが、金瀬八菜と名乗る存在がどちらにしても人知を越えた存在である事に間違いはない。

「とりあえずはここの異世界機関もそれは掴んでいて、どこかに新たなポータルポイントが、それも周囲の力すら引き寄せちまうとびきり強力なのが出来てるんじゃないかって所らしい。そのだいたいの場所も予想はついている。ただ極秘情報だから俺たちに教えていいのかって揉めてるって所かね？」

事前に得た情報、ファランより与えられた情報から辿り着いた推測。

もっともこの程度のこと姫桜ならば自分が話さなくてもとっくに判っているだろう。そう思いつつも楠木は口にする。

今必要なことは手札をみせる事。全てをさらけ出すわけではないが、それなりの信頼を得られる所までカードを開いていくことだ。

「ふん。回りくどいぞ楠木。妾の感じる縁は、大きな世界改変力を感じる方向と同位にある。とっとと向かえばいいのじゃ。あの姉妹に父親をすぐに取り返してやると大見得を切っておったくせにもたもたしおって」

「いや俺もそうしたい所ですけど……さすがにこの状況で無理矢理抜け出したら纏まる話も纏まりませんよ」

苛立ち混じりの縁に対して楠木は室内を見渡し肩を竦める。

部屋の隅には魔導騎士が幾人も控えていた。

給仕役という名目だが、それにしては警戒心が極めて強く監視役である事は間違いない。

塔の外にも彼等と同位の騎士が幾人も待機し警戒していることだろう。
幾つもの世界を渡り歩き荒らし回る龍とすら臆すことなく闘うはずの精鋭達。
だが今の彼等はどこかおびえの混じった視線で一点をただ見ている。
視線の先にいるのは楠木ではない。彼等の視線の先にはがにこりと微笑み食事を楽しむ姫桜の姿があった。
姫桜が僅かに動くだけでびくりと震え、何度も本へと手を伸ばしかけては戻す様は滑稽を通り越して哀れになってくる。

「姫さんの悪名高さは知ってたんだが、まさかここまでとは。ここらの異世界にも響いてんのな。さすが最凶の抑止力。有無もいわせず拘束されることになるとは思わなかった。さすがに」

がじがじと頭をかいた楠木は喉を潤そうと杯をとったが、それが醤油味だったことを思いだしそのままテーブルに戻す。
姫桜とは以前にも臨時で組んだ事があるが、その時には所属が違うので現地集合現地解散がほとんどであった為、楠木もいきなりこのような対応を取られるとは夢にも思っていなかったのが正直なところだ。

「戒めの玖木。別名殲滅の九鬼。違法召喚した輩を一族郎党、場合によっては国諸共まとめて叩き潰してきた玖木の中でも群を抜いて悪辣非道な娘じゃからの……気持ちは判らなくはないが。おい楠木。此奴を放置して妾達だけ先行するか？」

花林糖の食感で大福味の野菜をかりかりと嚙りながら、縁が深い溜息を吐く。
長い年月を生きる縁は代々の玖木の当主達とも幾人も面識があり関わったこともあるそうだが、その縁をしても姫桜は別格扱いするほどに、数多の世界から恐れられている。

「できませんっての……無駄に死にたくないから俺も」

姫桜の護衛なしで違法召喚者に面会するなど、自他共に認める弱者である楠木にとっては自殺行為も良いところ。
まずは姫桜が自由に動ける環境を作らなければしょうがない。

「模倣者が出ないように叩き潰してきただけですのに……何か後ろめたい所でもあるのでしょうか？　いつもならここまで大事になる事はありませんのに、少し話し合って終わりなんですけどね」

元凶の姫桜はこの対応をさほど気にもせずにこりと微笑んでいる。
その外見だけ見れば深窓の令嬢そのものだが、中身は悪鬼羅刹といっても生温いほどに苛烈にして凶悪と知る楠木からすれば、この微笑み自体も一種の罠だ。

「姫さん……あんたはやっぱ大物だよ」

「あら、ありがとうございます。でも楠木様。お急ぎのようでしたらこの程度なら城塞事破壊するのも容易いですよ。楠木様がお望みなら下僕の私はいつでもやらさせていただきます」

姫桜は楠木のぼやきに礼を言ってから、身を乗り出して楠木に顔を寄せると物騒なことを囁いた。

おそらく冗談だろうがここで楠木が頷いたら本当にやりかねないのが姫桜だ。

「無しだっての。後上司と部下」

溜息を吐いた楠木は姫桜の額を指で少し強く弾く。

所謂デコピンだが、楠木の行動に部屋の隅にいた騎士達が身じろぎざわめく。

命知らずやら、何者だという途切れ途切れの言葉が聞こえてくるが、姫桜に対する接し方を見られる度に言われ慣れていた反応なので特に気にも掛けない。

第一肝心の姫桜がこういうやり取りを楽しんでおり、楠木自身も軽口のやり取りは嫌いではないのだから、他人にどうこう言われる筋合いはない。

「楠木様のお手伝いをしたいだけですのに、楠木様にとってやはり私は身体だけの女なのですね」

「はいはい姫さんのことは頼りにしてますよ。訳ありだとは思うけ

ど、そろそろその辺も含めて説明が欲しいところ何だけど……っと動いたか」

額を押さえて楽しげに下手な泣き真似をし始めた姫桜の頭をおざなりに撫でていた楠木は、扉が開く音を聞き入り口側へと目をむける。

部屋へと入ってきた歓待役の中年騎士ファランが微かに青ざめた顔を浮かべながら一礼する。

『大変遅くなり失礼いたしました。聖人リドナーが皆様方のお話を伺いたいとのことです。おこしいただけますか？』

「えぇ。すぐにでも」

自分のみせたカードの効果か。それとも姫桜の直接的すぎる脅しの成果か。

どちらにしろ事態が動いた事に変わりはなく望む所だ。

楠木は食事を中断するとすぐに椅子から立ち上がった。

奪還篇　山奥の名医？

『お出しした料理は楽しんでいただけたようで。そうと判っていれば毒を混ぜとけば良かったと後悔してね、茶には入れといたけど飲んでもらえるかい？』

邪気のない笑顔で対面に腰掛ける三十路そこそこの女性は薄水色の液体が入ったカップを掲げながら、表情とは裏腹な毒を投げかける。

異世界人といっても女性は楠木達と一見変わらない姿形だが、その両眼は接待役である騎士ファランと同じく石のような物質で出来ている。

赤色の宝石とでも呼べばいいのだろうか。硬質な光放つ石がその眼孔にはぴたりと収まっていた。先ほどの魚もどきも眼は石となっていた。

文字が強い意味を成すこの世界において石のような目が何らかの優位性があり、生物が持つ特徴となったのだろうかと楠木は暢気に考える。

リドナーと名乗ったこの女性が十二聖書に選ばれた聖人の一人であり、カルネイド世界にいくつかある交差外路を一元的に総管理し、異世界関連事項に関する責任者だという。

彼女の執務室に通された楠木達は、応接用のソファーで腹の探り合いを早速開始していた。

「あぁ、それなら大丈夫ですよ。俺はともかく姫さんに毒なんて通用しませんからね。きっかり貴女とそのお仲間をまとめてぶっつぶして、敵を取ってくれますから」

「あら……楠木様に信用されておりませんのかしら？　楠木様を失ったなら悲しみの余りこの世界その物を潰しますのに」

敬語をまぜた言葉遣いでリドナーと同種の友好的な笑顔を装った楠木が、これまた直接的な毒を投げ返すと、合いの手を入れるように左隣に座った姫桜が下手な泣き真似を始めた。

だが手の間から覗かせる両眼は、楠木に手を出したらただじゃ置かないと雄弁に物語り、全身からは寒気とおぞましさを含んだ鬼気を滲ませる。

リドナーの牽制と姫桜の気配に耐えかねたのか、背後に控えているファランが胃のあたりを気にしていた。

一方で姫桜の横に座る楠木も心臓をわしづかみにされたような恐怖感を感じ笑顔を引きつらせる。

遊び半分といえ姫桜が醸し出す威圧は小動物なら殺し、植物も枯らしてしまうほど。背筋を伝わって這いずり上がってくる冷気は正直身体に悪い。

影響を受けまくっている男二人に比べて女性陣は平然な顔を浮かべたままだ。

発生源である姫桜は未だ下手な泣き真似を続けており、内心は判らないが変わらない笑みを浮かべるリドナー。

そして楠木の右肩に腰掛ける神様に到っては、下らんとばかりに欠伸を浮かべる始末だ。

「まったく……痴れ者しかおらんのか。話が進まん。玖木の娘。無駄に喧嘩を売るな」

縁いわくこの程度の鬼気『黄泉比良坂』で慣れたとの事だが、そんな大層な物と比べられても感心すればいいのか、勘弁してほしいと思うべきなのか判断に困る。
縁の注意に姫桜がクスクスと笑うと、室内に充満して気配があっさりと霧散した。

『……って事はあんたに何か無い限りは、クキの姫君の事はそう心配しなくても良いってことかい？』

気配が収まった所でリドナーが笑みを潜めて真剣な顔を浮かべる。
返答次第では一戦やり合うのも仕方がないとでも思っているのか、赤眼が放つ光が強まった。
やはり一番の心配事はそれか……
予想した通りの状況にどう答えた物かと一瞬思い、結局いつも通りにいこうと楠木は口元に人の悪い笑みを浮かべる。

「今の姫さんは特二じゃありませんからね。俺と同じ特三。正義の味方ですよ」

巫山戯た物言いをはき出した楠木はソファーの背へとその長身を預けながら、横に座った姫桜の頭へと左手を伸ばして、その頭をぽんぽんと軽く撫でて、ほれこの通りと示してみせる。
もっとも楠木のこの行動は、唸り声をあげている猛獣の口の中に頭を突っ込み安全性を示すパフォーマンスとさほど変わらない。
相手がどう捉えるかは微妙な所だ。

「えぇ今は楠木様と同じ”自称”正義の味方ですので、貴女方が私共の世界に仇なす悪者でない限りご心配なさらずに」

クスクス笑いながら姫桜がそっと楠木へと身を寄せる。
先ほどまでの鬼気を身体が覚えているのか、反射的に思わず姫桜から逃げようとする身体を楠木は無理矢理押さえつける。
このくらいのことで姫桜が傷つくわけはないのだが、逃げないのは姫桜を誑かし利用している楠木としての最低限の誠意だ。
もっとも客観的に見れば姫桜の方から好き好んで誑かされ利用されているとも言えなくもないのだが。

「姫さん。そろそろ遊びは終わりにしてくれ。あとで相手してやるから」

「あら。では楽しみにしておきます」

乱れる脈を静めながら楠木が軽く頭を下げると、思っていたよりもあっさりと姫桜が身を離す。
２人のやり取りを真剣な顔つきで見ていたリドナーは軽く息を吐いて緊張感をとくと手に持っていた茶を一気に煽った。

『失礼したね。この通り毒なんて入れてないさ。安心して召し上がってくれ。この辺りじゃ一番上等な茶葉だよ』

「そりゃどうも。ご馳走になります……」

安全性を示すと言うよりも喉がからからに渇いていただけではないかと思いつつも、楠木もテーブルの上に置いたままだったカップへと手を伸ばして口に含む。

薄水色の液体は泡もないのに炭酸のような刺激があり何処か薬品くさい。中途半端なぬるさが香りを余計に引き立てる。

だがこの一度飲んだら忘れられない懐かしい味。

まだ小学生だった時の幼なじみと繰り広げた稽古勝負のなかでもっとも過酷だった罰ゲーム。

「ドクターペッパーホット風味……縁様、姫さんどうする？」

カップに口を付けたまま楠木はリドナー達に聞こえないようにそっと囁くと、縁は懐から小さな巾着を取り出し中から飴玉を取り出し転がし始め、姫桜はにこりと微笑み楠木に自分のカップを差しだした。

「……リドナーさん。俺好みの味なんでポットに残っているお茶全部戴いてもかまいませんか」

友好の茶を拒否して敵対も馬鹿らしい。楠木は口元に引きつった笑みを浮かべながら覚悟を決めた。

「……いやはやそれにしても焦ったよ。召喚の相手国がニホン。しかも来るのが噂に名高いクキの姫君って聞いた時は。生きた心地がしないとはこのことだね』

先ほどまでの一見友好的な態度は形を潜め、近所の定食屋のおばちゃんといった愛想のよい雰囲気を出しながらリドナーが息を吐いた。

どうやらこちらが地のようで件の茶をすすりながらリラックスした表情を浮かべている。

「気持ちは分かります。しかも姫さんの場合は噂はまだ温い話ですからね。なんせ噂が立つって事は生き残ってる人がいるって事ですから」

リドナーに相づちを打ちながら楠木はちびちびとドクターペッ

パー茶を片付ける。
噂が立つくらいの生存者がいるならまだ良い方。姫桜の本領は噂すら残らないほどの徹底的な殲滅にある。
村、街、国、大陸、状況によっては世界丸々一つ。
姫桜がどれくらいのことをしてきたのか楠木も正確な数は知らないが、少なくとも楠木が知り合ってから姫桜によって壊滅した召喚主一味は両手両足の指を全て足しても足らない。
リドナーの立場からすれば姫桜の来訪は、大魔王降臨といった所だろうか。

「あら？　楠木様違いますよ。生き残ったのではなく無関係だったからです。いくら私とて無辜な方々まで手に掛けたりいたしません」

その大魔王といえば楠木の言葉に拗ねた顔を浮かべながらクスクス笑うという器用な真似をしていた。

『無関係ね。そうするとあんた達的にはあたしはどっちなんだろうね？』

リドナーが意味深な言葉を吐くと。楠木を試すかのようにその紅眼で見つめる。
どうやら本題に入ったようだと空気を察した楠木も微かに表情を改め、

「まぁ、こっちは素直に返してくれさえすれば、なるべく大事にし

ないってのが方針ですが……で、筑紫先生は返してもらえそうですか？」

一拍間をおいてからぐっと一気に踏み込む。
リドナーが筑紫亮介を召喚した人物を知っており接触しているという確信を持って。

『回りくどい腹の探り合いは嫌いじゃないが、そうも言ってられないしね。腹を割ろうか……どこまでこっちのメッセージを受け取ってもらえたのか教えてもらえるかい？』

踏み込んできた楠木の言葉は予想していたのかリドナーは焦る様子も見せず茶を飲みながら尋ね返す。

「そうですね。貴女方は召喚した犯人。聖人を知っている。その聖人に対して姫さんが暴挙に出る事を恐れている。貴女方自体には俺たちと敵対する気は無く、むしろ味方となり得る……って所までは。いろいろ訳ありのようですし。ちなみにこちらも現時点で貴女方と敵対する気はありません。協力できることがあれば協力します。その方が筑紫先生を早く返して頂けそうですので」

『そこまで信頼して頂けてるとはねぇ。恐悦至極』

楠木はにやっと人の悪い笑顔を浮かべて予測と希望を話してみせ

ると、リドナーも僅かに口元に笑みを浮かべ答える。
どちらも浮かべるのは善人とはとても言えない性格のひねくり曲がった、俗に言うイイ性格をしている人間が浮かべる笑みだ。

「この狸共め……もっともこちらの女狐に比べれば幾分かましか」

楠木とリドナーの笑いにどうやら根っこの部分が似ているらしい同種の性格を感じた縁は一つぼやいてから、忌々しそうに姫桜を見る。

「あら。そうでしたの。お恥ずかしながら私全く気づいておりませんでした……”後ろめたいこと”が本当にお有りだったのですね。そうと知っていれば”城塞事破壊”していたのですが」

縁に女狐と評された姫桜は、楠木達の会話に驚いた表情を浮かべ口元に手を当てていた。
白々しいにもほどがある下手くそなわざとらしい演技。
それを楽しそうにやっている姫桜に楠木も肩をすくめる。

（ほんと大物だよ。このお姫さんは……）

心の中で呆れ混じりの賞賛を贈っていた。

楠木がこの世界の異世界機関に敵対の意志はなく、むしろ消極的な協力者であるかもしれないと思いはじめたのは塔へと案内されている途中のことだ。
ファランは会話の中で、楠木達へと情報を与えようとしている節が所々にあった。
それ以外にも塔最上階からの眺めを説明するときにも、違和感は存在した。
綺麗に整えられた中庭がよく見える南側ではなく、遠くの平凡な山並みしか見えない北側のテラスへとファランはなぜか案内した……それは縁が、筑紫一家の『縁』と、大きな力を感じている方角であった。
そして極めつけは料理だろう。
豊富な種類と華やかな飾り付けと手の掛かったとおぼしき料理。
異世界人である楠木達に味は別としても、見た目だけでも楽しんでもらおう。
創意を凝らして歓迎しよう。心から歓待しようという意図が見受けられたのだ。
だが軟禁するという楠木達への対応はそれらの予測と相反する。
兵士の一団に囲まれて、そのまま歓待という名目で身柄を拘束された事。
わざと情報を与えてきた騎士。
玖木姫桜の悪評を知っているとみられる騎士達の反応。
まぎれもない歓待の意志……ご機嫌伺いの意図が籠められている料理。

以上の点を踏まえ状況を読みリドナー側からの『少し待って欲しい』という無言のメッセージと受け取った楠木は、『待つので状況を説明しろ』と言う返答を投げ返していた

それが姫桜との食事中の会話である。

あえて此方の知っている事、判っている事、予想できたことを姫桜と話す事で、盗聴しているであろうリドナーに、楠木達に協力するのなら強行的に進める意志はない事を伝えてみせていた。

もっとも楠木は差し障りの少ない話で適度に刺激しようとしたのだが姫桜は違った。

『後ろめたいところをすべて明かせ。さもないと城塞諸共破壊する』

言外に挑発して決断を促した姫桜の大胆不敵さには楠木は舌を巻いていた。

それに関してはリドナーも楠木と同様の感想を抱いていたようだ。

『さてお姫さんが怖いから単刀直入にいうよ……私達は違反者を確かに知っている。そして違法召喚に気づいてからは、召喚者をすぐに返還するようにと説得をし続けている。だが本人がうんと言わないのさ。そうこうしているうちに、あんたらが来ちまったんだよ。しかも殲滅のクキ……とりあえずしばらくはあんた達に逗留してもらって、その間に何とか説得して丸く収めようとしていたってわけさ』

サバサバとした調子でリドナーは話を始める。
その説明は楠木が予想していた状況とほぼ変わらない。

「なるほど……それで召喚主はどこのどなたさまですか？」

『ディアナ・クラントっていう私の馬鹿弟子。そしてもっとも新しい十二聖人の一人でもある娘さ……』

リドナーは深い溜息を吐きながら、召喚主の名前を口にし掻い摘んだ説明を始めた。

十二聖書に選ばれし十二聖人とは、この世の全てを現す聖書に新たなる記述を書き込む事が出来る者達の事をさす。
彼、もしくは彼女たちが新たな理。新たな概念。新たな生物、新たな技術を書き記していく事で、カルネイドにも新たな理が根付いていく。
彼等十二聖人は聖書に書き込むべき新たなる記載。
カルネイドをよりよき方向に導く理を求め異世界を旅し、深く学び、持ち帰る事が義務づけられている。
しかしディアナは聖人はその義務を嫌がり出奔、行方をくらましていたという。
それが三年前の事。
十二聖人の失踪など、この異世界の根源を揺るがす大事件を公表出来るはずもなく、表向きは知識をもとめ異世界に渡ったとし、裏

では必死の捜索を続けていたという

『ともかく能力だけは高い子でね、私らの探知にも引っかからないでずっと行方がつかめなかった。ところがだ。裏市場で発見されたみた事もない薬草と傷薬を調べていくうちに、ディアナが学び知った事しか書き込まれない十二聖書の一つ『二月の書』にそれらが新たに記載されてた事が判明したんだよ。どうやら異世界から、何かもしくは何者かを無断で召喚して知識を得たんだろうって考えるのは難しくなかったよ。私がこの世界の異界渡り全般を管理しているからね。そこで調査は表向きには一端中止。一応どこの世界と繋がっているかも問い合わせたんだけどまさかニホンとは思いもしなかったけどね。秘密裏に流通経路を辿りあの子の居場所を割り出したんで、私が直々にわがまま娘にきつい灸を据えてやろうとしたんだけど……」

一端言葉を句切ったリドナーが非常に不機嫌そうに顔を歪める。
どうやら余り思いだしたくないのか、声に苛立ちが混じる。

『ポータルポイントを自力で製作していたらしくて、そこから膨大な力を引き出していたディアナに返り討ちになっちまってね……あんの小娘め。力じゃ勝てないってのは判ったんで、今度は交渉で何とか馬鹿な事を止めさせようとしたんだけど、言う事を聞きもしない。その内ディアナのポータルポイントはより強大化。他のポイントにまで影響を与えて、そして今に至るってわけさ……腐っても愛弟子。クキの姫様に殺されるようなことだけは避けてやりたい。だ

からあんたらに少し待っていて欲しかったのさ。悪かったね。まわりくどい真似して』

説明を終えたリドナーは申し訳なさそうに頭を下げる。
この様子を見ていれば今の話が嘘が本当かを見分けるのはそうは難しくない。
楠木は真偽を確かめるでもないと判断し、気になったことを問う。

「そのお嬢さんが、何で聖人の義務を嫌がったのか教えてもらえますか？」

『まぁあれだね。要するに色恋沙汰さ。義務として異世界に渡っている間に、自分の男が違う女の所に行くんじゃないかとか、時間の流れが違う世界で過ごすことで年齢が離れるのを嫌がったりとかね……ちなみに相手の男ってのはディアナと一緒に行方をくらました私の馬鹿息子。だから公人としても、師匠としても、私人としても私が何とかしなくちゃいけないのさ』

「……そいつらの年は？」

『いなくなったのは両方とも１２才の時。駆け落ちするって書き置きを残してね。今は１５才になったのかね……あの色ガキ共。親にこんだけ心配掛けさせやがって。捕まえたら死ぬほど後悔さ』

説明しているうちにどんどん表情が険しくなったリドナーの額に青筋が浮いてくる。
どうやら相当腹に据えかねる物があるようだ。

『リドナー様。その辺は後で私が聞きますので』

話が脱線し掛かっているのを察したのか背後の騎士ファランがコホンと小さく咳をして話の腰を折る。

『あ……すまないねファラン』

溜息と共に表情を沈めて後ろの騎士に向かってリドナーが軽く手を挙げて礼を伝える。
やけに態度が気安い。
この中年騎士を腹心として扱っているのだろうか。それにしては少し距離感が近い気もする。

『逃げ込んだ先の山奥の村で世話になったらしくてね。今はそこに暮らす連中の為にってのも目的でいろいろ小細工しているみたいだね。それが薬草の育成や薬の製造とかのようだね。でも正直なところ私からすれば目先しかみない子供の浅知恵って奴だよ。狭い目線でしか物をみない。世界のことを考えてない。その果てに今度の大騒ぎを起こしちまったんだからね。どう言い繕っても師である私の責任だ……少し甘やかしすぎたかも知れないね』

自分を取り戻したリドナーは落ち着いた口調で話しを続けると、最後に僅かに後悔の残る表情を覗かせながら息を吐いた。
その顔は師というよりも心配を掛ける子供達を心配する母親の成分が幾分か強い。

「なるほどの。力だけはある童か。拙い技を補うために力任せに召喚しおったな。それで跡があれほど残っていたというわけか……どうする。此奴を信じて待つか？」

今回の召喚先が早く判った理由に合点がいったのか縁が小さく頷きながら、楠木へとこれからの方針を問う。
奪還者はあくまでも楠木であり、自らは力を貸し与える存在であるというスタンスを縁が貫いているからだ。
楠木は即答せずに口元に手を当ててしばし考える。
今の話を聞く限り相手側に強い悪意はないように思える。
召喚者が非道な目にあっている可能性は、今までの経験から極めて少ないと勘が訴えている。
しかしだからといって何もせずにいるわけにもいかない。
優菜、優陽には早く連れ戻すと約束した以上、手をこまねいているのは楠木の主義ではない。

「姫さんのことは？　『殲滅の九鬼』が来たって事を伝えれば少しは考えが変わるのでは？」

『言ってはみたさ。鬼が来たよって……まぁ、そうしたらさ。今か

ら言うのは本人の言葉だからね。私の言葉じゃないよ……誰それ？
鬼なんてつくぐらいだから不細工な術者でしょ。どこの誰だか知らないけど、あたしに勝てるわけ無いじゃん。師匠も耄碌したね……だと。怖い物知らずの天才だからね』

肩を竦めたリドナーは姫桜の気分を害さないように気をつけなるべく感情がこもらないようにしているのか淡々とディアナの言葉を伝えるが、鼻っ柱の強い小娘という雰囲気が言葉の端々からどうしても滲んでくる。

「あらあら。そうですか」

リドナーから伝えられた言葉に、姫桜は口元を隠してクスクスと笑い出す。
心の底から楽しそうである姫桜の忍び笑いに、楠木はげんなりとする。
姫桜という人間は、誰かに罵倒を浴びされても、侮辱されても怒ることはない。
なぜならそういった言葉を吐いた人間を、徹底的にいたぶるのが心底楽しいという性癖の持ち主であるからだ。
侮辱されれば侮辱されるほど、後の楽しみが増す。
それに怒る理由はないというわけだ。

「あー姫さん。背筋が寒くなってくるんで、そろそろ止めといてくれ。つってもあれか要はガキの我が儘としょあーない。リドナーさん。ここからは俺の本音っていうか提案だ。俺達に任せてくれねぇ

か？　奪還ついでにそのお嬢ちゃんにちゃんと反省させてやる。二度と無断召喚なんてしないようにな……だから協力してくれ」

楠木としては一刻も早く奪還してあの姉妹の元に父親を帰したい。リドナーとしても、問題をなるべく早く出来れば穏便に解決したい。

両者の望みを叶えるためには力尽くで行ってみるのが一番早道だろうと楠木はにやりと笑う。

『ん？　聞こうじゃないか』

「調子くれてるガキに大人の怖さを教えるって事で、ここは玖木の怖さを骨の髄まで知ってもらうってのはどうだい？　……死ぬほど怖い思いをしてもらうのさ」

『なるほどね。あんまり遅くなると他の十二聖人も痺れをきらしちまうから、早めに片を付けるに越したことはないさね……でも強いよ。あの娘は。クキを恐れないって言うのも信じちまいそうになるくらいに。勝てるのかい？』

楠木の言葉に同意の意思を覗かせながらもリドナーは僅かに顔を曇らせる。

それだけディアナという少女が強いのだろう。

だが楠木は心配などしていない。

姫桜は確かに絶対的な強さもあるが、それ以上に得意なことがあ

る。

「なに大丈夫さ。相手がどれだけ強かろうと関係ないさ。姫さんほど人に”恐怖”を与えるのに長けた人物はいないって俺は信頼しているからな。姫さん。そのガキに自分がしでかした事で、優菜と優陽が負った”失う恐怖”ってのを１０倍返しで教えてやれ……もちろんいけるよな？」

「心得ました。楠木様の頼みとあらばこの玖木姫桜。鬼でも蛇にでもなってみせます」

人の悪い笑みを浮かべる楠木に対して、姫桜がにこりと微笑み返す。

楠木の企みを詳しく聞かなくとも、だいたい判っていると姫桜の笑顔は物語っている。

召喚者奪還の為ならば手段を選ばない楠木と、違法召喚主を罰する為ならば何でもしでかす姫桜。

「その娘に同情しとうなってきた。妾が知る限り此奴らほど悪辣な者達は無量大数の世界においてもそうはおらんからの……」

そんな楠木と姫桜のやり口を一番間近でみてきた縁は、死ぬほど後悔させられる少女を思い哀れんでいた。

奪還篇　山奥の名医？

「結局救えたのはその子一人かい？」

「……すまん」

口数少なく答えるファランの胸では赤茶色の髪の幼児がぐっすりと眠り込んでいた。

まだ幼いあどけない寝顔を見つめるリドナーの胸をどうにもやるせない気持ちが占める。

今年二歳になる息子ミオレイドと同じくらいの年だろうか。

数ヶ月前にカルネイドを揺るがした大量召喚事件。そのたった一人の生き残りがこの小さな女の子だ。

異界へと攫われたのは山間の小さい村一つ分の住民１４２人。

だが……たった一人の幼子しか救えなかったと嘆くべきではない。

今回の召喚事件が起きたのはカルネイドだけではない。

数多の世界から人々を攫い、滅びゆく世界で”最後の一人”となるための生け贄とした前例のない大規模な違法召喚事件だった。

攫われた世界の強者達が集まり連合軍を結成し召喚主世界へと攻め入ったが、被害者達で最終的に助かった者は百人足らずだという。

ファランが提出した報告書に目を通しながら、あまりの広範囲世界に渡る被害の甚大さに、剛胆なリドナーもしばし言葉を失う。

犠牲者は未だ正確な数は出ていないが数百万単位になるのは確実。

一人だけでも救えた。

誰一人も救えなかった世界の者達からすれば、それがどれほど羨ましい事だろう。

「派遣した魔導騎士の連中に犠牲者は無し……往生際の悪い糞共に止めを刺したのはニホンのクキか。噂だけは聞いたことあるけど実際どうだった？」

「俺は最終決戦時は後方にいたから直接には見ていないが、前線にいた部下の証言では化け物共だそうだ。特に一族の姫は別格……犠牲者の怨念や怒り、恐怖を全て取り込んで、微笑みながら首謀者一族を次々に叩き潰していったらしい。前線にいた連中はしばらく使い物にならんぞ。鬼気に飲まれてしまった」

異界に渡れるほどに心身ともに鍛え上げている精鋭魔導騎士達がしばらく使い物にならないとは。

騎士達に犠牲が出なかったことに胸をなで下ろしながらも、計算外の要素に小さく舌を打ったリドナーはそこでふと気づく。

数多くの犠牲者が生まれた中で数少ない生存者の幼児。ただ運が良かっただけでは片付けられない要素がある。

「噂通りね。お近づきになりたいタイプじゃなさそうだ。その娘が助かった理由は？」

「助かった者達は例外なく自己世界における高位能力者、もしくはその要素をもっていたそうだ……この娘はおそらくお前と同等の素質を持っているのだろう」

ファランの言葉の意味に気づいたリドナーは皮肉気な笑みを浮かべる。

「聖人になるかもしれないか。なるほどね……運が良いって言うべきかね。その子の身元は分かってるのかい？　名前だけでもいいんだけど」

「ディアナ・クラント……着ていた服に名前が縫い付けてあった」

近い将来に聖人となるかもしれない子供。
これも何かの縁だと思い幼女をリドナーが引き取るのを決めたのは、そのすぐ後であった。

「リドナーさま。みてみて。とべた～」

書類仕事をしていたリドナーは、急に聞こえてきたディアナの声で仕事の手を止める。
声の聞こえて来たのは中庭の方だ。
窓の方へと目をむけたリドナーは目を丸くする。リドナーが普段の執務に使っている部屋で中庭に面した三階の部屋になる
その三階の窓の外に自分の背丈の半分ほどもある大きな聖書写本を抱えながらぷかぷかと宙に浮かび笑うディアナがいた。
どうやらディアナは写本から力を引き出して浮遊の術を使っているようだ。

「ディアナ……あぶないよぉ。それにかあさまにみつかっちゃたら怒られるって言ったのに」

窓の下の方から今にも泣きそうな情けない声をあげる息子の声も聞こえてくる。
五才になったばかりだというのに才能を発揮しはじめたディアナを褒めるべきか、男の子なら情けない声をあげるなと息子ミオを叱咤すべきか。
まだ早いかと思っていたが、ディアナにはそろそろ本格的な教育をする必要があるかもしれないと考えながらリドナーは窓を開け外の二人に声を掛ける。

「二人とも尻百叩き。五分以内に部屋に来るように。一分遅れる事に１０増やす」

まずは写本の持つ危険性を何も判っていない悪ガキ共をたっぷり

と叱ってからだ。

「師匠。おじさんどう？　かっこいいでしょ」

真新しい白い服を身につけくるりと一回転して見せたディアナは誇らしげな顔を見せる。

「あぁよく似合ってるよ」

ファランの短い褒め言葉にディアナは嬉しそうな顔を浮かべる。
ディアナが身につけているのは聖人候補者へと贈られる儀式用の聖衣。
僅か八才で聖人候補者へと選抜された天才児として名前が響きはじめた愛弟子ディアナは、リドナーにとって自慢である。
だが同時に悩みの種でもあった。

秘めたる才能は高いが、精神的にはまだまだ子供。力を持つ者として身につけるべき心構えの一つも判っていない。
八才の子供に自重を覚えさせるのは無理があるかも知れないが、ディアナは既に中級クラスの写本からも力を行使出来るようになっている。何かが起きてからでは遅い。

「はいはい似合ってるよ。それよりディアナ。いいかい。これからはあんたの言動が厳しい目で見られるんだよ。今までみたいに……」

これからは余り甘やかしてはやれないと苦言を呈そうとしたリドナーだったが、

「判ってるってば。ミオ君にも見せてくるからお説教はまた後で」

しかしディアナはリドナーの話半分も聞かず、、止める間もなく笑顔で部屋を飛び出ていってしまった。
届いたばかりの服を中庭で鍛錬をしているミオにも自慢したくてしょうがないのだろう。

「まったくあの娘は。どこが判ってるんだい」

息子ミオレイドとの仲は未だ良好。
四六時中一緒にいるので兄妹として育つかと思ったが、どうやら違う方面にいきそうである。

積極的なディアナに、消極的なミオが引き摺られている感も強いが……それにそうなったとして心配事が一つ。
おそらくこのまま成長を続ければ、ディアナは十年もしないうちに聖人となるだろう。
聖人となれば義務として異界に渡り知識を身につけなければならない。異界へと渡る聖人には護衛として魔導騎士一小隊がつけられる。
これは異界においても力を発揮する為の結界を常時展開できるほどの写本は魔導騎士達が使う最上位の写本しかない為である。
逆にいえば最上位の写本を操ることの出来る魔導騎士以外は異界へとついていくことが出来ないという事でもある。
これがリドナーの不安事だった。

「ファラン……ミオの奴は魔導騎士になれると思うかい？」

「不断の努力を続けていればいつかは辿り着く。私がそうであったようにな」

リドナーの問いかけにファランが短く答える。
だがそれはリドナーが望む物ではなかった。
『いつか』……それは十年先かもしれない。二十年先かもしれない。
リドナーの見る所、息子には文の才能はあるかもしれないが武には乏しい。
父親に似たのだろう。
幼なじみでもあるファランの顔を、リドナーは見つめる。
皺が増え過ぎ去った年月が強く出始めた顔。

髪にもちらほらと白い物が混じってきている。
聖人となったリドナーが異界へ旅立つ時までにファランは間に合わなかった。
それでもリドナーは二年を異世界で耐えた。
ファランはカルネイドで己を鍛えながら二十年も待っていてくれた。
肉体年齢も精神年齢共に十八才も離れてしまったが、こうやって一緒になれたのは強い絆があった事と、一時的に別れた時に二人がそれなりに大人であったからだろうとリドナーは思っている。
ディアナとミオレイドの姿は昔の自分達に被り、そして僅かに違う。
同じような絆はある。だが未だに二人とも子供だということだ。
別れに耐え長い年月を待つ覚悟を決めるには、しばらくの年月が必要だろう。

「ディアナの奴が、せめてもう少し成長が遅ければねぇ……」

息子と娘に残された時間は少ないだろうとリドナーは予想していた。

リドナーの不安はすぐに形となって現れる。
前聖者の死亡と共に年嵩の候補者達を飛び越え弱冠十二才のディアナが十二聖書が一つ『二月の書』によって選ばれたのは四年後のことであった。

「だから行きたくないの！」

「同じ話を何回もさせるんじゃないよ。あんたは行かなきゃならない。それが聖人の義務であり勤めなんだ。小さい頃からそう教えてきただろ」

リドナーとディアナは執務室で対峙する。
絶対に異界へいかないと言い張る聞き分けのない愛弟子相手に、リドナーはただ辛抱強く言い聞かせる。
異界へと赴き知恵を得て新たなる理をこの世界へともたらす。
聖人にとって最も重要な役割を、幼なじみと離れたくないという個人の我が儘で拒否できるはずもない。

「じゃあ聖人なんて辞める。ミオ君と一緒の方が良いもん」

「あんたって子は……我が儘もいい加減にしな！」

リドナーの怒声にディアナは一瞬首を竦めるが、すぐに不満げな顔を浮かべふて腐れる。

「あんたが向かうべき世界と得るべき知識は私を含めた他の十二聖人が決める。私情を挟むのは好ましくないけど、なるべく時間の流れが同一に近い世界になるように工作してあげる。あんたの才能なら三年で帰ってこれるはずだ。だからがまんおし」

懐柔案を口にしたリドナーだが、ディアナはまだ頬を膨らませたままだ。

「嫌……もし行けっていうならミオ君も一緒。ミオ君が一緒なら行く」

「だからそれは無理。ミオはまだ見習い騎士にもなってないんだよ」

まだ見習い騎士にもなっていないミオレイドが聖人の旅に同行できるはずもない。

そんな事はディアナもよく判っているはずだが、意固地になっているようだ。

昔から我は強かったが最近はどうにも小生意気になったディアナは、リドナーの言う事をなかなか聞かなくなっていた。

どう説得したかと思いリドナーは頭を抱え込み、横に立つファランに目をやるが首を小さく横に振るだけだ。

ファランも言うべき言葉を思いつかないのだろう。

「あたしがミオ君の分まで結界を張る……それならいいでしょ」

「ディアナ。異界を舐めるんじゃないよ。結界が途中で切れたらミオは消えちまうかも知れない。それにいくらあんただって結界を二人分も張ってたらすぐにへばっちまう……無茶言ってるのは自分でも判ってるだろ」

「うーーーーーーー……じゃああたしが行くんじゃなくて向こうから来てもらえばいいでしょ！　召喚で誰か頭いい人にきてもらえばいいでしょ！　師匠ならできるでしょ！」

不満そうに唸ったディアナはとんでもないことを言い出す。
リドナーは眉間にわき出る皺を指で無理矢理押さえる。

「知恵を授かる側が、お教えくださる方々を自分達の世界に呼びつけるなんて非礼が許されるわけないだろ……それに異界で過ごす事でカルネイドに足りない物、いらない物を見極めるのも、聖人としてのお役目の一つ。第一そんな特例をあたしを含め他の十二聖人が許可すると思うのかい。ポータルポイント管理者としてもそんな身勝手な召喚はしないよ」

カルネイドのポータルポイントは全てリドナーの管理下にある。
ディアナを強く睨みつけたリドナーが冷たい口調で告げると、ディアナは癇癪を起こした。

「師匠の分からず屋！　師匠達は知識さえ手に入ればいいじゃん！　師匠は教えてくれなかったけど召喚術くらいあたし一人でできるもん！　勝手に喚ぶ！　来た人だって、天才のあたしに教えるんだから喜ん……」

確かにディアナは天才である。
教えられた事を次々に吸収していき、教える側も喜びを覚えるほどの成長を見せる。
しかしそのあまりにも傲慢な物言いはリドナーの怒りに火をつけるには充分すぎるほどであった。

「ディアナッ！」

ディアナの言葉を遮るように鋭い叱責の声をあげながらリドナーは右手を振りかぶる。

「あっ！」

だがリドナーの手が振り下ろされる前に、ディアナは大きな手に頬を張られ床に張り倒されていた。

「……ぇっ？」

床に倒れ込んだディアナは信じられないと言った表情で呆然としてから、小さな疑問の声をあげて自分を叩いた人物を見上げる。
リドナーよりも先に動いた人物。それは普段は寡黙でリドナーの一方後ろで控えているファランであった。
自分勝手な我が儘をいったり、ミオと遊びに行くからと講義をさぼったりして、師であるリドナーから叱られ鞭をもらうことは度々あったディアナだったが、ファランに手をあげられたのはこれが初めてであった。
ディアナにとってファランはとても優しい父親。
自分が叩かれるなど思ってもいなかったのだろう。
今起きたことが現実だとすぐに思えないのか呆然としていたディアナだったが、徐々に腫れはじめる頬の痛みでこれが現実だと思い知らされたのが、ディアナの『赤岩』の目に大粒の涙がうかばせ酷く傷ついた顔になった。

「うぅっ！！！！！」

ばっと立ち上がったディアナは泣き顔のまま何も言わずに部屋を飛び出してしまった
リドナーもファランも、ディアナの余りに悲しそうな顔をみてしまったためか、引き留めることも、後を追うことはできなかった。

「……すまん。つい手が出た」

ディアナを叩いてしまった手を見つめながらファランがこぼす声は沈んでいる。自然と身体が動いてしまったのだろう。

「あんたが叩いてなかったらあたしが叩いてたさ……もう少し大きくなってからと思ったけど、異界渡りの前にあの子にも事件のことちゃんと話してやるべきなのかね」

ファランの肩を軽く叩き慰めながらリドナーは重い吐息を一つこぼす。

まさか違法召喚に手を出すとまでディアナが言い出すとは思わず、リドナーも少なからずショックを受けていた。

規模と召喚主の目的故に影響が大きすぎると多世界召喚事件の詳細は一般には隠し通している。

カルネイド唯一の生き残りであるディアナにすらもリドナーは本当のことを打ち明けておらず、山津波で壊滅した村の遠縁の娘を引き取ったと話していた。

異界より帰還し聖人として強い心を持ちカルネイドを正しく発展させていく事ができるようになったら真実を伝えるつもりであったが、その前に話すべきなのか。

今から再度話に行っても互いに感情的になるだけ。

明日もう一度話し合おう。

自分らしくない先送りをしてしまったことをリドナーはすぐに悔やむことになる。

『聖人なんてやらない。ミオ君と駆け落ちする』

短い手紙だけを残してディアナとミオレイドの二人がリドナー達の元から姿を消したのは、この夜のことであった。

「ディアナ様おはよぉ」

立ちこめる朝霧の中、村の外を流れる小川に沿って造られた細道を獣除けの鈴をつけて走っていたディアナ・クラントは、のんびりとした朝の挨拶をされて立ち止まる。

周囲を見渡し声の主を捜したディアナは、霧の向こうに微かな人影を発見する。

「おはよリーナ婆ちゃん」

そちらに近付いてみると朝取りした野菜を川で洗う村の老婆だった。

便利で裕福な麓の街へと若い者が全員出て行ってしまった、老人ばかりの山奥の村では朝から走り回るほど元気なのは今はディアナ位だ。

鈴の音で気づいたのだろうと思いながら、ディアナは笑顔で挨拶を返す。

「こんなぁ朝も早よから急いでどうなさったんよぉ」

「うん。昨日ねチクシ先生から新しい薬草の事を教わったんだよ。今度の薬草は打ち身とか関節の痛みを和らげるお薬になるんだって。聖書にはもう書き込んで理に組み込んだから、これから山に幾つか作ってみるの。上手く自生したらまた栽培するからね」

「ほーそうかいそうかい。わてぇもぉええ年じゃからね。最近はほんに身体の痛いんでしかたなかったんよぉ。でもディアナ様と若先生。それに大先生のおかげで随分楽になったんよぉ。村ぁなぁみんなぁも年寄りしかおらんでぇ感謝しとるんよぉ。ほんにすまんねぇ」

「もう気にしないでいいっていつも言ってるってしょ。お世話になってるお礼。村のみんなが助けてくれなかったら、行くところ無くてミオ君と二人で路頭に迷ってたんだから」

老婆がうんうんと嬉しそうな柔らかい笑顔を浮かべて頷き何度も頭を下げてくるのを見て、ディアナは照れて真っ赤になった顔で慌てて答える。

カルネイドにおいて薬とは稀少な鉱物、植物を聖書の写本によって変性させた物を示し、効能は極めて高いが非常に高価になる。

過去の聖人が持ち帰った薬草の理もあるが、記されたその数は極めて少数でこれまた貴重。

自給自足で現金収入の少ない老人達には、両者ともとても手が出せる物ではなかった。

だが異世界の医師チクシリョウスケがもたらした知識をディアナが理とし組み込み薬草を生成し、ミオレイドがチクシに指示され見習い薬師として薬を作るようになって少しずつではあるが良い方へと変化してきていた。

「あ。そだ。リーナ婆ちゃん。お昼ご飯の準備までには戻ってくるからさ、また良いお野菜あったらお裾分けしてね」

「はいよぉ。じゃかし気ぃつけてなぁ。ディアナ様に何かあったら若先生も坊もかなしぃけんのお」

老婆は心配顔を浮かべる。今の時期はこの地方は霧が濃く視界が悪くなる。

それに最近は山奥にいる獣が餌がないのか人里近くまで降りてきており、村の老猟師達によって何度も追い払われていた。

だが老女の心配にディアナは笑って答える。

「大丈夫。大丈夫。紛いなりにも聖人だから。ほらこの間だって意地悪師匠を追い返してみせたっていったでしょ」

あのリドナーにすら勝てるのだ。今更獣の一匹や二匹出てきた所で恐れる事など無い。

しかしディアナの言葉に老婆はより心配げな顔を浮かべる。

「わてらぁん為にいろいろしちょくれるのありがたいども、お師様は大層お怒りなんでしょぉ？　いいんかい？」

「いいの。あたし達のためだし、みんなのためだもん。鬼ってのも来てるみたいだけど、どうとでもなるって。それにもうじき勉強も終わるし、その頃には先生を帰してあげる事も出来るようになるんだよ。それまでおとなしく待ってろっての……んじゃあ行ってくるね」

だが老婆の心配を大丈夫だよとディアナは笑顔で返すと手を振って立ち去ろうとする。

事情があってより強い力を取り込むためにポータルポイントを作ったのだが、ディアナの計算以上に流入してくる改変力は強かったのは嬉しい誤算だった。

今や完全に支配下に置き、さらに余剰分の力で村の周囲に探知と侵入妨害の結界も張っている。

誰かが近付いてくればすぐに気づくし、今の自分なら戦闘になっても誰にも負けない。

ディアナには絶対的な自信があった。

『くすくす。おはようございます。申し訳ございません。待ちきれませんでした』

涼やかな忍び笑いと共に悪意の籠もった声が背後から聞こえてくるまでは。

「へっ？……っ！」

聞き覚えのない声に間の抜けた声をあげてディアナは背後を振り返り絶句する。

先ほどまで老婆がいた川縁にはいつの間にやら、動きにくそうなデザインの白い服を身につけた若い女が立っていた。

女性の目の前には赤黒い物と白い物がぐちゃぐちゃに混ざった物体が無残に横たわっていた。

その姿に落石で潰された動物の死骸をディアナは思い出す。

老婆はどこに行った？

無意識に物体が何かを考えるのを止めたディアナへと、女性がにこりと微笑んだ。

可憐で涼やかな笑顔。

だがその下に禍々しい邪気が含まれていた。

『まずはお一人と。次は村にでも行ってみましょうか。ではごきげんよう……こ～こはどこの細道じゃ♪』

軽やかに一礼した女性は童女のような笑顔を浮かべると、一節の詩を弾むような声で謳うと女性の姿は霞のように薄れ一瞬で消え失せてしまった。
後に一人残された呆然としながらしばらく立ちすくんでいたディアナは鼻につく悪臭で我を取り戻すと、女が立っていた場所へと慌てて駆け寄る。

「っ！！！！！？」

ボロ布にくるまる血と肉そして内蔵を練り合わせた物体。
布は血にどす黒く染まっているが、先ほどまで老婆が着ていた服のなれの果てだ。
一瞬の間にスリ潰された老婆の死体からは悪臭と湯気が立ち上る。
つい先ほどまで会話をしていた優しい老婆の顔が浮かび上がりディアナの目には自然と涙が浮かび上がる。

「っ！　なに！？　なんなの！？

のんびりとした平和な朝の会話。
いつだってそこにある当たり前の日常。
ついほんの一瞬前まであったはずの幸せ。
でもそれは永遠に奪われてしまった。
訳も分からない圧倒的な力を持った何かによって。
結界への侵入に気づくことも無く、声を掛けられるまでそこにい

たことすら判らなかった謎の女。

「……っ！？　村ってまさか！？」

一体何が起きたのかまるで判らず狂乱しそうになったディアナは、禍々しい女が最後に残した台詞を思いだし意味に気づき青ざめる。

この辺りに村といえばディアナが今暮らしている村しかない。

「『二月の書』写本生成！　？技戦之章全項目転載！！！」

右手をさっと一振りしたディアナは涙混じりの声で、遠く離れた地に存在する十二聖書『二月の書』へと呼びかける。

金属を打ち合わせたような高い高音が霧の森の中に響くとディアナの周囲の木や大地。何もないはずの空中からさえも無数の文字が溢れ出てきた。

カルネイドに存在する物とは、人も動物も植物も大気すらも須く聖書の管理下にある。

ディアナは周囲の物体を原書の状態へと解除し文字へと変化させていた。

右手に集まった文字を凝縮。分類。再構成。

瞬く間にディアナの右手には白い装丁に赤い飾りが施された一抱えもある本が出現した。

十二聖書が一つ『二月の書』から写された純度の高い写本。

それも高位の戦闘能力の理を記載した戦闘用の写本だ。

ばっと頁を捲ったディアナは高速飛翔の理を顕現させる。

ディアナの身体へと風が集い渦を巻く。

（ごめん。リーナ婆ちゃん。後で来るから）

物言わぬ肉片と化してしまった老婆に心のなかで謝りながら、ディアナは村の方角にきっと目を向ける。
老婆を殺したことに快楽を感じていた邪悪な雰囲気を纏う女。

「許さないんだから！」

悔し涙を堪えながらディアナは術を解放する。
高位の飛翔術は文字通りディアナを疾風へと変化させる。
森の中の狭い道だろうと関係ない！
木々を避ける為に森の上空へと出る時間すらも惜しい！
木を軽やかに避け、藪を突き抜け突き進む！
ただ、ただ一直線に村へと向かいディアナは飛ぶ。
　心を表すかのような轟々と唸る風を纏いながら、村までの5分ほどの距離をディアナは文字通り疾風となり駆け抜けた。
瞬く間に森を抜け出たディアナは山間の僅かな平地に作られた村を視界へと捉える。
元々は山越えの街道沿いに作られた宿場町で昔はそれなりに発展していたそうだが、新しく楽な道が出来た今では、高齢となった村人達が一人また一人と減る事に滅びへと向かっていく小さな小さな村。
だがこの村はディアナと大切なミオレイドにとって第二の故郷。
そしてもう一人。とても大切な存在には本当の故郷。
絶対に壊させるもんかとディアナは涙をこぼしながら、村の門へと向かって一気に突っ込んだ。

「おぉ！？……ディアナ様かい！？　どうなさったあわてて。忘れもんかい？」

血相を変えて門から飛びこんできたディアナの姿に、門番を引き受けている皺だらけの老人が青石の目を見開き驚きの声をあげる。
のんびりとタバコを吹かしていたのか、その手には薄く煙をたゆらせるキセルが握られていた。
いつも通りののんびりとした雰囲気。どうやらあの女はまだここには来ていないようだ。
だが悠長な事はしていられない。
相手はディアナの結界をくぐり抜け、接近すら気づかせなかった存在。村を囲っている獣除けの低い柵などあの女には意味を成さない。
村の中央にみんなを集めて一番強固な結界を張って安全を確保しその間に炙り出す。

「ゼン爺。みんな集めて。なんかやばい……」

『黒山羊さんたら丸呑みし～た♪』

一瞬で方針を決定したディアナは老人へと頼もうとするが、その脳裏に楽しげな声が突如響いた。
ディアナが何かをする間もなく、門番の老人の足下に炎のようにゆらゆらと揺らめく黒い影が広がり、一瞬で老人の身体が影の中に

吸い込まれた。

「ゼン爺っ！？」

「ぎ！　がぁつ！　がぁぁぁぁっぁ！！！」

バキバキと何かをかみ砕きゴリゴリと何かを磨り潰す音と共に老人の悲鳴が影の中から響く。
喉が張り裂けるような悲鳴は激痛に苛まれている老人があげる救いを求める声。

「光よ！　邪なる影を消し去れ！」

右手の写本の頁を捲りディアナは解除の術を読み上げる。
写本から光輝く文字が飛び出し老人が飲み込まれた影へと飛び込んでいく。
ディアナの知る最高位の破邪の文字。
文字が強い意味を持つカルネイドならばいかなる世界の呪法であろうとも消し去る……はずだった。
老人を飲み込んだ影はディアナの打ち込んだ光の文字を受けても何の変化もみせない。
ゆらゆらと揺らめきながら老人の悲鳴と破砕音を響かせていた。

「なんで！？　光よ！　光よ！？」

ディアナの悲鳴混じりに何度も同じ破邪術を呼び出すが結果は変わらない。
やがて老人の声は力を無くし小さく消えていき破砕音も静まると、影の中ら老人の身体が浮かんできた。
その姿は異形だ。
力なく横たわる血まみれの老人の頭は空気が抜けた風船のように萎み身体とは真逆を向いており、四肢はねじくれ絡まり合っている。
身体中から骨が抜け肉と皮だけになった老人の苦痛に歪んだ顔では血まみれの青石のような目玉が飛び出していた。

「あぁっ……あぁぁ……」

だがそんな状態でも老人は生きていた。意味を成さない呻き声が老人の喉から響く。

「ひっ！」

老人の瞳と目があったディアナは思わず悲鳴をあげ腰を抜かす。
血にまみれたその目は助けられなかったディアナを強く恨んでいるようだ。
しかしその青石の瞳からもすぐに光が消え失せ老人は事切れた。

『あらあらお行儀悪くて失礼いたしました。この子は骨が大好物な

んですよ。だからお肉とか皮の柔らかい部分は嫌いですので生き残ってしまったみたいですね。あぁ、それとこの世界では石のような目は重要なようでしたから残させました。貴女にお返しいたしますね……もっと綺麗な物を戴いておりますし。これでお二人目と』

クスクスと笑う悪意の混じった声が腰を抜かした地べたへと座り込んだディアの脳裏にまたも響く。

女の姿は見えない。声の感じから近くにいるような気もするが姿も気配も感じない。

どこから声をかけているのか、どこから見ているのか。

「風！　大地！　うぅぅ！！！！！どこよ！？　なんで！？」

泣き声で動揺したままのディアナが頁を捲り探知術を放つと、風が吹き、大地が微かに揺れる。

しかしそれだけだ。

探知術は近くにいるはずの女を見つけることができない。

「っ！　何者よ！　出てきなさい！　卑怯よ！」

ディアナは涙混じりに怒鳴り声をあげる。

訳の分からない化け物に対する恐怖を目の前で親しい老人達を殺された怒りで誤魔化しながら。

『あらあらそうですか？　異界の人攫いの貴女に言われたくはありませんね』

「い、異界の人攫い……」

女の言葉にディアナは何者なのかにようやく気づく。
禍々しく異なる気配を醸し出す女……異界人。

『それに私の専売は外道で、卑怯は我が主の代名詞ですので……ですが姿をお見せしないのは不作法ですね。申し訳ありません』

何が楽しいのかクスクスと邪悪な笑い声が響きディアナのすぐ目の前に影が集まり、その中から先ほどの女が浮かび上がってきた。
白い服と小柄な身体。
姿形はディアナ達とはあまり変わらず、ディアナから見ても美人だと思う整った容姿。
しかしその目が違う。
ディアナ達とは異なる柔らかそうな物体で出来ており、何よりも目の奥が邪悪な漆黒で染まっていた。

『申し遅れました私は玖木姫桜。『殲滅の九鬼』と……あぁそうでした。私を知らなかったのですね。失礼いたしました。違法召喚者の方が私共を知らないというのは非常に珍しい事でしたので。私も

まだまだですね、もう少し精進しなくては』

涼やかな微笑みでちょこんと一礼した姫桜だったが、すぐに眉を微かに顰め頬に手を当て自らの未熟を恥じるような声をあげていた。

「クキ……師匠の言ってた」

ディアナは呆然と呟く。

目の前に立つ存在が師であるリドナーが言っていた『鬼』

『はい。リドナー様……でしたかしら？　おきれいな目をしていらっしゃいましたね。綺麗な真紅の色。綺麗でしたので戴きました。大切にいたしますね』

クスクスと笑いながら姫桜が腰に下げていた袋の中から燃えさかるような真紅の石を二つ取りだし見つめたかと思うと、薄桜色の唇から微かに舌を出し味を確かめるかのようにぺろりとなめあげた。

欲情に潤んだ瞳と妖絶な色気がより姫桜の怪しげで恐ろしい気配を高める。

「その色っ！？　まさか！？」

姫桜が愛おしそうに舐めあげた石の色。それはディアナのよく知

る真紅。
師であるディアナの代名詞でもある真紅石眼。
まさか師もこの鬼に！？
ディアナの全身を寒気が走り心臓を締め付けられるような恐怖を感じる。

『貴女の関係者。それもお師様だとか。私共の対象としては充分でございました。あぁ、ご心配なくあの方のみでなく、あの城塞にいた者、隣接の街の住人も全て『殲滅』の対象とさせて頂きましたので』

脳裏に響く愉しげな声で姫桜が、ディアナの想像を緩やかに肯定した。
冷たさが全くないが悪意に満ちた声で吐いたのはディアナにとって悪夢のような話。

「な、なんで……師匠を？」

確かに自分がチクシリョウスケを召喚した。
だが師であるリドナーは関係ないはずだ。
何でリドナーが殺されなければならない？
ディアナが呆然としていると姫桜はまたクスクスと笑い出す。
何で判らないのだろうとその笑い声は問いかけているようだ。

『ディアナさん。私共は別名『戒めの玖木』と申します。私共の世

界から大切な者を攫った無法な召喚主に下す鉄槌が我らの定め。召喚主の生い立ちに関わった者達。関わっているとおぼしき者達……そして召喚によって恩恵を受けた者達。その全てが殲滅の対象となります。そうすることで他の世界にも広く知らしめる『戒め』とします。『戒めの玖木』その由来です』

「戒め……恩恵を受けた者達……そ、それってまさか！？」

『はい。この村の方々全てですね。後何人いらっしゃるか判りませんが、私も忙しいので一両日中には終わらせたいですね』

ディアナの脳裏をよぎった悪夢をクキはあっさり肯定し、村人を全て殺すなど意図も容易いことだと笑う。

「ふざけないで！　なんで！？　お爺ちゃんもお祖母ちゃんもなんにもしてないのに！　いい人達なのに！　それに師匠まで！　何で師匠！？　師匠はあたしに先生を返せって怒ってたんだよ！？　あんたの側じゃないの！？　城のみんなもっておじさんも！？　おじさん。凄く強いもん！　あんたなんかに負けるわけない！」

『おじさん？　……あぁファランさんですか。はいあの方はリドナー様より幾分か上でしたね。久しぶりに歯ごたえのある方で楽しめました。』

「っあああああああああっ！！！！！！」

伝わってくる姫桜の言葉に嘘はないと心が訴える。
本気でこの村の全てを殲滅するつもりだ。
そしてそれは師であるリドナーと優しい騎士ファランが既に姫桜によって殺されたということでもある。
口うるさく厳しくはあったが、ディアナにとってはリドナーは大切な師であった。
そのリドナーの夫である中年の騎士は余り目立つような人では無かったが、とても優しく強かった。
幼い時に両親を亡くしていたディアナにとっては実の親ともいえる人達。
目の前で起きた親しい隣人達の相次ぐ死と家族の死を知って、混乱したディアナは大声で泣き叫ぶ。

「ディアナ様！？　どたっだぁ！？　そんなぁ大声出して！？」

突然響いたディアナが泣き叫ぶ声に驚いたのか、近くの家からやせた老婆が飛び出してきた。
姫桜が優しげな目で老婆を見つめ、

『シャボン玉飛んだ。屋根まで飛んだ♪』

愉しげな声を響かせながら歌を歌う。
姫桜の詩声に合わせ地面からわき上がった黒い泡が老婆の身体を

包み込んだかと思うと、そのまま宙に浮かんでいった。

『屋根まで飛んで弾けて消えた♪』

姫桜が歌を締めくくると共にその詩通りに屋根を越えた所で、黒い泡が軽い破裂音を伴いながら弾け飛んだ。

びちゃびちゃと音を立てて、血と臓物、肉片の入り交じった骨が周囲に降り注ぎ、皺だらけの腕がゴトンと音を立ててディアナの目の前に落ちた。

その腕には死んだ旦那の形見だと老婆が言っていたディアナも見覚えのある飾り気の少ない腕輪が嵌っていた。

空中へと浮かび上がった老婆は黒いシャボン玉と一緒に弾け飛んでいたとディアナに嫌でも悟らせる。

『あら結構残りましたね……たまや～♪』

玖木の謎の呪文と共に老婆の腕がディアナの目の前で再度弾け飛んだ。

「ひっ！」

腕から弾けた血と肉片が口の中に入りこみディアナは引きつった悲鳴をあげる。

それが親しい老婆だと判っていても血生臭く気持ちの悪い感触に

ディアナは吐き気を覚えるしかない。

『続いてかぎや～♪』

老婆だった物が姫桜の術に合わせて次々に破裂しはじめた。
血風が周囲に漂い、肉と骨の破片が塵となりディアナの身体へと積もっていく。

「いやっ！　いやっ！　なに！？　なんで！？　どうやってんの！？　わかんない！？　わかんないよ！？」

口の中に入っってくる血肉をはき出しながらディアナは必死に写本を捲り、姫桜の術を防ごうとする。
だが判らない。
あの詩が一体どういう作用をして術を発動させているのか？
どうすれば発動を察知出来る？
どうすれば防げる？
姫桜が一体何をどうやっているのかすらもディアナには判らない。
ただ謳っているだけにしか見えず感じられないのだ。
カルネイドの全てを記した十二聖書に選ばれた聖人であり持ち合わせる才とポータルポイントより流れ込む強大な世界干渉力。
この世界……カルネイドの理の中ではディアナは無双の力を発揮するであろう。
だが裏を返せばそれは、カルネイドのことは知っていても異界をよく知らないということでもある。
無量大数に存在する世界に響き渡る『殲滅の九鬼』の姫……玖木

姫桜。
貴人を攫う違反者に対する苛烈な対処で知られる日本国異界特別管理区第二交差外路。
通称特二の下部組織『稀鬼院』においても、一際強い悪名を響かせていた『最凶の抑止力』
ディアナに対する姫桜の戒めはまだ始まったばかりである。

「なんだぁ？　なんかディアナ様のひめぇが聞こえだぞ」

「門の方でぇねぇが？」

村人達の声がまた聞こえてきた。
捕ってきた猪の肉を差し入れてくれる年老いた猟師と、村で唯一の雑貨商を営むお祖母ちゃん。
この狭く人も少ない村。声を聞いただけで誰かなどディアナにはすぐ判る。

『あらあら今度はお二人ですが。ふふ。自ら来てくださるなら助かります。お昼までには終わればいいのですが』

「っ！！！」

来ちゃダメ。
お願い。止めて。

伝えるべき、叫ぶべき言葉はいくつもあるはずだ。
しかし恐怖に引きつったディアナの喉からは声がでなかった。

奪還篇　山奥の名医？

背筋をうっすらと駆け上がる寒気に身を震わせながら、リドナーは目の前の鏡へと映し出される映像に見入っていた。
リドナーが写本により生み出した鳥が送ってくる映像を映し出す鏡は、森の中で地面に座り込んで泣きわめくディアナと、そのすぐ背後で実に楽しげな薄ら寒い笑みを浮かべる姫桜の姿を鮮明に写しだしている。
鏡越しの映像だけではリドナーからは姫桜が何を行っているのか判別ができない。
たまにディアナの耳元に口を寄せた姫桜が何かを囁いているようにしか見えないのだが、その度にディアナの顔は引きつり血の気が失せ四肢をばたつかせ泣きわめく。

「いやはや。ほんと化けもんだねあの姫さんは。噂には聞いてたけど、本当に敵にしなくてよかったよ。あのディアナに簡単に暗示を掛けて、あれで遊び半分だっていうんだから恐ろしいね……心底」

純粋的な戦闘力だけで見れば師であるリドナーすらも上回っていたディアナが、姫桜によってあっさりと手玉にとられ物の十分で心を折られた。
『殲滅の九鬼』
その異名が現すとおり玖木一族の本領は、敵対者を全て討ち滅ぼす対集団にあるとリドナーは聞いている。
無論、その当主ともなれば実力は折り紙付き。対個人も苦手ではないのだろうが、それにしても異常な手際の良さだ。
優秀で可愛い愛弟子ではあるが同時にどうにも小生意気で自信過

剰だった天才児のディアナが、手も足も出ずに泣きじゃくるだけの無力な子供となっている様を、リドナーは冷静に見守る。

「すこしやりすぎだ……いいのか？」

落ち着いたリドナーとは真逆に横に立ち鏡を見つめる地味な容姿の中年騎士は渋面を作っていた。

側近魔導騎士であり夫でもあるファランの声に微かに苛立ちが混じり、私的な場以外では使い続けていたリドナーに対する敬語が形を潜めている。

「かまわないよ。あんたも納得してただろ。第一あの子達の勝手の所為でどれだけの人が迷惑してると思ってんだい……甘いんだよあんたは。それに他の十二聖人には『殲滅の九鬼』の戒めを受けさせるから勘弁してやってくれって頭を下げてるんだよこっちは。まぁこれとは別に後で私がディアナにはきっかり償いはさせるけどね」

「……お前はディアナに厳しすぎだ」

リドナーの意志が変わらないと察したのか深い溜息をこぼしたファランは泣き叫ぶディアナの狂乱した様に辛そうな顔を浮かべた。

男親ってのは本当に娘には甘いもんだとリドナーは肩を竦める。

これでもまだ温い方だというのはファランも判ってはいるはずだ。

ディアナのこれまでの行いはカルネイドに対する背信行為だけではなく、無断召喚と言う他世界に対する明確な敵対行為となる。

しかも相手は異世界条約を結んだ同盟世界であり、稀鬼院を筆頭とする悪名高い組織を抱える日本。
最悪、ディアナ諸共カルネイドを全て討ち滅ぼしかねない相手が、ディアナ個人に対する戒めで済ませ、他者の罪を問わないと言ったのはリドナーには存外の僥倖であった。
とは言ってもおそらく他のメリットがあり、軽い行為で済ませたのだろうと推測するのはさほど難しくない。
しかもその日本側のメリットも、リドナー達にとってさほどデメリットではないだろうとも気づいていた。

「ミオの方はあんたに任せるからね。しっかり叱っておくれよ……それにしても、あのお姫さんがあれだけ近くにいてもディアナは気づいてないみたいだね。一体どんな幻覚を見させられてるんだか。クスノキ分かるかい？」

ファランと反対側に立つ大柄な異世界人楠木に目をやりリドナーは尋ねる。
その楠木は鏡の映像に時折目をむけてはいるが、その目線の大半は自分の手元の掌サイズの黒い箱に向かっている。
リドナー達には判らないが楠木が弄るのは支給品の携帯電話型端末機。
荒事の時は自分の出番はまだ先だと知る楠木は、今のうちにと貯まっていた報告書や各世界の協力者から送られてくる雑多な情報へと目を通していた。
他世界で起きた違法召喚事件が現世での召喚事件に関連がある場合もあれば、こちらで掴んだ情報が他世界の事件を解決する鍵になるやもしれない。
それこそ新しい料理が作り出された、見た事の無いデザインの建

築物ができたというゴシップ的な情報でも、その影には異世界召喚者いるではないかと疑う事もできる。
広大という言葉も生温い無量大数世界に対抗する為に、矮小な身である楠木の取る手はともかく人脈を広げるの一点だ。
だから常に協力者や将来的には友好関係を結べるであろう者達には、真摯でいようとした。

「存在が察知できないのは童謡『かごめかごめ』って奴。姫さんの得意技で後ろの正面。要はありとあらゆる意味での死角に入るって術らしい。俺も理屈は良くはわかんねぇが、あれでよく悪戯してくる……まぁ見せてるのは血みどろぐっちゃなグロ画像耐性者以外お断りな悪夢だろうよ」

顔を上げた楠木はリドナーの問いに丁寧ではあるが随分と伝法な口調で答える。
社会人として最低限の礼儀として敬語は身につけているが、どうにも似合わず嘘くさくなるのを楠木は自覚している。
だからリドナーに疑念を抱かせないためにあえて素の言葉で姫桜の能力を説明した。
姫桜の能力を明かしたところで、姫桜自身は意にも介さない。それだけ突出した実力の持ち主である。

『死角ね……頬とかに何度も触れているのに気づかないんだから段違いの術なんだろうね。ディアナには打つ手無しだねこりゃ。前に直接やり合った時はあの子は力だけは大きくなったけど、技その物はあたしと変わらないようだったからね』

現にこの世界カルネイドで聖人と呼ばれる有数の使い手であるリドナーですらも、姫桜の術の本質を聞かされてもすぐに対抗策が思いつかないようだ。

それは袂を分かったとはいえ弟子であり手の内もよく判っているディアナも同様のようだ。

「楠木。たまに思うんじゃが、あやつとっとと埋めた方が、世のため人のためではないか？」

定位置である楠木の右肩に腰掛けていた縁が鏡に映る楽しげな姫桜を見て、不機嫌に眉を顰めて半分以上本気が混じっているであろう意見を発する。

初対面の人間の弱点を突き憎悪を募らせる事に関しては天下一品。

憎悪を向けられれば向けられるほど、より力を強めていく玖木の特性。

精神鑑定を受けたのなら、軽く最低限ラインを下回り即強制入院コースとなってもおかしくない歪みっぷり。

立てば芍薬。座れば牡丹。歩く姿は百合の花……その性は三途の川に咲く彼岸花。

玖木姫桜をどういう人間だと人に問われたのならば、楠木はそう

答える。
美しい薔薇には刺があるというが、姫桜の場合はその刺に猛毒が仕込まれているようなものだ。

「まぁ、そう言わないでくださいっての。あれで姫さんも毒は大分薄まったんだからよ。昔ならクスクス笑いながら相手を半殺しにして小馬鹿にしてから、周囲の殲滅に向かってただろ。んで絶望を与えておいて最後に殺すと……いやほんと性質悪いわ」

機嫌の悪い縁を宥めようとした楠木ではあったが、姫桜の過去の業績を思いだしてげんなりとした顔を浮かべる羽目になる。
姫桜が手を下す本人は楠木も自業自得だとは思うのだが、その巻き込む範囲があまりにも大きく苛烈すぎる。
殲滅の意味やその悪評がもたらす安全も心得てはいるが、違法召喚主本人は仕方ないにしても周囲は生かしておいてほしい。それが楠木の本音だ。
どうせなら必要な情報を絞り出せるだけ絞り出させてから……殺すならいつでもできる。

『……そういえば性質の悪さでは貴様もさほどかわらんかったな。反省しろ馬鹿者が』

楠木の心に一瞬浮かんだ暗くどす黒い影を見抜いたのか縁がさらに眉を顰め、叱りながらその耳を引っ張る。
軽い痛みと縁の言葉が僅かにズレ掛けていた楠木を正気へと戻す。

「反省しました……毎度毎度迷惑を掛けます」

目を瞑り自分の中に生まれた濁り汚れを出すように息をはいた楠木は謝辞を伝えると、縁は不機嫌に鼻を鳴らしそっぽを向いた。

「まったくこの若輩者は。貴様がそんなでは見出した妾の目が疑われる。精進しろ」

「あいよ。んじゃ反省ついでにそろそろ幕引きと参りますか。ではお二人とも出番といきますので頼みます」

「どこが反省しておる……この戯けは」

リドナー達に向け人の悪いにやりとした笑顔を浮かべた楠木の肩で、縁は楠木と姫桜どちらの方が性質が悪いだろうかと悩み始めていた。

『ひくっ……止めてよぉ……お願いだから……もう止めてよぉ……』

足下でついには啜り泣きはじめたディアナを見ながら、姫桜はクスクスと笑いを漏らす。

この程度のことで泣き出すなんてなんと可愛いのだろう。

さて次はどのような幻覚を見せようかと、姫桜は弾む心で考える。

切断した頭部を使って手まり唄でも詠ってみようか。

えぐり出した目でお手玉でもして見せようか。

生身の達磨落としも良いかもしれない。

大切な者。父親を奪われた筑紫優菜と筑紫優陽の痛みと恐怖を10倍返しで教え込んでやれといった楠木の言葉もあり手加減はいらない。

本来の『戒め』とは多少趣は違うが、これにはこれで快楽を覚える姫桜は、クスクスと微かな笑い声をたてていた。

幼児じみた残虐性の一面をもつ姫桜の遊び兼趣味はますます冴え渡っていく。

「壊さない程度に、でも二度とお痛ができないように徹底的に戒めてあげますからね……楽しんでくださいね」

ディアナの耳元で囁きながら姫桜がまたも新しい幻覚を送りこむと、ディアナがまた悲鳴をあげて苦しみ始める。
その泣き叫ぶ絶叫にうっとりとしながら姫桜が聞き入っていると、不意に腰に吊した巾着の中から琴の軽やかな音が響いた。
楽しみの最中に水を差される形となるが、姫桜は嫌な顔一つ見せない。
むしろ嬉しげにいそいそと巾着から特三特製の携帯電話を取り出す。
今現在姫桜の携帯番号を知っているのはごく少数。そしてその中で通話が可能な同一世界にいるのは楠木のみ。
そして楠木と話せるのなら姫桜にはどのような時であっても嫌がる理由など微塵もなかった。

「どうかなさいました楠木様？　ひょっとして何か不備がございましたでしょうか。私、婦女子を虐めて泣かすような事は心苦しくて苦手ですので」

忍び笑いの混じった声で、姫桜は心にも無いことを宣うと、電話口の向こうからは楠木の呆れ気味の声が響いてくる。

『姫さん。どうみても絶好調なんだけどな。それ以前に姫さんの腕は信用してるんで不備が出るはずもねえだろ』

楠木の声には、姫桜も自覚している人と違う異常性に対する嫌悪は一切無い。姫桜のやっている下手な演技にただ呆れているようだ。

「あらあらお褒めの言葉ありがとうございます。敬愛する主に褒められるのは従者として最高の喜びです」

『さて姫さんお楽しみの所悪いがそろそろ幕引きだ。あと上司と部下な』

姫桜の冗談に楠木はいつもの返しをする。
異常な本質を表面に浮かべている時の姫桜と接しても、いつも変わらずにいれる楠木が貴重な存在であると改めて自覚し姫桜は微かな喜びを覚える。

「つれない御方……それはともかくとしてよろしいのですか？　些か早い気はしますが。もう少し反省させてからの方がよろしいかと」

わざとらしい切なげな吐息で楠木をからかってから、姫桜は声と表情を改める。
相手を殺さず潰すなら二度と反抗する気が起きないまでに徹底的に。
その観点からいくならばもう一押し二押しが必要だと忠告する姫桜に対して、楠木も真面目な声で返す。

『まぁ姫さんの判断を信じない訳じゃないし、優菜達の苦しみ考えるとちと甘いかもな……だけど次のことを考えるとこれくらいだな。

リドナーさんはまだいけるがファランさんに無駄な恨みを買いたくない』

最後の方は小声になって楠木が待機している場の状況を伝えてくる。

場の雰囲気やリドナー達の心情から、これ以上ディアナを苦しめない方が得策だと楠木は判断したようだ。

次……また同じような違法召喚が起きた時に備え、相手方の組織が友好的であるならばある程度の信頼関係を作っておく。

これが楠木を初めとする『特三捜救』のやり方。

姫桜達が元来所属していた『稀鬼院』のやり方は、次を起こさせないための違法召喚主の世界への徹底した戒め。

次を起こさせないことが大切なのに、次に起きたことを考えて手ぬるい真似をするなど。

相反する考え方に過去の姫桜は、『特三捜救』。そしてその一番の体現者である楠木を忌々しく思っていた。

だが結局の所、『特三捜救』も攫われた人達を一刻でも早く奪い返すためにいろいろな策を講じているのだと楠木によって気づかされた。

その大元にある物は姫桜と変わらない。

自分達の世界と属する者達を守る。

そしてその楠木達の考えによって、姫桜も大切な弟も玖木に連なる者達も助けられた。

強大な力を有す姫桜に並ぶ化け物揃いで、無量大数世界の違法召喚主に恐れられる『稀鬼院』

規模が小さくとも強い信念と、絆を結んだ数多の世界の力を借り無量大数世界へと挑む『特殊失踪者捜索救助室』

どちらも間違ってはいない。
自分達の世界から見ればどちらも正しいやり方であるのだろう。

「クス……さすがは正義の味方ですわね」

楠木は数多くの召喚被害者を救おうと時間を割き救ってきた。そして楠木が救ってきたのは現世からの召喚者だけではなく、異世界の召喚者すらも多い。
召喚主が例えその世界の最高権力者であろうとも、望まない召喚によって無理矢理に連れ去られた者がいるならば救い出してみせる『最高の奪還者』
今はまだ小さく関わった世界の間でしか知られていない異名ながら、楠木の名は徐々に広まり始めている。
だがその一方で楠木が最初に救おうと決断した者の行方は未だつかめず。楠木にとって『正義の味方』は自虐でしかないと知りながら姫桜は口にする。
その自虐と負い目こそが楠木をより前に進ませると知っているからこそ。

『おう……つーわけですぐ向かうからその辺りで切り上げてくれ。ただ俺等がいく前に正気に戻ると厄介なんで』

「ご心配なく大丈夫ですよ。あら……楠木様。リドナーさんにディアナさん用のお召し物をご用意して欲しいとお伝えください」

楠木の心配に対してディアナを見て笑って答えた姫桜は、微かな水音と僅かに濡れだしたディアナの足下に目をやり楽しげに笑う。

「どうやらディアナさんは、恐ろしさと恐怖の余り御失禁なされてしまったようですので」

『さすがは姫さん。この短時間でよくもまぁ……『恐怖』を与えることに関しては右に出る者はいねぇな』

「あら言ったではありませんか。楠木様の頼みとあらば鬼にでも蛇にでもなってみせますと」

感心半分呆れ半分の楠木の言葉に、姫桜は笑って答えてみせた。

「……ナ！　デ……アナ！　ディアナ！」

お世話になった人が目の前で次々に惨殺されていく。しかもその殺人者は遊び気分混じりで死者の尊厳すらも気にしない。

見たことのない恐ろしい術。

受けたことのない強く邪悪な悪意。

度重なる衝撃でただ泣きじゃくっていたディアナが、自分の名を呼ぶ声にしばらく気づく事はなかった。

「目をさましな。あんたって子は昔から寝覚め悪いね。ほらとっと起きないと顔に落書きするよ」

呼びかける言葉に心が懐かしさを覚える。

幼かった子供の時に何度も言われ揺り起こされた記憶がディアナの意識を浮上させる。

泣いたままだが俯けていた顔をあげたディアナが最初に目にしたのは、宝石のように輝く赤い硬質の瞳だった。

混じりっけのない真紅の色はディアナがよく知っており、永遠に失ってしまったと思った人物の色だった。

「ふぇ……し、師匠？　……い、生きふぇるの？　……えぐ……ふぁんで？　ふぁに……ふぉうなってるの？」

自らの漏らした小水で濡れる地面にぺたんと座り込んだまま、ディアナは涙と鼻水で汚れた顔で師匠であるリドナーを見上げる。

玖木はリドナーを殺して奪った真紅の目を舌で転がしながら、クスクスと悪魔の笑みでディアナを嬲っていた。
師匠は殺されたはずだ……なのになぜ生きているのか。ディアナは意味が分からず混乱したまま問いかける。
リドナーは軽い溜息をついてハンカチを取りだすと、汚れたディアナの顔をごしごしと拭く。

「……あんたは幻覚を見てたんだよ。落ち着いて周りを見てみな」

しょうがない子だねぇといった顔を浮かべてリドナーが告げる。
泣き顔のままディアナは周囲をゆっくりと見渡す。
つい先ほどまでディアナの周囲には、無数の肉と骨。そして不快な臭気を放ち吐き気をもよおす内臓が散乱し、苦悶の顔を浮かべる村人達の生首がいくつも転がっていた。
腰が抜けて座り込んだディアナの足元に貯まった血が、じわじわと服に染み込んできていたはずだった。
だがそんな物は一つもなかった。

「……ここ……村じゃない」

ディアナは呆然と呟く。目にしたのはいつもの静かな森。
自分は村に帰ったはずなのに。そこであの鬼によって村人が次々に殺されていったはずなのに。
あの恐怖と絶望が全て幻だったというのか。
ではあの……

「……鬼も……幻？」

『あら鬼ですか？　ひょっとしてこんな顔ではありませんでしたか？』

背後から声が聞こえたかと思うと、横から何者かがひょいっと飛び出してディアナの顔をのぞき込んできた。

微かな微少と愉しげな笑い声。そしてディアナ達とは違う黒い柔らかそうな異世界の目。

先ほどまでディアナを地獄へと叩きこんでいた女の顔。玖木姫桜だ。

「ひっぃぃ！」

ディアナは悲鳴をあげて地面を這って逃げ出すとリドナーの足にすがりつきながら振りかえる。

怖い。怖い。

笑顔を浮かべているこの存在が怖い。

心の奥底まで刻み込まれた恐怖感がディアナを震えさせる。

「クキの姫さん。少し離れていてくれるかい。話が進みそうもないんで」

ガタガタと震えて必死にしがみついてくるディアナの背中をリドナーが優しく撫でながら、呆れ顔を浮かべて姫桜へと告げる。

『あらあら……楠木様。私そんなに悲鳴をあげられるような邪悪で恐ろしい顔をしていますでしょうか？』

クスッと一つ笑った玖木は、目元に服の袖を当て下手な泣き真似をしはじめた。

一瞥で遊んでいると判る巫山戯た態度。だが先ほどもこの態度のまま虐殺していた恐ろしい女。

見るのも怖いが、目を離すのも何をされるか判らなくてさらに怖い。

結局、震える事しかできないディアナが玖木を見ていると、その背後から現れた大男がぽんぽんと軽く玖木の頭を撫でた。

『安心しろ姫さんは一度見たら忘れられない美人だから……いろんな意味で』

苦笑を浮かべる大男の肩には憮然としている小さな人が腰掛けている。あれは話にきく異世界の住人妖精だろうか。

『ふん。貴様の場合は顔よりも存在その物が邪悪なのじゃ……おい赤毛の小娘』

ディアナを指さした妖精が大男の肩を蹴って空中に飛び上がりディアナの顔の前に来る。
羽根も無いのに空中でピタと止まった妖精は、白と赤のゆったりとした細かな装飾をほどこされた服の裾をひるがえしながら、今度は玖木を指さした。

『貴様が何を見たかは知らんが……まぁだいたい想像はつくが……ともかく。あれは幻じゃ。だが此奴。鬼畜娘はやろうと思えばいつでも現実で実行が出来る。それだけの高い実力と腐った性根の持ち主じゃ』

『あら縁様に褒められてしまいましたわ』

縁という小さな少女の高い実力という言葉だけに、都合よく反応した玖木が照れたような顔でにこりと微笑む。
姫桜の態度に縁が忌々しそうに舌を打つ。
余計な茶々を入れるなと玖木を睨みつけてから再度ディアナへと目をむける。

『誰も褒めとらん……よいか赤毛の娘。これは妾の命じゃ。貴様が攫いし筑紫亮介をすぐに妾達に引き渡せ。さもなくばこの悪辣卑劣な輩共が何をするか。先ほどの景色を思い出せ……判っておろうな』

声と共に縁の目の色が徐々に深い銀色に染まっていく。
あふれ出す強い気配と荘厳たる声がディアナに先ほどの景色を思

いだせと命令すると、それだけでも思い出したくもない記憶がディアナの目の前に浮かび、血みどろの景色が現実感を持って浮かび上がり視界を埋め尽くし始める。

「っ！　っ！」

足元に貯まった血の池がびちゃびちゃと音を立て、吐き気が催すほどの死臭。あまりの恐怖に頷くことも首を横に振ることも出来ずディアナは強く震えて、唯一安心できるリドナーの足へとさらに強くしがみつく。

『いや縁様。それ命令じゃなくて脅しだっての。しかも言霊込みの相当質の悪い。つーか俺を姫さんと一緒にしないでくれ』

今まで黙っていた大男が声を発すると縁は不機嫌に眉を顰めて鼻をならす。

するとディアナの目の前に浮かんでいた地獄があっさりと霧散して消え去り、元の静かな森が戻ってきた。

『よう嬢ちゃん。怖がらなくても大丈夫だからよ。この神様は見た目ほど性悪じゃないからよ。先生さえ帰してくれればこれ以上怖い事はないからよ』

苦笑を浮かべた大男がディアナの前にしゃがみ込み目線を合わせ

てニカッと笑う。
しかしその笑みはどこか嘘くさい。
何よりあの恐ろしい玖木や異様な気配を醸し出す縁と親しげに話すその態度が、余計に恐怖を感じさせる。
得体の知れない大男から逃げるようにディアナが僅かに後ずさろうとすると、ディアナの背から手を離したリドナーが、ディアナと大男との間に割ってはいる。

「お三人。ちょっと待っててもらえるかい。先にすることがあるのさ」

ぱんぱんと手を叩いたリドナーが三人を止めると、ディアナの手を取り無理矢理に立ち上がらせた。
それからリドナーはディアナの全身を頭からつま先まで見て情けないねぇと首を振る。
泣きじゃくった顔は涙でくしゃくしゃ。服は泥まみれでしかも小水付き。どこからどう見ても年頃の女の子の格好ではない。

「全くこんなに汚れちまって……しかもお漏らしって。ガキだねぇあんたは。とりあえずこっちきな。身体拭いてから着替えだよ。ファランが湯を沸かしてくれてるから」

「ふぇ……師匠？」

未だ完全に泣き止んでいないディアナは、意味も判らないままリ

ドナーに引き摺られていった。

リドナーに引き摺られていく泣き顔のディアナを見ながら、楠木はにやっと人の悪い笑みを浮かべる。

「さてと策はほぼ成功かな。後はお二人さんに仕上げをお任せと」

「ふん。やり過ぎじゃ。妾にまで嫌な役目をやらせおって……意固地になって返さぬと言ったらどうするんじゃ」

「その時はもう一度……となるとファランさんが黙ってねぇな。マジで姫さんと一戦交えかねないな」

不機嫌な目を浮かべて睨みつける縁の視線から逃れるように、楠木は頭をがじがじと掻く。

姫桜が負けるとは思わないが、厄介なことに変わりはない。

もっとも読みが当たっていれば、そういう事態にはならないだろうと楠木は楽観的に考えていた
姫桜も同じ考えなのかにこりと微笑む。

「そうですね。お二人にとってあのディアナさんは実の娘みたいな存在。袂を分かったとはいえ大切なんでしょう」

「まぁだからこそ飴が効くんだけどな。姫さんと縁様の鞭が強力な分。倍増ってな」

楠木の物言いに縁がますます不機嫌な顔になった。

「それじゃ……誰が性悪じゃ楠木！　一等性質の悪い貴様に言われとうないわ！　毎回毎回善人面しおってからに！　玖木の娘！　貴様もじゃ！　こやつに頼まれたからといって少しは加減してやれ！　さすがにあの姿と怯えを見て可哀想になったわ！」

縁は先ほど性悪と言われた事が不満なのか、楠木の肩へと飛び乗り耳を何度も引っ張っる。
姑息な回りくどい手を多用する楠木に対しては縁もいつも思う所があるが、今回は姫桜の全面協力もあるためかさらに質が悪い。
悪役を全て姫桜と縁に押しつけて、説得役はもとより強い関係を持つリドナー達に任せ、楠木本人は傍観に徹していた。

「ほら俺はリドナーさん達に対する飴だから。後ついでに人質。なぁ姫さん」

縁の説教に対して楠木はどこ吹く風で答える。

楠木からすれば何もしないのではなく、能力的に何もできないと言った方が正しいからだ。

年若い少女であってもディアナはこの世界の実力者である聖人の一人。楠木の力など遠く及ばない。

しかるにリドナー達を信頼させる甘い条件を出す飴役と、万が一姫桜が暴走した時の人質位しかやれる事がないという判断だ。

「私はリドナーさん達に対する鞭ですから。楠木様と私はやはりぴったりの相性ですね……閨での役割は逆ですけど。いつも私は攻められてばかりですので」

楠木に話を振られた姫桜は嬉しそうな笑顔を浮かべてからクスクスと笑うと、楠木は勘弁してくれと息を吐く。

「いや……どっちかって言うと姫さんの方がガン攻めだろ。歯で噛むは牙で噛み千切る。爪をたてて引っ掻いた上に、かぎ爪で傷口は抉るわで」

艶っぽいと言う言葉とは真反対の言葉。どちらかというと獣に襲われた表現した方が良い返しをする楠木を見て、縁の額に青筋が浮かぶ。

「っく！　き……貴様らは！　少しは真面目にならんか！　そこに座れ！　説教をくれてやる！」

縁がその小さな手で楠木の顔を力一杯に殴りつけていた。

奪還篇　山奥の名医？

沢へ降りていく脇道を進むリドナーに、ディアナは未だ震える右手を引かれながら顔を俯けて付いていく。

リドナーの話ではこの先でファランが、汚れてしまった身体を拭くための湯を用意してくれているそうだ。

孤児であったディアナを引き取り育ててくれた師であるリドナーと、その夫である魔導騎士ファラン。

ディアナは二人には大恩という言葉も軽いほどの恩があり、道を違えた今は複雑な思いがあるがそれでも強い敬愛の念も抱いている。

姫桜によって殺されたと想っていた彼等が生きていてくれた事は何よりも嬉しい。

しかしそれでもリドナーに対する気まずさや溝が埋まるわけではない。

異界へと渡り新たな知識を得る重要な役目を放棄し出奔した聖人。

リドナーとファラン。二人の大切な一人息子を拐かした娘。

師匠の信頼を裏切り説得に対して力で反抗した『元弟子』

異世界より筑紫亮介の召喚を行った違法召喚主。

異界関連知識が書き記された聖書『四月の書』の聖人にして、カルネイドの異界関連事項を管理する最高責任者そしてミオレイドの

実母。
リドナーの立場からすれば、今のディアナは公私共々に敵対者のはず。
このままリドナーのペースで進めば、ディアナが連れ戻されることになるのは間違いない。
聖人としての役割を果たすために異世界に送られるか。
それとも罪人として一生幽閉されるか。
どちらにしてもせっかくできた”家族”と引き離されるのは間違いない。
それだけは絶対嫌だ。
かといって玖木姫桜に叩き折られた心には、再度刃向かおうと思えるほどの気力は残っていない。
自分は今どうすればいいのか、どれだけ考えても答えが出ず、迷子の子のようにリドナーの後をついていくことしかできなかった。

一方でリドナーも表情には出していないが、どうにもやりにくさを感じていた。
優秀で可愛くもあるが小生意気な『弟子』で、実の子と変わらずに時に叱り時に愛情を注いだ養女。
ディアナは今でもリドナーにとって大切な家族。

とりあえず頭に拳骨の一つでも落としておけば、昔の関係に一瞬で戻れるかと思っていた。
しかし先ほどのように号泣している時に叩くのはさすがに可哀想であったし、今のようにただ黙ってついてくるようなしおらしい態度をとられると今更やりにくい。
そして何よりディアナとの距離感がとりづらい。
口に出して説明するのは難しいが、自分の愛弟子にして義子はこんな娘だったかという違和感だ。
リドナーの知るディアナはともかく小生意気で強気の娘。
しかし今のディアナは姫桜によって叩きのめされたとはいえ、あまりにも弱々しすぎる。
それにリドナーの手を握りかえすディアナの手の強さやその動きにどうにも遠慮のような物を感じる。

（まいったねこりゃ。クスノキのいってた事が大当たりかい）

来訪者楠木が注意点として伝えてきた話を思いだして、リドナーは心中で嘆息をつく。
楠木から聞かされた時はそれはいくら何でもないと否定してみせたのだが、ディアナの一歩引いた態度から急に現実味を帯びてきていた。

（まったくほんと難しいもんだね。母親なんて……そして父親は甘やかせばいいってかい）

ファランとの打ち合わせていた河原へと降りたリドナーは、ファランの沸かした”湯”をみてもう一度心の中で溜息を吐き出した。

不意に前を歩いていたリドナーの足が止まり、顔を俯けて考え込んでいたディアナはその背中に軽く当たってしまう。

「あんたねぇ……あたしは身体を拭く湯を沸かしくれっていったんだけどね。誰が岩風呂を作れっていったんだい」

「術を使えばたいした手間じゃない。気にするな」

呆れかえったリドナーに対して、微かに不機嫌そうなファランの返事が返ってくる。

出奔してからは一度も会っていなかったファランの声にディアナは俯けていた顔をそっとあげる。

リドナーのように真紅の目立つ石瞳ではなく、あまり目立たない髪と同じ茶色が掛かった石瞳。

ずば抜けて背が高いわけでもなく、かといって低いわけでもない。精悍な顔立ちでもなく厳つい顔でもない。街中ですれ違っても記

憶に残らないような地味な容姿。
所謂ありふれた中年の容姿と存在感で唯一目立つといえば騎士姿くらいのものだ。
それがリドナーの懐刀と呼ばれるディアナの養父ファラン。
懐かしい養父の姿は離別したときのまま。あまり変わっていない。
こうやって変わらないファランに会えたことに、ディアナは嬉しさを覚えていた。
眉間に皺を寄せながら立っているファランの横では湯気は立っている。
どうやら河原が広く浅く掘ってから、術で石を敷き詰め露天風呂としたようだ。風呂は湯気を立てる温かそうなお湯で満たされていた。

「……お、おじさ」

「そこの木の裏側で見張りをしている。終わったら声をかけてくれ」

懐かしさからファランに話しかけようとしたディアナだったが、その声を遮るようにファランはリドナーへと言葉少なに告げると、少し離れた太い木を指さして、ディアナ達の横を早足で通り過ぎていった。
声をかけるどころかファランはディアナを一瞥すらしなかった。
ファランはきっと優しい言葉で慰めてくれる。
そんな甘えがディアナの無意識にはあった。
ファランの態度に自分の無自覚の甘えに気づき、そして予想が外れたことにディアナは愕然とする。
いつでも優しく自分を守ってくれる存在。

それがディアナの中のファランだった。
ファランに無視され、弱り切っていたディアナの心はさらに抉られる。

「っ……ぅ……ぅぅ……しっひょう……お、おじさん……おこってる。あたし……っぅ……き、嫌われ」

ボロボロと泣き出したディアナをリドナーちらりと見てから、ファランが身を隠した木へと視線を向ける。

「まったく。これだから男親は……ほらディアナ。泣いてないでとっとと服脱ぎな……ってそれも二度手間か」

リドナーが空いていた右手をさっと振る。
するとディアナの着ていた服が淡く光り始め、ついで服や靴のあちらこちから何十もの細い文字列が変化してほどけて糸のように抜けていく。
文字こそがカルネイドを構成する最大要素。
人。鳥。魚。木々や大地まで。この世界カルネイドの全ては文字が基礎にある。
無数の文字が集まり単語となり文章となり一つの存在となる。
リドナーの行った術は、物質を原初の状態へと戻す術で、聖人の基本技の一つだ。
身につけていた衣服を文字へと変化させられディアナは瞬く間に全裸になる。
ディアナから離れた衣服は光る文字となりリドナーが広げる右手

の上へと集まっていた。

「さてとこれでいいね」

リドナーのいきなりの行動にディアナが呆気にとられていると、リドナーはディアナの手を握っている左手を振る。

「ふぇ！？　え！？」

リドナーによって身体を強く引っ張られたディアナはつんのめるように前へと数歩進み、そのまま湯船の中に頭から飛び込む羽目になった。

「ぇご！　けほけほ……し、師匠ぅ」

頭から落ちて気管に入った湯を咳と共にはき出しながらディアナは水面へと顔を出す。

「なんだいその目は。馬鹿弟子の汚れた服を綺麗にしてやろうとしている師匠に対して失礼だろ。ほらそんな事よりちゃんと使って汚れをおとしな。いい若い娘が小便臭いなんて……恥ずかしくないのかねこの娘は？」

風呂の脇に置かれた石の上にリドナーは座りディアナを軽く睨みつける。
リドナーの赤石の瞳に微かに光が灯る。
これはディアナを説教する時のリドナーの癖だ。

「う……うぅぅ」

実際に醜態をさらした後では反論もできずディアナはただ羞恥心に頬を赤く染める。

「おやさすがに恥ずかしかったかい。じゃあ見ないでいてあげるさ。とりあえず服から汚れの文字列を除去するからしばらく浸かってな」

ディアナから視線を外したリドナーは、右手に持っていった絡まり合った文字の塊へと左指の中指と人差し指を当ててまさぐり、時折汚れを示す文字列を見つけてはつまみ弾き飛ばしていく。
リドナーは軽々とやっているように見えるが同じ聖人。しかも自他共に認める天才であるディアナの目からはそれがどれだけ力加減の難しい作業かよく判る。
原初の文字状態は移ろいやすく変わりやすい。ちょっとでも力が強かったり触れる場所を間違えれば、服を構成する文字を壊すことになる。
そして奇しくもこの術はディアナが今もっとも必要とする技術だった。

「し、師匠。その技って！？」

「ん。これかい。あんたは力だけならあたしより上になったけど、こういった細かな扱いはまだ教えてなかったからね。慣れれば家事にも使えるんだよ案外ね。まったく天才の弟子を持った師匠は大変だよ。いろいろ教えてやる前に聖人になっちまうんだからよ。挙げ句の果てに大問題まで起こしてさ。もっと無能な弟子なら、とっとあたしが蹴りをつけられたんだけどね」

ディアナの驚きの意味を取り違えたのか文字をより分けながら懐かしげに語っていたリドナーだったがその口調が急に重くなった。

本題へ入ろうとする様子を察して、ディアナは驚きを抑えて思わず身体を硬くする。

「ディアナ……なんで逃げたまま大人しく隠れてなかったんだい。無断召喚とそれによる薬草の記述に裏とはいえ市場への流通。すぐにばれるに決まってるじゃないかい。しかもあんたが新しいポータルポイントを作った所為で世界のバランスまで崩れてるんだよ……ねぇディアナ。何でこんな事したのか教えてもらえる？」

リドナーに強く詰問する雰囲気はない。あえて例えるならそれは子供の心配をする一人の母親の声とでもういうべきだろうか。

リドナーが師や聖人としての立場ではなく、今はディアナの養母であろうとしてくれている事。

そしてディアナのことをどれだけ心配していてくれたのか。

何処か寂しげにも見えるリドナーの姿にディアナは初めて気づく。

「……だ、だって、助けてもらった村のお爺ちゃんお祖母ちゃん達が大変だったから。新しい街道ができて旅人いなくなって、若い人も出ていちゃって人も少なくなって、貧乏だったの」

この辺りは『ドノマの霧山』と呼ばれ、酷い時期には一日中濃い霧が立ちこめ、その中に盗賊や凶暴な獣が姿を潜めていることも多々あった。しかし山越えのできる唯一の街道としてそれなりの人の通りがあった。

それが２０年ほど前に難儀な道のりを嫌った交易商人や旅人達からの要望で、麓に広がっていた大湿地帯を干拓して、新たな街道が敷設されそれに伴い幾つもの新しい街が作られた。

それ以来大変な山越えの道の人通りはめっきり途絶え、時代に取り残された道と村々だけがひっそりと取り残された。

若者は働き口を求め次々に村を出て行き、残ったのは愛着を持った年寄りだけ。そんな村の一つへと出奔したディアナ達は流れ着いた。

逆に過疎化が進み人の出入りがあまり無い村だったことが、歴代でもっとも若き聖人として顔の知られはじめていたディアナが隠匿するには幸いしていた。

「今のカルネイドのお薬は全部稀少な鉱物や薬草を使うから……一昨年の冬に村で流行病が流行って……でもそのお薬買うお金もなく……だから治せる薬とその知識を持つ人を喚ぼうって……それでチクシ先生喚んで」

「それで無断召喚かい。あんたそれは人攫いと変わらないって昔話してやっただろ。あんたはそれも忘れたのかい？」

ディアナはうつむき首を横に振る。
同意無き召喚がカルネイドでは認められない事は判っていた。
だがそれしかディアナには選択肢がなかった。
好きな村人達と好きな家族両方を守るためには。

「……判ってたけど。来てもらって教えてもらったらすぐに帰せばって……でも……でも、喚ぶことはできたけど……チクシ先生が帰せなくなって……だけど先生。気にしなくていいよって。村の人達助けられてよかったねって言ってくれて……だからちゃんと帰してあげようって。どんな事してでもって」

あの時の後悔を思いだしディアナは言葉に詰まる。
村は救いたいという強い気持ちはあったが、その為に恩人を不幸にする気など毛頭無かった。
返還できないと告げた時、チクシリョウスケはディアナ達を責める事は無かった。異世界へと連れてこられた本人がショックを感じていないわけがないのに。

「いろいろ考えて思いついたの。ちゃんと元の世界に元の状態で帰す方法。でも使うにはあの時のあたしの力だと全然足りなくて。それで師匠が昔教えてくれた、ポータルポイントつくって流れ込んでくる力を自分の物にする術を思いだして必要な力を得ようって……

……」

ここに至るまでの経緯を全てを吐露したディアナは言葉を無くし俯き黙りこくる。

改めて口にしてみれば、どのような理由がありどう弁解しようとも、法に当てはめれば自分が重罪である事に変わりはないと嫌でも気づかされる。

だがどうすればよかったのか。どうしたら間違えなかったのかは判らない。

ただ自分は好きな人達と一緒にいられればよかったのに……

それがディアナの本心であり切なる願いだった。

「アレは話半分で聞かせただけだから教えたって代物でもなかったんだけどね。召喚術もそうだけどほとんど独力でやっちまう辺りが本当にあんたが天才っていわれる由縁だね……それにしても嫌になるね。他人どころか、来たばかりの異世界人のクスノキの方が、あんたのことを判ってるんだからね」

自虐気味な口調でリドナーがぽつりと呟いた。

「ディアナ。顔あげて。ちゃんとあたしの顔を見な」

背を向けていたリドナーがいつの間にやら振り返りディアナの顔

を見つめていた。

「ディアナ。あんたさ……あたしの事を信用してないだろ」

そう告げたリドナーは今までディアナがみた事が無いリドナーの表情だった。

とても悲しそうでもあり、そしてとても怒っているようにも見えた。

「まぁあれだな。お嬢ちゃんの境遇を考えるとある程度の推測は楽だった。事情ありとはいえ親無しの拾われ子。しかもこの世界で最も重要な聖人と成れるかも知れない才能の持ち主とくれば、本当に小さい頃はともかくある程度でかくなれば、自ずと自分の立ち位置を悟るだろうよ」

楠木が予想した事。

それはディアナはリドナーに対する強い敬愛と共に、どうしても拭いきれない不信感が胸の奥底にあるというものだ。

自分が拾われたのは聖人と成る才能が有るから。

聖人にならなければ自分は捨てられる。

そんな脅迫観念が無意識とはいえあったのだろう。だからこそ才能があったとはいえ、史上最年少の聖人となり得た。

「そして努力の末に聖人になったはいいが、今度はあらゆる意味で遠いそれこそ時間の流れも違う異世界に行ってこいとくるだろ。せっかく恋仲になった恋人と離れてな。しかも恋人はそのリドナーさんの息子。大切な息子を拾った娘になんかやれるかって、姑のいやがらせってな。っていうか、そんな根も葉もない噂が実際あって、それを耳にした嬢ちゃんは信じちまったんだろうよ」

その悪意に満ちた噂の出所は年若くしかも孤児であったディアナに聖人の座を取られた他の聖人候補の親類縁者。

城持ちのリドナーを見ていれば判るが、聖人ともなれば大きな責任を負うが同時に多大な利益や役得もあり、そしてその恩恵は近くにいる者にも恵まれる。

利益を奪われたという逆恨みからの妬みや恨みから出た悪意が、

ディアナの心の底に棘のように刺さった不信感を増大させ出奔という事態へと陥らせた。

「そんでもってリドナーさんの言っていた嬢ちゃんの印象。小生意気で強気ってのは地もそれなりにあるだろうが大半は虚勢って予想してた。聖人候補となった段階で嫉妬や妬みもそれなりに受けてたはずだ。そこに嬢ちゃんが孤児ってのをプラスすると、大抵の人間は卑屈になるか逆に強気で押し切るかってな。まぁそこらは姫さんにやられてすぐに折れたの見ればどっちかなんてよく判るだろ」

「……ぐだぐだ説明はよい。結論を述べよ」

軽い口調で説明をする楠木と違い、縁の声には隠そうともしない不機嫌と怒りが籠もっている。

しかしその縁の怒りを向けられた楠木は意にも止めず軽く頷き返す。

「嬢ちゃんの精神を姫さんで一回完全ぶちこわし。んでもってその後でリドナーさん達で癒し。リドナーさんに対する不信感を取り除くってのが肝だ。それが今の最終段階」

「楠木……お主。自らのやり口をどう思う。弱みにつけ込み情を操る。いつものお前の手じゃ」

目の前に浮かぶ縁がプルプルと震える拳を握り締め青筋を立てる姿を見ながら、地面に直接正座させられた楠木はどう答えた物かとしばし迷う。

推測を建てた後は一応裏付けやら確信を得るために周囲への聞き込み。場合によってはこの世界で恐れられている姫桜の威光を笠に着ての脅しにすかしに、情報提供代として持ち込んでいたこの世界の金銭での買収まで。

とりあえず時間内で集められるだけの情報を集めて推測を予測へと昇華。

後は推測に合わせてもっとも効果のある懐柔策を計画実行。

今回は姫桜がいるので力業の心配も無かった。

今はまだディアナの説得まで辿り着いてはいないが、リドナー達はディアナを心底から可愛がっている。

説得という名の懐柔策はおそらく上手くいくだろう。

「そりゃ卑怯者ってことで。ほら縁様も知ってるでしょうが俺の代名詞『卑怯悪辣な正義の味方』って。本当に言い得て妙って奴ですね」

やった事やら狙いから考えるととても褒められた物でないなと思いつつ楠木はとりあえず高らかに笑って返す。

「くっ！　笑うなこの戯け！　貴様の悪評は妄の悪評じゃぞ！」

場の雰囲気を和ませるように笑ってみた楠木だが、それが縁の怒りを逆なでする。

もっとも楠木もこの辺りは承知の上だ。
真面目な者を見るとからかいたくなるそんな悪癖が楠木にはある。

「いやほら笑うのはトランス状態へと向けてテンションをあげてる副作用ですって」

奪還の総仕上げの祭事に必要な縁との一体感を得る。所謂トランス状態へと到るには少しずつ精神を高揚させていく必要がある。
自らの策が成功する達成感とさらに悪癖で得た精神高揚を使い楠木はトランス状態へと到る。

「ならもっとあげてやるわ！　玖木の娘！　そこの石をもってまいれ！　この阿呆の膝につめ！　痛みで精神高揚をあげてやるわ！」

楠木のテンションのあげ方は縁も十分承知しているがそれでも腹が立つのは腹が立つらしい。
楠木と縁のやり取りをクスクスと笑いながら見ていた姫桜を呼び。近くに転がっていた軽く見積もっても百キロはくだらないだろう大きな石を指さす。

「はいかしこまりました。その前に地面に正座させられた楠木様が寒そうですので、この石をよく温めてからにしますね」

縁に呼ばれた姫桜は着物の袖をまくって石に手を掛けた。
見た目は箸より重い物は持ったことはないといった細腕。
だが姫桜はその細い片手で重たい石を苦もなく軽々と持ち上げたかと思うと、さらには硬い石に対してまるで発泡スチロールのように指をズボッとくい込ませた。
姫桜の指がめり込んだ辺りから石の表面が赤色化していき、生えていた苔がプスプスと煙を立ちのぼらせて瞬く間に焦げていく。

「いや姫さん。それは温める通り越して焼き石の処刑だっての。まぁ気持ちはありがたいんで、どうせなら姫さんが膝の上に乗ってくれた方が気持ちいいし温かい。ついでにテンションも上がるだろうし。ほれ俺も男なんで」

「あらあら。それでしたら喜んで」

「よし貴様ら二人そこを動くな。滝行にしてやろう。液状化した岩のな」

楠木がわざとらしいスケベ顔を浮かべて喉の奥で笑うと、姫桜も指に刺していた岩をポイと投げ捨てて楠木の膝に治まりながら楽しげな笑みで返し、縁は姫桜の投げ捨てた己の数倍はある石を空中で固定してさらに熱を加えて溶岩へと変化させ過激な発言を放ち二人の頭上へと移動させる。
テンションがあがり始めた楠木の軽口は増えていき、従者に呼応し縁も本来の姿である荒々しい神の性と立ち戻っていく。
騒がしく騒々しく。

『縁断ち縁紡ぎ』の祭事へと向けて楠木と縁は一見仲違いしているように見えながらも、着々と準備を進めていた。

奪還篇　山奥の名医？

ディアナはリドナーの言葉の意味が分からない。
自分がリドナーを信頼していない？
そんなわけがない。そんなはずがない。
リドナーは顔も覚えていないほどに幼い時分で両親を失いひとりぼっちになってしまったディアナを、遠縁の娘だからと引き取ってくれた大恩人だ。
リドナーの実の息子であるミオレイドとまったく変わらない無償の愛情を注ぎ、持ち合わせた力に歪み道を違えぬように厳しく叱って育ててくれた。
リドナーがどれだけ大切に育ててくれたかは本人であるディアナが一番判っている。
自分がリドナーを信用していないはずがない。そんなはずがないはずだ。
だが……しかし……
否定の言葉を心中で繰り返しながら自らのここ数年の行いを振りかえる度に、ディアナの顔は蒼白になる。
否定しようとして思い出せば思い出すほどに、逆にリドナーの言葉が真実になる。
リドナーを信じられないから、根も葉もない噂を信じた。
リドナーを信じられないから、大好きなミオレイドと一緒に過ごす道は他にないと出奔した。
リドナーを信じられないから、せっかくできた家族と引き離されたくないと力で抗って見せた。
リドナーを信じられないから、自らの力のみでチクシリョウスケを帰そうと固執した。
ディアナはリドナーに指摘される今の今まで自らの行動は、頭ごなしに命令してくる親に反抗したくなる子供気持ちの延長線上のよ

うな物だと思っていった。
無意識に信じ込んでいた。
だが違う。
子にとって親とは、例えどれだけ離れていようと道を違えようと、心の奥底で繋がり信頼するべきはずの存在で無ければならない。
自ら子を傷つけ殺すような親でもない限り、その関係は絶対に変わらない。
リドナーはディアナを実の子と同様に育ててくれた。
両親の顔も覚えていない自分にとってリドナーは実の親と変わらないはず。
なのに心の奥底では信じ切れていなかった。

「自覚……しただろ。あたしも他の奴に指摘されるまで気づいてなかったけどさ。ディアナ。あんたはあたしのことを昔は様付け。正式に弟子にした後は師匠って呼んでた……『お母さん』って呼んでくれたことは一度もなかったね。あたし以上にファランに懐いてたけどずっとおじさんのまま。小っちゃいときからヒントは転がってた。気づけなかったあたしも間抜けだね」

リドナーが皮肉気で自虐的な笑みを口元に微かに浮かべた。なんでこんな簡単な事に気づかなかったのだろうと。
幼いディアナの僅かな示唆や言動から、聡いリドナーなら気づくことができたはずだ。

「あ……あたし……そ、そんなこと」

自らが抱く不信感を自覚し、それでもディアナは否定しようとする。
しかしその力ない声は震え青ざめた表情と輝きを失った石の目は、己が発する言葉を明確に否定し、やがては口も力を無くして止まる。
心底から敬愛し、心の奥底で不信感を抱く。
リドナーに対する矛盾したディアナの真の感情が無残にも姿を現し、恩人を疑ってしまう自分への嫌悪感が、姫桜によって打ちのめされていたディアナの精神をさらに奈落へと落としていた。
無言となった両者の間を沢のせせらぎと木々の梢が風に揺らされて擦れ合う音が静かに通り過ぎる。
ディアナとリドナー。
養女と養母。
弟子と師匠。
男と駆け落ちした娘とその男の母。
違法召喚者と管理者。
過去は近しい存在であり今は相反する存在。

「あんたが気にする事じゃない。悪いのは全部あたしなんだよ」

沈黙の均衡を破ったのはリドナーだった。
リドナーの言葉はディアナを慰める優しさための物でない。
硬く重く響く声は断罪者の物だ。

「あたしがあんたに抱いている負い目が物心ついてた頃のあんたにもばれてたんだろうね。だから信じてもらえなかっただろうね」

断罪するべきは自らの罪。
下手をすればディアナとの全ての関係を失うかも知れない最後の手札をリドナーは開きはじめる。
愛する娘と真の信頼関係を結ぶために。

「……」

リドナーの硬い表情に気圧されたのか、ディアナは黙ったまま不安げな表情でリドナーを見上げる。
ディアナにはリドナーが負うべき負い目とは何か判らない。

「あんたが遠縁の娘だ。だから引き取ったって言ってきただろ。でも本当は、あたしとあんたは血なんて一滴もつながってない。正真正銘赤の他人なのさ」

「っ！？　じ、じゃぁ……や、やっぱり……あたしが聖人になれるかも知れないだけの力を持ってたから！？」

リドナーの告白にディアナが悲痛な声をあげた。
自分の価値は力だけ。力があったから引き取られただけ。
悪意に満ちた噂が真実であったのか。
幼き頃より噂を耳にし、聖人候補となった頃により聞こえてきた陰口に何度傷つけられただろう。
寄る辺を失った絶望にディアナの心は捕らわれかける。

「それは否定しないよ。あんたには聖人になれるだけの器の持ち主だってのがあったから引き取ったのは間違いないからね……でもねそれだけじゃ無いよ。あんたはあたしに……あたしとファランにとっての希望なんだよ」

ディアナの言葉を肯定したリドナーだがその離別の言葉とも思える声とは裏腹に、岩風呂の縁に跪いてディアナの頬へと手を伸ばして優しく撫でる。

温かく柔らかく優しい手はディアナにとって懐かしい手。

寂しく不安な夜に泣くディアナを寝付くまで優しく抱きしめてくれた手。

聖人である為に多忙な予定をこなしながらも、子供達のためにと手料理を作り続けてきてくれた手。

ディアナが良いことをしたときは褒め、悪さをした時には叱ってくれた手。

千の言葉よりも明確で確かな感触。

リドナーの手が絶望の淵へと立つディアナを強く掴み引き戻す。

「私は聖人として義務を終えて異界からこっちに帰ってきて調子に乗っていた。自分はちゃんと義務を果たした。これからは押しも押されぬ聖人として勤めを果たしていける。異界で過ごしたことで十八才も年が離れちまった地味で老けた幼なじみより、もっと若くていい男を紹介してくれるって下世話な連中をぶっ飛ばす程度にね」

リドナーとファランが同い年の幼なじみであったこと。

しかしリドナーが聖人となり異界へと渡ったことで１８才もの年

齢差が開いてしまったことはディアナも知っている。
下手すれば見た目だけなら親子ほどに離れてしまった両者は、それでも強い絆に結ばれた夫婦であることは側にいたディアナからすれば今更説明されるようなことでもない。
本題へと入る前のワンクッションといったところだろう。。

「ミオも生まれて何もかも順風満帆って思っていた矢先に、大掛かりな違法召喚事件がこの世界で起きたのさ。攫われたのは山奥の村が丸々一つ。そこに住んでいた村人百人近くが一気に消えちまったんだ……聞いたことがないって顔をしてるね。そりゃ当然さ。あんまりに事が大きすぎたんで隠したからね。一つの村が山津波に飲まれて壊滅ってね」

「そ、それって！？」

百人もの人々が異界へと攫われた話などディアナには聞き覚えが一切無い。
そんな大事件が起きていたのならば、聖人候補であった時に過去の重要な事例としてディアナは教えられていたはずだ。
一般市民だけでなく、やがては世界を管理するかも知れない聖人候補にすらも隠すほどの重大事件など聞いたことがない。
しかし山津波に飲まれた村の話はよく知っている……他ならぬリドナーより聞かされた話。

「そう……あんたが生まれた村だよ」

自然災害によって壊滅した村で唯一生き残った幼児が、遠縁の聖人へと引き取られ、眠っていた才能を発揮し、やがて最年少の聖人へと到る。
まるで御伽噺のような人生。
それがディアナの知る自らの生い立ちだった。

「攫った連中の目的は終局を迎えた世界で自分達の皇子を生き残らせるため『最後の一人』。世界その物に存在昇華させること。目的達成のために連中は闇雲に、それこそ数万の世界と道を繋げてたくさんの人を攫っていった」

世界が熱を失い終わるその瞬間。世界すらも上回る意志を手にする者は世界そのものとなり永久不滅にあり続ける。
元世界が有す全ての力と能力そして記憶を持ってして。
無量大数世界における上位存在。超高密度世界干渉力存在。所謂神と呼ばれる者達とは生まれは異なりながらも神と並び時に超える者。
それが最後の一人。別名『異神』と呼ばれる者達である。

「攫われた連中は、その皇子を強大化させるために次々に食われていった。でも被害世界もただ指をくわえてこまねいてたわけじゃないさ。被害世界で連合を組んでその世界へと攻め入った。事態収拾と再召喚を防ぐためにあたしはカルネイドに残っていたが、ファランを筆頭に手練の魔導騎士達をあたしも派遣した。ただ相手も当然予測して対策済みでね。多世界でも名が轟く猛者共に封鎖されたポータルポイントと、優秀な術者が数百人集まっても破れないほどの

結界によって強化された断絶壁に阻まれて進入もできない膠着状態で一進一退の攻防戦になったのさ。向こうからすりゃ時間稼ぎさえできればいいんだからあたし等の方が断然不利さね」

ディアナにとって現実味のない話を淡々と語るリドナーだが、その顔に浮かぶ後悔と懺悔を含んだ悲痛な表情が真実だと嫌でもディアナに悟らせる。

「現地時間で三週間ほど経ったときに内側から結界が破壊されて事態が動いた。結界を破壊したのは、どうやって侵入不可世界に入ったのかは知らないけど偶然にもあんたがやられたクキの姫さん。侵入可能になったところで一気呵成に攻め落としたが時既に遅しってやつでね。召喚被害者は判明しただけでも三百万以上の生命体……
……でも生き残ったのはたったの８３人しかいなかったんだよ」

リドナーが奥歯をぎりっと音が立つほどに強く噛み締める様は、無念と怒りを噛みつぶそうとしているようだ。

「そして生存者の中にカルネイドの住人が一人だけいた。それがあんたなんだよ。ディアナ……本当にすまなかったね。あんたが一人になっちまったのは、あんたの両親や家族を救えなかったあたしの所為なんだからね」

「そ、そんな！　そんなの、し、師匠の所為じゃないでしょ！？
だって悪いのは攫った世界の人達でしょ！？」

呆然としていたディアナだったが、リドナーの言葉に我に返り反論する。
あまりに聞いていた話と違いすぎるので未だ自分の事とは思えない。だからこそある意味客観的に判断できる。
今の話でリドナーに否はないはず。やれる事をやろうとしていたはずなのに。
なのになぜそんなに後悔に負けそうな表情を浮かべるのか。

「異界との関わり合いを管理し異界の脅威から民を守るのが、四月の書の聖人であるあたしとファラン達配下の魔導騎士の役割さ。その観点からすれば大勢を攫われちまった段階で大失態。召喚者のほとんどを助け出すことすらできず死なせちまったなんて言い訳のしようもない罪だよ……あの時に打てた手の中じゃ精一杯だと今も思っている。だけど同じくらい後悔もしている。誰一人死なせず取り返せた手もあったんじゃないかって」

ディアナは気づく。聖人が持つ重さ。そして自分が行った無断召喚が罪である理由を。
人が健やかに生きていくために世界を管理し環境を整える。聖人の役割は突き詰めれば、全ては当たり前である日常を守るため。
そして召喚とはその当たり前である日常から、無理矢理に一片をはぎ取る行為なのだと。

「でも……後悔に潰される事は無いよ。あんたが生きてくれていたから。一人だけでも助けれた。だからあんたはあたしにと

って希望なんだよ」

ディアナの頬に添えていた手を首へと回したリドナーが自分の服が濡れるのもかまわずディアナの頭を胸へとそっと抱き寄せた。
リドナーからどこか懐かしい匂いをディアナは感じる。
それは記憶にもないほど昔の香り。
自分の事情もリドナーの思いも知らず、物心もつかない無垢な幼い時代。
無邪気に無意識に唯々何も考えずに、世界でもっとも安心できた場所の香り。

「……っぅ……ひっく……」

リドナーの胸の中でディアナは小さく嗚咽を漏らし出す。
自分が力があったから引き取られただけ。
このままでは家族と引きはがされるのではないか。
玖木姫桜という化け物によって与えられた心の傷。
ディアナの心の中にあった不安が一気に和らいでいく。
この人は……リドナーは……何があってもディアナを守ろうとしてくれると理解したから。

「悪かったね。こんな大事なことを黙っていて。あんたに信用してもらえなくて当然だよ」

「っぅ！？　ぅぅぅぅぅ！」」

違う。リドナーが謝ることではない。信じ切れなかった自分が悪い。
そう言いたくても言葉にならないディアナは、ただ必死に首を横に振ってリドナーの言葉を否定しようとした。

「あんたね……あの状態で身体を動かされたら風呂に落ちるに決まってるだろ」

抱きしめていたディアナが首を振ったことでバランスを崩して風呂の中に落ちたリドナーは、服も濡れてしょうがないと開き直って今はディアナと肩を並べて一緒に湯船に浸かっていた。
二人の服は既に汚れを除去して近くの木に掛けて温かい風を当てて乾かしている。
服が乾くまでの間、裸体でいるのもアレなのでとリドナーは湯に浸かっていた。二人で入っても足を伸ばせるほどに広く作っていたファランにはとりあえず感謝と胸の中で謝辞を述べる。

「ご、ごめんなさい」

伸び伸びと風呂につかっているリドナーとは対照的に、先ほどまで泣きじゃくっていたのが気恥ずかしいのか、横のディアナは顔を背け背を丸める。

「っふぅ。真っ昼間から風呂ってのは気持ちいいね。っとそうだ。放置しとくのも可哀想だね。ファラン！　あんたも入るかい！？」

「ち、ちょっと待って、師匠！？」

ゆっくりと伸びをしながら気持ちよさそうに身体を伸ばしたリドナーが、近くの大木の裏で見張りをしているファランに向かって、とんでもない事を言い出してディアナは慌てて振り向く。

「リドナー。余計な気を使うな」

リドナーとディアナのやり取りの間もずっと気配を殺して沈黙を保っていたファランも、さすがに放置できなかったのか低い声で返事を返した。

動揺する二人を尻目にリドナーは平然としたものだ。

「ん？　ほらあたしのわだかまりは解けたけど、あんた等はまだみ

たいだからね」

人の悪い笑顔を浮かべたリドナーが告げる。
気を使ってやったとでも言いたげだが、ディアナ達の慌てふためく姿を見て楽しんでいるのは間違いない。

「わ、忘れてた。こういう人だった」

最近の関係から失念していたが、リドナーの可愛がり方を思いだしてディアナはどんよりとする。
ともかくからかうのが大好きなのだ。今日リドナーに見せたディアナの失態や弱みは一生物のネタにされるだろう。

「あたしが忙しいときはファランが小さい頃のあんたとミオを風呂に入れてたんだよ。今更何を恥ずかしがるんだい」

「だ、だっては、恥ずかしいし、それにおじさん……お、怒ってるでしょ」

父親代わりといえ男性であるファランと一緒に風呂はこの年にもなるとさすがに恥ずかしい。
それ以前に先ほどファランに無視されたディアナとしては気まずいにもほどがある。
下手すればリドナーよりもファランの方が怒っているかも知れな

いのに。

「怒る？　あーさっきのあの態度かい。ないない。ありゃ気まずいだけだよ。だろあんた？」

手を横に振ったリドナーが、判ってるんだよとファランの方へと声をかける。

「……」

しかしファランは今度は沈黙を保ったままで何も返事を返さない。返答なしと見切りを付けたのかリドナーはディアナへと向き直った。

「まったく。しょうがないね父親は。娘の事となるとからっきしさね」

「ど、どういうこと？」

先ほどからのファランの態度は怒っているようにしかディアナには思えないのだが、リドナーから見ればまったく別の物に見えるようだ。

「ありゃあんたのこと目に入れても痛くないほどに可愛がってたからね。だけどあんたが出奔したときに叩いちまっただろ。あんたとミオがいなくなったのは自分の所為じゃないかってずっと気にしてたのさ。んでいざ目の前にしたら今度は嫌われているんじゃないかって不安で、どう話しかけていいのか判らずじまい。逆に女房のあたしの方は気にもしないんで苛立ってるってわけさ……まったくいい年した男が情けない」

情けないというわりには、ファランの心情を暴露するリドナーは実に楽しげだ。

しかもわざとファランに聞こえるか聞こえないかの小声で言っているところがまた性格が悪い。

ファランからすれば何を吹き込んでいるのか気が気でもないだろう。

「じ、じゃあおじさん。あたしのこと嫌ってないの？　こんなに迷惑掛けたのに」

「当たり前さ。この風呂だってそう。あたしは身体を拭ける程度の湯を沸かしといてもらうだけのつもりだったのに、こんな大層な物こしらえてるだろ。昔からあんたには甘いんだよ」

何を当然と言わんばかりにリドナーがディアナも知らなかった昔話を暴露し始める。

まだ小さかったミオレイドとディアナが初めて二人で街へと出か

けたときに、心配で姿を隠してついていった話。
同僚から娘が結婚して寂しくなったと愚痴を聞かされて、ディアナが誰かに嫁ぐ日を想像して一日中気を滅入らせていた日の話。
なら息子であるミオレイドと結婚してくれればいいと思い、聖人になるであろうディアナにふさわしい伴侶となるようにミオレイドを鍛えようとして怪我をさせて、リドナーに怒鳴られた話。

「終いにはあんたが聖人として異界に赴くときに悪い虫がつかないか不安で、ミオが魔導騎士になれなくて無理なら、自分が護衛の長を務めるって言い張るんだよ。まったく親バカここに極まれりって所かね。ただあたしとしてもファランが付いていくなら、余計な心配はしなくていいから反対はしなかったけどね」

「でもそれじゃ師匠とおじさん。また離れ離れになっちゃってたのに」

ディアナが聞いていた悪意有る噂。
ディアナとミオレイドを引き離すために、リドナーが聖人の勤めを果たせと強要していたというのとは真逆の物。
むしろディアナのために、リドナーとファランが離れる事になっていた。

「息子と娘二人が幸せになるためさ。親なんて踏み台で十分、まぁ、カルネイドは他の世界と比べて時の流れが速い世界だからね。あんた等は年齢が離れるかも知れないけどあたし等は逆に近付いたかもしれないね。爺の相手なんて勘弁だから丁度いいってね……っ

て、本当にもっと早くにあんたにいろいろ話しておけばって後々何度も思ったよ」

笑いながらリドナーが最後にぽつりと呟いた。

そうこれは仮定の話。

ディアナが出奔せずに、聖人として義務を果たそうとしていれば有ったかも知れない今の話だ。

これから先どうなるか、ディアナには判らない。

リドナー達はディアナを悪いようにはしないだろう。今は心の底から信じられる。

だがあの玖木姫桜がどう動くか判らない。

筑紫亮介を帰す気があっても帰せない状態にある以上、玖木の殲滅が現実で起こるかも知れない。

「まったくまだ不安かい。だからファランは怒ってないっての。うちの旦那はもしあたしが死んでミオがいなければ、あんたを後妻に迎えようとしかねないくらいにあんたのこと気に入ってるからね。まったく年下好きなロリコン旦那だよ」

ディアナの不安を勘違いしたリドナーが冗談めかして溜息をついたとき、ファランが隠れている木の方でがさっと音がした。

「いい加減にしろリドナー！　俺はそんな不純な気持ちでディアナを見た事などない！」

リドナーの冗談とは判っていたが、さすがにたまりかねたファランは身を隠していた木の後ろから姿を現し怒声をあげた。
姿を現したがディアナの方を直視しないように顔を背けているのが、ファランの性格でありディアナに対する気遣いだ。
元々幼なじみとはいえ十八才も下になったリドナーと結婚した当初は、いろいろと言われたのが今でもトラウマとなっているファランの弱点を、当の本人であるリドナーが容赦なく突いてくる。

「はいよ。なら黙ってようかね。後はあんたにおまかせさね。言いたい事あるんだろ。あたしは先に上がってクスノキの所に行ってくるよ。痺れを切らせて姫さんが暴れ出したら目も当てられないからね」

ファランをわざと怒らせて場に引っ張り出したリドナーは、後は我関せずとざばっと風呂から上がると、指を鳴らして身体に付いた水滴を文字へと変えて全てふるい落とした。

「っく。もうすこし時と場合を選べ。今でなくても良かっただろう

が」

仲を取り持とうとしてくれるのはありがたいがいくら何でも今はない。

リドナーの目論見通りに引っ張り出されたファランは唇を噛む。

いつも手玉に取られどうにも頭の上がらなかった幼なじみとの関係は夫婦になった今も変わらない。むしろ年齢を積み重ねる事に酷くなっているような気もする

「おじさん……」

リドナーから説明されても、やはり直接ファランからの言葉がなければ不安なのだろう。心細そうなディアナの声に、ファランは息を吐き出し一呼吸置いてから頭を下げる。

「すまなかった。あの時叩いてしまって。ディアナの不安をもっと察してやるべきだったのにな」

「ううん。今ならおじさんがあの時怒った理由が分かるから……謝るのは勝手に召喚するなんて言って、実際にやっちゃったあたしの方。ごめんなさい」

「いやしかし。あの時のディアナは事情を知らなかっただろ。ちゃんと説明していなかった……」

（全部のわだかまりは解けたと。クスノキには感謝だね。でもやっぱり警戒すべきは姫様の方じゃなくてあっちかね）

互いに謝りだしたファランとディアナを横目に、リドナーは服を着ながらこの先に打つ手を思案する。

謳われる実力と異名から玖木姫桜が恐ろしいのは判っていたが、問題はその姫君を従えている男の方。

楠木勇也にリドナーは脅威を感じていない。

力という点では楠木は警戒するまでもなく弱いはず。肩に乗っている縁という神からもたいした力を感じない。

しかしほんの数日でディアナの事情を調べ上げ、状況を予測し、もっとも効率的なえぐい手をつかって説得可能状況まで持っていた手腕を持っている。

簡単に懐に入り、いつの間にやら主導権を握り、流れを支配する。悪知恵が回る性格の悪い男。

楠木に対する評価からは警戒すべき男だと思うのだが、どうにも楠木にはそんな感情を抱けない。

つまりリドナーは楠木を信頼しているのだ。出会って間もない異世界人を。

異界を相手に交渉をする役割であるリドナーにそう思わせる手管が恐ろしい。

そしてさらに恐ろしいのが楠木の方もリドナーを信頼しているということだ。
違法召喚を起こした世界の召喚管理をする役割にあり、その違法召喚主であるディアナの師であるリドナーを。
もしリドナー自身が同じ立場であれば、そのような人物を信頼し最後の詰めなど任せはしない。自分で最後までやろうとするだろう。

（まったくニホンって国は敵にしたくないね。あんな化け物共を抱え込んでいるんだから）

姫さんと一緒にしないでくれと嫌がる楠木の顔を思い浮かべながら、リドナーは湯に浸かる。
ディアナの話では召喚によって攫った筑紫亮介を返す気はあるが、筑紫自身の状態が一筋縄ではいかないようだ。
帰したいけど帰せない。
筑紫の状態がどれだけ難しい状況なのか、異界関連事項管理者であるリドナーには簡単に予想が付く。
それは楠木達にも変わらないだろう
現状では今は返還不可能と言われて楠木がどういう手に出るか、リドナーは読み切れずにいた。

「まぁ何とかなると思うんで。だろ縁様？」

大分待ちぼうけを食わされた楠木だったが、戻ってきたリドナーから話を聞いて特に問題なしだと頷いた。

事が荒事ならともかく、奪還であるならば自らの専門分野。召喚者の送還不備程度でうろたえていては奪還者など名乗れない。

「ふん。できるじゃ。楠木。貴様は妾の力を疑っておるのか」

もっとも肩の縁はそれも不満のようだ。

できて当たり前。不安など微塵もないと強気な声で楠木の耳を引っ張った。

『思ったより軽いね。あんたら』

まさかここまで簡単に問題なしと言われると思っていなかったリドナーが呆れかえっている。

「大丈夫ですよリドナーさん。楠木様と縁様は基準がおかしいので。私共が無理だと思ってもいつも何とかしてしまいます」

リドナーの様子に姫桜はクスクスと笑いながら答える。こと奪還であれば楠木達に不可能はないとでもいいたげだ。

もっとも姫桜の楠木達に対する信頼は虚構の物ではない。実際に目にし、自らも関わったからこその信頼だ。

「じゃあとりあえず嬢ちゃんとファランの旦那と合流して村に行きましょうか。サボってないでそろそろ仕事しないと縁様に怒られますし、姫さんのご期待に応えなきゃいけないんでね」

軽薄な口調で楠木は右肩の縁に向かってにやりと笑い、左肩に担いでいた竹刀袋を担ぎ直した。

奪還篇　山奥の名医？

ディアナの先導で木々に囲まれ薄い霧の掛かる山道を進んでいた楠木の眼前に鋭い棘を持つ蔦でできた壁が現れる。
一本一本が巨体である楠木の腕ほどもある太い蔦が幾重にも絡まり五寸釘のような棘が飛び出て頑丈な防壁となっているようだ。
壁は道沿いに緩やかな湾曲を描きながら霧の向こうまでずっと延びている。

『蔦壁か。ディアナこれはあんたかい？』

『うん。昔は獣除け用に立派な土壁があったんだけど、あたし達が来たときにはほとんど崩れていて、お金もなくて修復もできないからって、だから術でちょっと。もう少し先に門があるから』

リドナーの質問に答えたディアナが、霧の向こうにうっすらと見える壁から飛び出た高い影を指さした。
その指さす先に進むと立派な物見櫓付の煉瓦のような物を積み重ねた門と、楠木の倍ほどの大きさの木の扉が姿を現す。
煉瓦は風雨に表面が削られているが一つ一つに細やかな装飾が施されていた痕跡が残り、門を塞ぐ扉も過ぎた年月を感じさせる艶を放つ。
周囲に広がる蔦の壁と壁の向こうから伝わってくる人気の無さも相まって、何処か古代の遺跡のような景観となっていた。
門構えから見るにディアナから聞いていた通り昔は栄えていた村なのだろうが、街道が変わった事で今はほとんどの人から忘れ去ら

れてしまったのだろう。

『昼間は門は開けてるのに……すぐ開けてもらうからちょっと待ってて』

門が閉まっていた事に訝しげな顔を浮かべたディアナが物見櫓から外に下がっていた大きな紐を引くと、上の方からがらんがらんと鈍い鐘の音が響く。

霧の中に開門を知らせる合図が響くと門の内側からざわざわとした声や人の気配が聞こえてきた。

どうやら門の向こうに少数だが人が集まっているようだ。

「なぁ姫さん。つかぬ事を聞くんだけど……あの婆さんどうした？」

そこはかとなく中から伝わってくる警戒心に、ディアナと接触したときに幻術と入れ替えた老女のことを姫桜へと楠木はそっと尋ねる。

「桜真に村へとお連れするように指示を出しておきましたので大丈夫だと思いますよ」

「桜真か。なら大丈夫か。あいつ老人と子供受けはいい……姫さん。あいつ大きさどのくらいで呼んだ？」

クスクスと笑いながら返す姫桜の回答に一瞬安堵を覚えかけた楠木だったがその頬に微かに朱が差していることに気づき、一つの可能性に思い至る。
姫桜と本当に血が繋がっているのかと疑いたくなるほどのお人好し……もとい、人の良い性格は兎も角として、今は桜真が姿形が鬼になっていたことを思い出す。
異形の存在である鬼ならば、優菜達の前に姿を現した縁サイズから、巨人と呼べる巨大サイズまで自由自在だ。

「運びやすいようにと3メートルほどでしたでしょうか」

「あぁ……そりゃ騒ぎになるわ」

武芸百般に通じ技量に優れた桜真といえど、三メートルの巨体で人一人を抱え込んだまま隠密行動をとれるはずもない。
おそらく老女を連れてきたときに村人に姿を見られたのだろう。
3メートルを超えた見た事もない鎧姿の巨人に連れられた村人。警戒するなという方が無理だという物だ。
そして姫桜に気遣いをしろという方はもっと無理だ。
人が驚き戦く感情は姫桜の好物。今も村の中から漂ってくる警戒する気配に蕩蕩とした心地よさを覚えているようだ。

『ゼン爺。あたし！　なんかあったの！？』

呑気に会話を交わす楠木と姫桜とは対極的に、いつもと違う様子にディアナが不安げな声で門の内側へと大声で呼びかける。
すると上の櫓から人の顔がひょっこりと出て下をのぞき込んできた。
しかしその人物の顔は老人などではなくもっと若い少年と呼ぶべき年の顔つきだ。

『ディアナ！？　よかった。無事っ！……母さん。それに父さんまで！？』

ディアナの姿を見て安堵の声をあげた少年だったが、その脇と後ろに控える人物達をみて驚きの表情を浮かべる。

『おや馬鹿息子。元気そうだね』

リドナーが顔を覗かせていた少年をじろりと睨む。
ファランは特に返事を返さず、ただ感慨深そうに少年の姿を見ていた。
おとなしそうな外観とリドナーに似た色のルビーのような質感の目。そしてファランと同じ燻った茶色の髪。
この少年がどうやらリドナー達の息子でありディアナと一緒に逃げたミオレイドのようだ。
１２才で駆け落ちをするような大胆なことをしでかすようには到底思えない。学者風の少し気の弱そう印象を楠木は感じる。

『ミ、ミオ君！　よ、よかった。ほんとに無事だったんだ』

ミオレイドの姿を見てディアナがあられもなく泣き出す。
いくら口で幻だと言われていても、本人を見るまでは何処か不安だったのだろう。

『ディアナ！？　……母さん。一体何をしたんですか？　リーナさんを連れてきた巨人も母さんの仕業ですか』

泣きじゃくるディアナの様子に不審げな顔を浮かべたミオレイドが、リドナーを真正面に捉え見つめる。
睨みつけるようなその顔からは、先ほどまで楠木が抱いていて気弱そうな印象が薄れ、守る者を持つ男としての顔を覗かせている。

『おや一丁前の男の顔ってのができるようになったようだね……母親としてその過程をみられなかったは複雑といっておこうか』

『母さん。答えていただけますか』

息子の態度に僅かに目を見張ったリドナーが、一見感心したかのような素振りを見せて煙に巻くが、ミオレイドはリドナーのペースに乗る様子は見せず、強い声で再度問いかける。

『ディアナのそれやら巨人はあたしじゃないよ……あたしよりおっかない存在。チクシリョウスケを迎えに来た異界のお客人に罰を喰らったのさ』

肩をすくめたリドナーが後ろを振り返りちらりと姫桜へと視線を飛ばすと、姫桜がクスクスと笑って返す。

『っ！？　……先生の世界の人ですか』

筑紫亮介の名前を聞いた瞬間、ミオレイドの顔が強ばる。
その一言だけでおおよその事情を察したのだろうか。

『数多の世界に響く『鬼の戒め』。怖い物知らずのディアナには良い薬さね。ちょいときつかったけどどね……さて』

グズグズと安堵の泣き顔を浮かべているディアナの背を軽く撫でてやっていたリドナーが表情を引き締めた。
母と子の会話はこれで終了という意思表示だ。

『とりあえず落ち着ける場所で話そうじゃないか。その馬鹿弟子の行為がどんだけ危ない事だったかも含めてね……ミオレイド・ヒルディア。１２聖人が一人リドナー・ヒルディアの命令だ。門を開けな』

リドナーが有無をいわせぬ強い意志の籠もった声で勧告を下した。

霧の中に響く軋む音を立てながら扉が外側へと開いていく。
門が完全に開いたところでディアナを先頭に楠木達は門をくぐる。
門を抜けた先は小さな広場となっていた。
右側には櫓へと登るためのハシゴが立てかけられ、その脇には扉の開閉用とおぼしき機器と文字が浮かぶ一握りほどのガラス玉が接続されている。
左側には、旅人用の足洗いもしくは運搬動物の水場でもつかっていたのだろうか、涸れた水場。
薄い霧の向こうには、平屋の家々がちらほらと軒を連ねているが数が少なく、静まりかえっている雰囲気も合わせて、どこかもの悲しさを覚える。
先ほど顔を覗かせたミオレイドと老人と老女が門のすぐ側に集まっており、門をくぐってきた楠木達を不安と物珍しさが混じった顔で見ていた。
ミオレイドが飛び出してくると、ディアナへと駆け寄り抱きしめる。

『大丈夫。怪我とかしてない？』

『うん。ごめんねミオ君……心配かけて。大丈夫だから。ゼン爺もカナ婆ちゃんもごめん』

少し照れているのかぐずりながらも僅かに頬を染めたディアナが、ミオレイドや老人達に頭を下げ謝っている。

『ディアナ様。ご無事だったようで。よがったよ』

ゼン爺と呼ばれた皺だらけの老人が人の良さそうな笑顔を浮かべて、ミオレイドに抱かれるディアナへと笑いかけた。
老人の姿をみたディアナはミオレイドの腕から抜け出ると老人の手を握る。

「ふぇ……ゼン爺。ぐす……生きてるよね。皮と肉だけになってないよね。ちゃんと骨あるよね」

姫桜の幻覚がトラウマになっているディアナは何度も手を握りしっかりとした感触を返すか確認しはじめた。

「どうしただディアナ様？　儂は先生と若先生のおかげでぴんぴんしとるでよ」

ディアナの突然の行動に困惑した顔を浮かべた老人がミオレイドに目で尋ねる。
しかしディアナの身に起きたことが判っていないミオレイドの方も答えようがない。

『ゼンさん好きにさせてあげな。ディアナ様随分怖い目あったみたいだんで。ところで若先生、そちらの方々がぁ？　聞いてりゃけど紹介してもらえんかねぇ』

固まっている男二人を見かねたのか、痩せた骨と皮ばかりの老女が仲介に入り、紹介してほしいと楠木達を視線で指し示す。

『はい……僕の父と母です。それにチクシ先生を迎えに来た方々だそうです』

ミオレイドの紹介に老人達がざわめくとリドナーが一歩前に踏み出した。

「ご老人方お初にお目に掛かる。十二聖人が一人『四月の書』リドナー・ヒルディアだ。私の後ろに控えるのが魔導騎士ファラン。後ろのお二人と肩の小っちゃな御仁が異界のお客人だよ」

背後のファランと、その横に控えた楠木達をリドナーを一人一人指し示してリドナーが紹介する。

『これはこれはようこんな辺鄙な村まで。生きとる間に聖人様お二人にお目に掛かれるなんてぇ光栄ですわ。それに異界の方まんで、長生きはするもんだで』

驚きの顔を浮かべた痩せた老女がしみじみと呟きながら目を見張る。

現世日本で言えば聖人とはその国の最高指導者とも匹敵する存在。早々目に掛かる者ではない。

そしてカルネイドでは知識を導入する関係で異界の存在は知られていても、異界から訪れる人は少ないのだろう。

『お客人は兎も角、あたし等はそんなたいした存在じゃないさ。息子と娘が散々に世話になっているようで恐縮するのはこっちの方さ』

『リドナーの尊大だ。まったく……夫婦共々に深く恩義を感じています。ミオレイドとディアナをお助けいただきありがとうございます』

恐縮した様子を見せる老人達にリドナーがふっと微笑みを浮かべ深々と頭を下げ、後ろに控えていたファランが咳払いをして注意し言葉を改めて老人達へと礼を述べる

頭を下げるリドナーとファランの様子に、ミオレイドとディアナがばつの悪い顔をうかべた。

リドナー達が出奔したミオレイドとディアナの二人を強く心配し

ていた事。
そして行き場のない二人を快く迎えてくれたであろう老人達に対して心より感謝していること。
親の心子知らず。
自分達の行いが剛胆なリドナーにさえ強い負担を与えていた事に改めて気づいたのだろうか。

『頭あげてくだされリドナー様。ファラン様。むしろ世話になっとるのは儂らのほうだで。ディアナ様が村の修繕をいろいろやってくださる上に、チクシ先生を呼んでくださって。んで若先生がチクシ先生に師事して薬をいろいろこさえてくれるんで村人全員が助かっとるんよ』

リドナー達の謝辞に老人達は申し訳ないといった顔を浮かべて何度も頭を下げ返す。
互いに礼を述べ合う緊張感が薄れた光景を見て楠木は肩へと目をむける。

「まったく。小っちゃいは余計じゃ」

楠木の肩に腰掛けた縁が釈然としない顔を浮かべぼそっと文句を吐き出していた。
どうやらリドナーの言葉が気に障っているようだ。

「抑えて抑えてせっかくいい雰囲気なんで。それに筑紫先生も無事

のようですから」

召喚被害者である医師筑紫亮介はどうやらディアナ達に協力的のようだ。

状況は悪くない。不幸中の幸いだ。

そう思い楠木は心をさらに奮い立たせる。

自分は復讐者ではない。奪還者である。

どのような事情。

例えそれが世界を救う為だとしても、異なる世界から対価も無く、本人の同意も得ずに略奪する違法召喚は”絶対”に正しくない。

攫われた者と奪われた者達の縁を取り戻す。

奪われた者達の嘆き悲しみ怒りを深く知るが故に選んだ一本の真っ直ぐな道。

だが怒りに支配されてはこの後の一番重要な儀式。召喚者奪還は成し遂げられない。

異なる世界の者達の中でも、現世へと災いをもたらす者を魔と呼ぶ。

その魔を現世より祓いのける古今無双退魔神刀『縁斬り』としての異名が、縁のもっとも有名な代名詞

過去の縁の神官にして継承者達は、怒りと悲しみに飲まれ縁を振るい続けてきた。

怒り悲しみを背負うからこそ偽なる『縁』を断つ力となる。

だがそれだけでは足りない。

縁の真名は救心神刀『退魔捜世救心縁』

喜怒哀楽。

喜び楽しみを知りそれを大切に思うからこそ、切れてしまった真なる『縁』を紡ぐ事ができる。

偽りを断ち、真を紡ぐ。
それが楠木の在り方だ。

猟や畑仕事に出ている他の村人も呼んでくるという老人達に対して、それはまた後ほど用事が済んだら改めて挨拶させてもらうとリドナーが軽い断りを入れ、ディアナ達が今現在居住するという診療所兼住居へと向かう事となった。

村の中には楠木が最初に感じた通り人気が少ない。

猟や畑仕事に出ていることを差し引いて考えても活気が少ない。

長い事空き家となっていたとおぼしき朽ちかけた建物も、ちらほらと見受けられる。

新しい街道ができて、人や物の流れが変わり、便利な街へと若い者が次々に出て行き、残るのは年寄りばかり。

過疎化し地域社会の機能が著しく低下した状態では、いろいろな物が不足がちになっている事だろう。

「なるほどね……この世界でもあんまりこの辺は変わらないか」

今の日本の山間部と似た風景を、異世界の村で楠木は感じる。
被害者である筑紫亮介は若いときは最貧国に、日本へ帰国してからも限界集落が数多く存在する過疎地域へと自ら志願して赴任するような医者であったという。
この村の現状を見て、筑紫亮介という医者がどのような感情を抱くのか。
先ほどの老人の話もある。想像するのはそう難しくはない

「縁様……呼応してるかもしれねぇな。その場合ちと説得が面倒だな」

あごに手を当てた楠木は微かに眉を顰める。
異界に新たなる家庭を築いた者。
現世で叶えられなかった夢や栄光を掴んだ者。
純粋に召喚者の境遇に共感を覚え助力しようとする者。
理由はそれぞれの事情で異なるが、　召喚者の中には現世への帰還を拒む者も度々現れる。

「ふむ……楠木。妾は好まぬがあの戯け異神に予測状況を送れ。あやつの副業の出番やもしれん」

縁も同じ考えに到ったのか極めて不機嫌な憮然とした顔を浮かべ

ながら楠木に命じる。
縁が言うのは特三の管理である金瀬八菜。
彼女は交差外路の管理人である以前に、もう一つの顔を持つ。
それが異世界派遣業の総元締めという縁が嫌う役目だ。

「はい了解です」

縁へと軽く返事を返した楠木はポケットから携帯を取りだし手早く指を動かす。
瞬く間に状況報告のメールを製作した楠木は世界間交信状態へと変えて、メールを八菜へと送った。
公私共々いろいろと忙しい相手ではあるが、その処理能力は文字通り神懸かっている。
しばらくすれば返事が返ってくるだろう。
楠木が携帯を折り畳んでしまうと同時に先頭を歩いていたミオレイドの足が止まった。

『つきました。ここです』

ミオレイドが案内したのは、元々は宿屋か商店につかわれていたのか平屋ばかりの村の中では目立つ二階建てとなった建物だ。
建物の横には庭が広がり小さな菜園らしき物もあった。

「あら楠木様。あれはヨモギでしょうか？」

庭の菜園へと目をむけていた姫桜がそこに植えられた植物を指さす。
姫桜の指さす先には裂けた形状の裏側には産毛が生える深い緑色大きな葉が特徴的場草が生えている。
しかし野草の知識を持たない楠木にはそれがヨモギなのかと聞かれても答えようがない。
ヨモギと聞いて思いつくのは縁が好きな和菓子屋の一つ三百円もするやたらと高いヨモギ饅頭くらいだ。

「ん？　縁様。判るか？」

鑑定をあっさりと諦めた楠木は、肩の縁に答えを委ねる。

「蓬で間違いない。妾達の世界に関わり合いのある者。筑紫亮介がここにおるのは確かなようじゃな……それよりも楠。蓬くらい判らんのか。妾に聞けばどうにかなるなど楽を覚えおってからに。この木偶の坊が」

「いやほら高校中退で頭が悪いから。博識の縁様のおかげで助かってますよ」

苦笑気味に答え楠は頬を掻く。
仕事関係や剣道関連ならともかくそれ以外となるとどうにも疎く、かといって勉強する時間もない楠木にとって、長く生きているため

幅広い知識を有する縁をある意味便利な辞書。
それを縁も判っているのか不満げに楠木の耳を引っ張った。

『皆さん此方へ。先生は居間の方にいらっしゃいます』

「はいよ。いよいよご対面か」

そんなやり取りを小声でしている楠木達に、何を話しているのだろうと不安げな様子を見せながらミオレイドが手招く。
まさかこんな呑気な話をしているなど夢にも思っていないだろうと、楠木は苦笑を浮かべながら後に続いた。

『おんやぁ若先生。ディアナ様おかえんりぃ』

ミオレイドとディアナの二人が先に居間に入るとのんびりとした老婆の声が部屋の中から響いた。

『いきなー気づいたら村ぁだで、わてぇもえろう驚いたんよ。なんかぁ巨人に運ばれたらしいけど覚えたらんしぃ、ディアナ様になんかぁあるんか心配して若先生も慌てたご様子んだったんよぉ』

『うわーん！　よかったリーナ婆ちゃんも生きてる！　もう会えないかと思ったよぉ！』

『どうなさったんよぉディアナ様？……そちらの方はどちらさんでぇ？』

楠木達が部屋の中に入ると日当たりの良い窓際で椅子に座っている老婆にディアナが抱きついていた。
老婆はどうやらミオレイドの代わりに留守番をしていたようだ。
その膝の上には一歳くらいだろうか。小さな幼児が抱きかかえられている
その幼児は泣いているディアナを不思議そうに見ながらも、自分の身体ほどもある大きな本をぱたぱたと開いたり綴じたりして遊んでいる。

「あらあら感動的な場面ですね」

うれし泣きをするディアナを見ながら姫桜がクスクスと笑う。
自分がディアナをそこまで追い込んだというのに、全く罪悪感を感じさせないほほえましい顔だ。

「ふん。諸悪の根源が白々しい……それよりも楠木。あれが筑紫亮介のようじゃ」

鼻を鳴らして姫桜を睨んでから、優菜達から受け取った縁を感じ取った縁が老婆の膝の上を指さす。

縁が指し示すのは本を抱えた赤ん坊だ。

「幼児化ね。人間状態ならそこまで戻すのは難しくねぇか」

なるほどこれがディアナが言っていたすぐに返せない理由か。

だがこの程度の変化なら戻すのは容易いと楠木が安堵の溜息を吐こうとした所でミオレイドが申し訳なさそうに声をかけてくる。

『あのすみません……あれは僕とディアナの息子で……そのチクシ先生は。息子が抱えている本の方なんですが』

ミオレイドの言葉に敏感に反応したのは楠木ではなくその両親だった。

さすがに予想外だったのかリドナーが額を抑えながら、ミオレイドとディアナを睨み、ファランがぴっしと固まっている。

『男の顔じゃなくて父親の顔かい……ガキ共がガキ作ってたと。親にあれだけ心配かけている間に自分達はよろしくやってたと』

沸々とした怒りを抑えようとしているリドナーの声にミオレイドとディアナの二人が萎縮して身を縮めた。

『ディアナ……あたしと久しぶりに顔を合わせたときにそんな事を伝えようともしなかったねぇ』

リドナーが言うのは、ディアナを最初に捕縛しようとして返り討ちにあったというときのことだろうか。

『だ、だってあのとき師匠。お、怒ってたから。赤ちゃんが生まれたって、いえる雰囲気じゃ』

実力的にはディアナの方が勝っているが、リドナーの怒りが極めて強い事を察したのか、ディアナが後ずさりミオレイドの影に隠れる。

『……クキの姫さんだけで勘弁してやろうかと思ってたけどそうもいかないみたいだねぇ』

『落ち着け。今は他にやる事がある……それに男女の仲だ。少し早すぎただけだと思おう』

ククと喉の奥で笑い凄味を増しその真紅色の目が強く輝いているリドナーの肩を優しく叩いたファランがなだめる。
その口調は部下として仕える者としてではなく、夫としてまた父親としての物であった。

「とりあえずリドナーさん、ファランさんよ。お二人さんに初孫おめでとうと祝いの言葉を送らせてもらうわ……んで肝心の被害者は姿が本になってると」

古いハードカバーに使われている動物の皮のような表紙。
縦横の長さは雑誌ほどで厚さはさほどなく薄く、幼児ですら持てる程度には軽い一見なんの変哲もない古びた古書。
これがカルネイドにおける筑紫亮介の姿。
少し厄介なことになったと思ってはいるが、楠木の心にはさほどの驚きはない。
大観衆の前から消えた歌姫は、言えず動かず無反応の石像となっていた。
都市一つ分の人命が変化したカジノの高額チップ。
魔王城と化していた某国のミサイル搭載潜水艦通称ＢＯＯＭＥＲと、滅びの雷と恐れられていた核弾頭搭載ＳＬＢＭ。
洗脳怪電波を垂れ流す龍として暴れまわっていた対東京タワー奪還戦。
過去の奪還対象達を思い浮かべ、楠木はこの程度はまだ序の口だとにやりと笑って見せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2532r/

特三捜救

2011年10月12日03時01分発行